

# 第3部 兵器図鑑

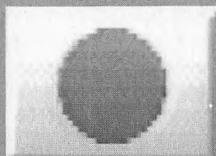
THE WEAPON FILE

文◎後藤仁／望月隆一



1945年2月、太平洋戦争最大激戦地の硫黄島で出撃準備中の米M4シャーマン戦車。

# 大日本帝国



大日本帝国の軍隊は、日露戦争後、基本的に陸軍が対ロシア（後ソ連）、海軍が対アメリカを仮想敵国として整備、編成されていた。

したがって太平洋戦争においては、対アメリカだった海軍はともかく、陸軍はアメリカ軍と戦うことは寸前までほとんど考えていなかった。陸軍と海軍の仲が悪いのはどこの国でもあることのようなが、大日本帝国においては犯罪的とまで言い得るほど関係が悪化しており、対アメリカの矢面に立たされた海軍は内に陸軍という影の敵を抱えていたと言えるだろう。この他、全体に客観的な状況認識能力が甘く（欠如していたとも言える）、情報収集と管理に対する認識が列強各国の中でもっとも遅れていた。軍隊組織も士官学校（海軍は兵学校）の席次が何よりも優先されるように年功序列化し、柔軟な編成や抜擢を不可能としていた。

一般兵士レベルでは勇敢で、よく訓練されれば手ごわい敵となったが、使用兵器が旧式か時代錯誤的、あるいは戦術や弾薬などのソフト面での不備などの理由により、太平洋戦争初期の進攻期を除いてほとんど有効な活躍することはなかった。

航空機はようやく欧米の模倣から脱却し、独自の設計による航空機が完成し始めたばかりの時期で、太平洋戦争を戦った零戦や隼などは、第2世代といえる国産機群であった。しかし、設計のレベルでは世界に肩を並べたとはいっても、大馬力エンジンの開発は遅れ、またプロペラなどの一部部品は最後まで外国のコピーもしくはライセンスを使用していた。無線機や機上レーダーは最期まで使いものにならなかった。

対アメリカ戦を睨み整備されて来た軍艦は、性能的には第一級の戦闘性能を誇るものが多く、一部造船技術は現在でも通用するほど進歩したものになっていた。また“月月火水木金土”と歌にあるように兵の練度は高く、当初に思い描いていた短期戦、日本近海での艦隊決戦が起これば、それなりの戦果を挙げた可能性はある。艦船の航続距離が全体に短いことは、長距離進攻と占領地の維持を目的としていない現れである。が、戦争の様相が、長期持久となり、1944年、米軍が反攻により、マリアナ沖とフィリピンで決戦が行われたときには、すでに兵力差は10：3となつては如何ともしがたかった。また、射撃管制などのシステム面の整備はやはり遅れていたといえる。

全体にこれらの遅れは、軍備を優先とした産業育成が中心であった日本経済の体質に原因があり、科学技術や国内需要に対する支援育成は後回しが無視されていたためだといえる。このように極めてバランスを欠いた産業体質をもって、日本は太平洋戦争に突入したのである。

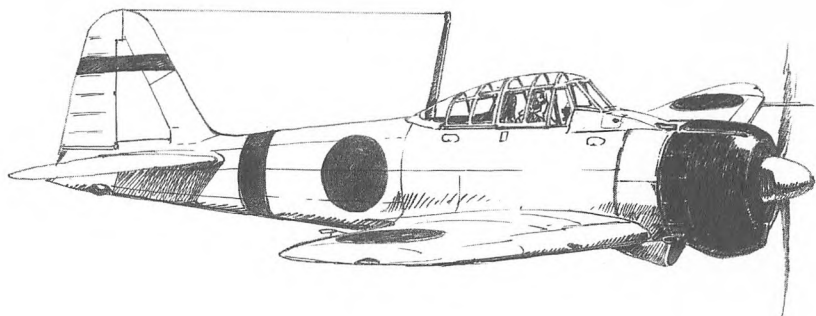


Mitsubishi A6M Type0 Carrier Based Fighter

## 三菱零式艦上戦闘機

大戦を通じて主力だったゼロ・ファイター

全長	9.06m
全幅	12.0m
出力	940hp
全備重量	2,410kg
最大速度	539km/h
武装	20mm機銃×2 7.7mm機銃×2 60kg爆弾×2



「ゼロ・ファイター」としてあまりにも有名な零式艦上戦闘機は、太平洋戦争開始時の日本海軍の主力戦闘機であり、強力な武装と長大な航続力、上昇力と軽快な運動性能を有し、大戦を通じて主力として使用され続けた戦闘機であった。開発は1937年から始まったが、前作である九六式艦戦の成功に気を良くした海軍の要求は過大なものであった。当時の日本の技術では大馬力エンジンが調達できず、その要求を満たすために徹底的な軽量化が図られた。1,000馬力級戦闘機としては究極の軽量化に成功している。しかし、この軽量化は防弾装備などを犠牲にして得られたものであり、大戦が進むにつれ、防弾装備の欠如が逆に零戦の悲劇となった。

最初に生産された一一型は、中国大陸で活躍した機体で、艦上戦闘機ながら着艦のための機装が施されていなかったのが特徴である。

続いて生産された二一型は、一一型を空母上で運用できるよう改修したタイプで、大戦初期の主力として、太平洋戦争開始時のゼロ・ファイター伝説を作った。1942年に入って

生産された三二型は、待望のエンジン強化型であったが、二一型の翼端をカット、スピードアップを図ったものの期待したほどの速度上昇もなく、折から発生したガダルカナル戦では翼端カットによる航続距離の不足が指摘され、早々に退けられてしまった。

この三二型の航続力強化型が二二型で、再び翼端を二一型と同様のものに戻しており、性能的には最もバランスの取れたものになっている。

1943年末になると欧米では2,000馬力級戦闘機が続々と就役、したいに零戦を圧倒するようになるが、後継機の開発の遅れから、少しでも性能をアップする試みがなされ、五二型が登場する。この型では再び翼端をカット、推力式排気管の採用で最高速度は565km/hを発揮したが、この頃の欧米の2,000馬力級戦闘機は600km/h後半～700km/h台の最高速度を誇り、すでに太刀打ちできるものではなかった。後継機開発の遅れにより大戦を通じて使用されたことが、零戦の悲劇性を高めたと言えるだろう。

Mitsubishi A7M Carrier Based Fighter "Sam"

## 三菱艦上戦闘機 烈風

登場が遅れた真の零戦の後継機

全長	10.984m
全幅	14.0m
出力	2,200hp
全備重量	4,720kg
最大速度	628km/h
武装	13mm機銃、20mm機関砲 ×各2、30kg-60kg 爆弾×2

1942年、零戦の後継機として試作が指示された機体。零戦の成功に気を良くした海軍が速度性能の向上とともに運動性能も維持するよう要求、設計は中途半端なものになり、選定エンジンの性能不足もあって開発は進まなかった。ついには不採用とされたがエンジンを三菱のハ四三に換装したところほぼ所定の性能を発揮し、1945年2月に烈風一型として正式採用された。しかし空襲や地震の影響によって終戦までに8機完成したのみだった。

Mitsubishi J2M Interceptor "Jack"

## 三菱局地戦闘機 雷電

上昇性能に優れた防空戦闘機

全長	9.695m
全幅	10.8m
出力	1,800hp
全備重量	3,499kg
最大速度	611km/h
武装	20mm機銃×4 60kg爆弾×2

零戦を手掛けた堀越技師が零戦に続いて設計した防空戦闘機で、1942年1月に試作機が完成した。当時の日本は小型で大馬力のエンジンがなく、爆撃機用の大型エンジンを採用、空気抵抗を減らすために流線形にまとめた機体はずん胴となった。機体形状からくる視界の悪さやエンジンの振動問題に悩まれ、実戦配備は遅れた。日本海軍の実用戦闘機では、唯一600km/hを越える最高速度を誇る。生産機数は約470機であった。

Kawanishi N1K2-J Interceptor "George"

## 川西局地戦闘機 紫電改

水上戦闘機を元とする迎撃戦闘機

全長	9.346m
全幅	11.99m
出力	2,000hp
全備重量	4,000kg
最大速度	594km/h
武装	20mm機銃×4 60kg、250kg爆弾×2

紫電改は、水上戦闘機強風から発展した局地戦闘機紫電の改良型で、紫電の欠点であった中翼形式を改めた機体である。正式には紫電二一型という。20mm機銃4門、誉エンジンを装備して最高速度は594km/h、自動空戦フラップの採用により高い運動性を誇る。太平洋戦争末期に紫電、紫電改で編成された三四三空の活躍で、日本海軍の有終の美を飾った。生産機数は約400機。開発の進まない烈風に代わり、艦上戦闘機型も考えられた。

Kyusyu J7W1 Experimental Interceptor "Shinden"

## 九州一八試局地戦闘機 震電

間に合わなかった高速迎撃機

全長	9.76m
全幅	11.114m
出力	2,030hp
全備重量	5,272
最大速度	750km/h (計画)
武装	30mm機関砲×4 30kg-60kg爆弾×4

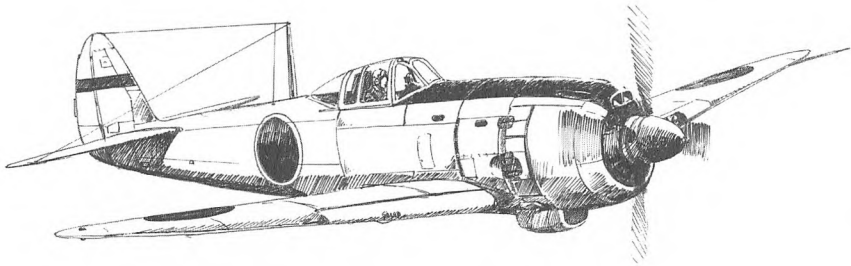
エンテ翼という、珍しい形状の戦闘機。1942年に提出された鶴野大尉のエンテ翼構想を元に、1944年九州飛行機で一八試局地戦闘機震電として試作が開始された。当時としてはラディカルな設計であり、最大速度は750km/hが期待された。1945年8月に試作1号機が完成して試験飛行が行われたが、全速飛行試験の前に終戦、その性能は幻のまま終わった。震電のエンジンをジェット化する計画もあり、これは震電改と呼ばれるはずであった。

Nakajima Ki-84 Type4 Fighter "Frank"

## 中島四式戦闘機 疾風

エンジン不調に負けた大東亜決戦機

全長	9.74m
全幅	11.238m
出力	1,990hp
全備重量	3,890kg
最大速度	624km/h
	12.7mm機銃×2
	20mm機関砲×2
	250kg爆弾×2



1941年、陸軍は中島飛行機に、キ43（隼）とキ44（鍾馭）の長所を取り入れた新型戦闘機の開発を命じた。2,000馬力級としては世界最小のハ四五（誉）エンジンを使用し、直線テーパー翼、蝶型フラップ、かなり前方に設置された水平尾翼など、中島製戦闘機の集大成的な機体となった。防弾ガラスと防弾鋼板による装備もあり、初めから量産性を考えで作られていた。

1943年に完成した試作機は最大速度624km/hを記録、翌1944年3月に四式戦闘機疾風として正式採用された。増加試作機は83機作られ、これらで編成された部隊が中国戦線へ出撃、米陸軍の最新鋭機P-51と戦って一時的に制空権を奪い返すなどの活躍を示した。このため大東亜決戦機として期待され、1944年3月の採用から終戦までの短い期間に3,372機（諸説あり）という、日本軍機として零戦、隼に次ぐ第3位の生産数が作られた。

しかし、搭載していたハ四五エンジンは当時の日本の手に負えるエンジンではなく、資材の材質低下や熟練工の不足などにより、量産型は所定の性能を発揮するものは少なく、

故障も多かった。そのため前線での実働率は40%程度と伝えられ、五式戦と同じハ——五エンジンに換装することも考えられたほどである。とはいえ一部の部隊は品質管理など整備法を確立して部隊定数機の稼働率100%を達成した所もあり、完調の疾風は手ごわい敵となった。

疾風はその武装により甲（20mm機関砲×2、12.7mm機銃×2）、乙（20mm機関砲×4）、丙（20mm機関砲×2、30mm機関砲×2。試作のみ）丁（斜め銃装備型。試作のみ）の4種あり、甲型が最も生産された。また、機体を木製とした疾風（キ106）も試作されたが、少数機作られたにとどまっている。まず中国戦線に投入された後、生産型で編成された部隊はフィリピン、沖縄戦、本土防空戦に投入され、終戦まで使用された。

戦後、米軍に調査された疾風は高オクタン燃料の使用によって日本側の記録を大きく上回る最大速度689km/hを記録し、空戦性能も中高度ではP-51を凌ぐとの評価を受け、米軍をして第二次大戦最良の日本戦闘機と言わしめた。



Kawasaki Ki-61 Type3 Fighter "Tony"

## 川崎三式戦闘機 飛燕

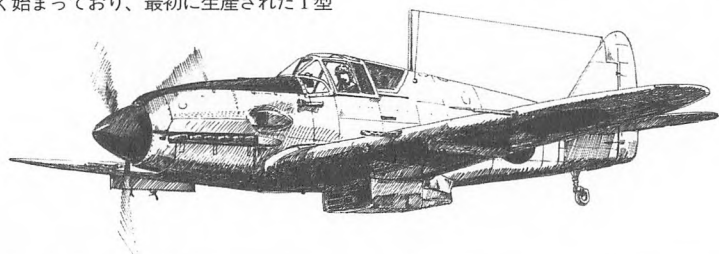
日本陸軍唯一の液冷戦闘機

ドイツのDB601Aをライセンス生産した液冷エンジンハ四〇を装備した機体。急降下性能が高く、防弾装備も優秀であったが、エンジンの工作精度が悪く、また整備に手間がかかるため、支援態勢の良くない前線に派遣されると戦力にならない機体が多かった。

1943年に正式採用されたが生産はそれより早く始まっており、最初に生産されたI型

全長	8.94m
全幅	12.0m
出力	1,175hp
全備重量	3,460kg
最大速度	580km/h
武装	12.7mm機銃×2 20mm機銃機砲×2 250kg爆弾×2

は2,734機生産された。この中にはドイツから輸入したマウザー-20mm機関砲を装備した型（I型丙、388機生産）もあった。続いてエンジンを改良型のハ四〇に換装したII型が1944年に登場し、最大610km/hの速度性能を示したがエンジンの生産が追いつかず、終戦までに99機が完成しただけであった。



Nakajima Ki-27 Type97 Fighter "Kate"

## 中島九七式戦闘機

軽戦闘機の極致

全長	7.53m
全幅	11.31m
出力	800hp
全備重量	1,510
最大速度	470km/h
武装	7.7mm機銃×2

日本陸軍最初の全金属製単葉機。1935年、陸軍の九五戦の後継機開発の要求に中島、川崎、三菱の3社が応じ、審査ではどの試作機も要求を満たしたが、中島機がエンジンの信頼性等の点で他を退け、1937年、九七式戦闘機として採用された。ノモンハン事変ではソ連のイ15、16を相手に激しく戦い、陸軍に軽戦重視の思想を残した。太平洋戦争では、初期の陸軍主力戦闘機として活躍したがすでに旧式化しており、徐々に一式戦闘機に交替した。

Nakajima Ki-43 Type1 Fighter "Oscar"

## 中島一式戦闘機 隼

非力な陸軍主力戦闘機

全長	8.92m
全幅	10.837m
出力	1,130hp
全備重量	2,642kg
最大速度	515km/h
武装	12.7mm機銃×2

隼の開発は1937年より始まったが、速度、航続性能を大幅に向上しつつ格闘戦能力を九七戦と互角という要求を満たすため機体は大型化、ようやく完成した試作機は速度こそ若干の向上が見られたものの格闘戦能力では九七戦に大きく劣った。しかし蝶型フラップの採用と戦技研究によって九七戦にも対抗可能となり、また折からの南方侵攻に、長距離を飛行可能で爆撃機を援護できる戦闘機が求められ、1941年、一式戦闘機として採用された。

Kawasaki Ki-100 Type 5 Fighter

## 川崎五式戦闘機

日本陸軍最後の戦闘機

全長	8.818m
全幅	12.0m
出力	1,500hp
全備重量	3,495kg
最大速度	580km/h
	12.7mm機銃×2
	20mm機関砲×2
	250kg爆弾×2

飛燕II型は最大速度610km/hを記録したが、肝心のエンジンが日本の工業力では手に負えず、ほとんど生産できなかった。そのため機体だけが完成した首なし機に、空冷のハリー一五を搭載したのが五式戦である。もともと機体性能が優れていたため、信頼性の高いエンジンの搭載により全般性能が向上、太平洋戦争末期（低高度においては）P-51と渡り合える唯一の戦闘機と言われた。終戦までに390機が完成。採用が末期のため愛称はない。

Nakajima Ki-44 Type 2 Interceptor "Tojo"

中島二式単座戦闘機  
鍾馗

全長	8.75m
全幅	9.45m
出力	1,450hp
全備重量	2,765kg
最大速度	605km/h
武装	7.7mm機銃×2
	12.7mm機銃×2
	250kg爆弾×1

単の開発と同時期に、将来の戦闘機に求められる高速、重武装をテーマに開発された機体。試作機は当時日本にあったBf109Eと互角以上の成績を収め、直ちに採用が決定、1942年初頭に正式採用となった。だが、陸軍では軽戦思想が根深く残っており、パイロットからは敬遠された。1944年になると防空戦闘機として活躍が期待されたものの、すでに性能のピークは過ぎており、満足な活躍は望めなかった。I型II型合計1,225機生産された。

Nakajima Special Attacker "Kikka"

中島特殊攻撃機  
橘花

日本最初のジェット機

全長	9.25m
全幅	10.0m
出力	推力475kg×2
全備重量	3,550kg
最大速度	677km/h (計画)
	250kgまたは500kg 爆弾×1

橘花は、1944年8月、日本近海に侵攻してくる敵海軍艦艇を攻撃する陸上攻撃機として試作が開始された。当初はエンジンに国産のネ12を使用する予定であったが、より強力なネ20エンジンの完成でこれを搭載することになった。エンジンの換装によって開発が遅れ、1945年8月に試作1号機が完成、初飛行したが、2回目の飛行の際に機体を破損、そのまま放置されて終戦を迎えた。計画では1945年中に500機以上生産される予定であった。

Mitsubishi J8M Experimental Interceptor "Shusui"

三菱局地戦闘機  
秋水

日本最初のロケット戦闘機

全長	5.95m
全幅	9.50m
出力	推力1,500kg×1
全備重量	3,870kg
最大速度	800km/h (計画)
武装	30mm機関砲×2

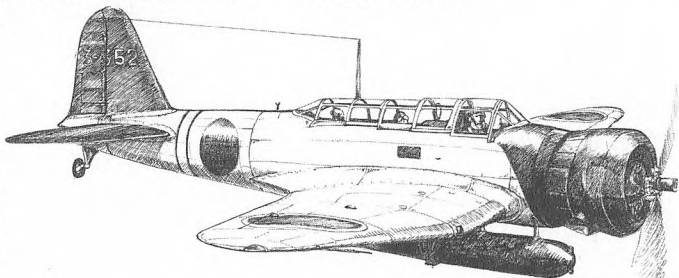
ドイツで開発されたMe163Bの高性能を見た日本はこの国産化を計画した。資料は機体とエンジンの設計説明書とロケット推進の組成説明書のみという劣悪な環境で、開発は陸海軍共同で行うこととなり、機体設計を海軍、エンジン、武装などの機装を陸軍が担当した。海軍では一九試局地戦闘機、陸軍ではキ二〇〇と命名された。1945年7月に初飛行したが、飛行途中でエンジンが停止、着陸に失敗して機体を破損、そのまま終戦となった。

Nakajima B5N Type97 Carrier Based Attacker "Kate"

## 中島九七式艦上攻撃機

日本最初の近代的艦攻

1935年に開発が始められた艦上攻撃機で、日本海軍機として初めて全金属製、低翼単葉、引き込み脚を採用した近代的な機体として完成した。当初は予定していたエンジンが間に合わず、大型の光エンジンを搭載した1号艦攻が配備され、続いて栄エンジン搭載の3号艦攻が登場した。九七艦攻は、同時期に開発されたライバルのデバスター、アルバコアなどをはるかに凌ぐ高性能を誇っていた。太平洋戦争開始時には日



全長	10.3m
全幅	15.518m
出力	1,000hp
全備重量	3,800kg
最大速度	377km/h
武装	7.7mm機銃×1 爆弾800kg

本海軍の主力艦攻として空母、基地航空隊に配備され、緒戦の大戦果に寄与するところ大であった。大戦中期以降は九九艦爆同様旧式化して第一線を退いていった。また、三菱で開発された固定脚の九七艦攻もあり、これは2号艦攻と呼ばれた。

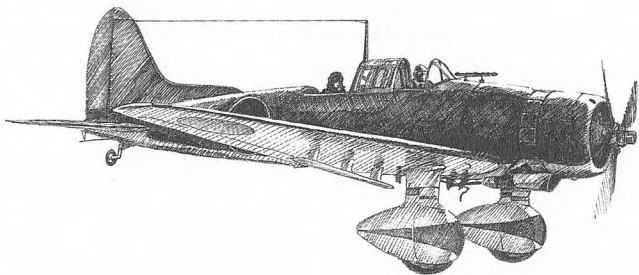
Aichi D3A Type99 Carrier Based Bomber "Val"

## 愛知九九式艦上爆撃機

連合軍艦艇撃沈数トップの急降下爆撃機

太平洋戦争開始時の海軍航空隊の主力艦上爆撃機。旧式ながらも頑丈な固定脚は整備が簡単で故障もなく空母での運用に適し、緒戦での快進撃に貢献した。とくに南雲機動部隊の艦爆隊はパイロットの技量も優れ、インド洋作戦では80%以上の命中率を誇った。

しかし急降下爆撃という任務の性格上損害も大きく、1942年6月のミッドウェー海戦以降は機体の旧式化と貧弱な防弾装備から損害率の高く、“九九棺桶”



全長	10.185m
全幅	14.36m
出力	1,000hp
全備重量	3,650kg
最大速度	382km/h
武装	7.7mm機銃×3 爆弾250kg×1

とさえ呼ばれるにいたり、活動の場を失っていった。1943年にはエンジンをパワーアップして機体を洗練した二二型が登場したが、初期の栄光は取り戻せず、しだいにその任務を後継の彗星に譲っていった。



Aichi B7A Carrier Based Attacker "Grace"

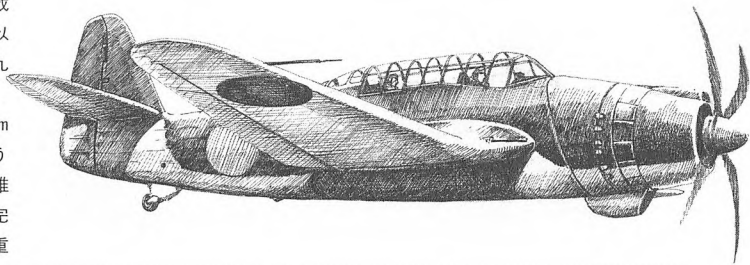
## 愛知艦上攻撃機 流星改

急降下爆撃も雷撃もこなす万能艦攻

全長	11.49m
全幅	14.4m
出力	1,825hp
全備重量	5,700kg
最大速度	543km/h
武装	20mm機銃砲×2 13mm機銃×1 爆弾800kg

急降下爆撃機に求められる爆弾搭載量はしだいに増加し機体が大型化するようになってくると、任務別に機種を区別して開発する必要性が薄れてきた。そこで艦攻と艦爆の一元化が図られ、1941年、雷撃、水平爆撃、急降下爆撃が可能な艦攻の開発が始まった。開発は愛知が担当したが、爆弾搭載量は九七艦攻以上、運動性は九九艦爆のみで、最大速度556km/h以上という要求に開発は難航。試作機の完成後も機体の重

量増加と蒼エンジンの不調に悩まれたものの、所定の性能を収めたので、1944年4月より量産が開始された。試作機は流星と呼ばれたが、量産型からは流星改と呼ばれた。しかし地震や空襲の影響で、終戦までに111機が生産されたに止まった。



Yokosuka D4Y Carrier Based Bomber "Judy"

## 空技廠艦上爆撃機 彗星

戦闘機より早い爆撃機

全長	10.22m
全幅	11.5m
出力	1,400hp
全備重量	3,750kg
最大速度	580km/h
武装	7.7mm機銃×3 爆弾500kg

ドイツのDB601を国産化した液冷の熟田エンジンを搭載した彗星は、登場時は当時の主力戦闘機（零戦）より速い爆撃機だった。この高速に目をつけた海軍は本機を艦上偵察機として運用しようとして、本来の艦爆としての開発に遅延をきたし、正式採用は1943年12月になってしまった。液冷エンジンは取り扱い、生産性ともに日本の技術では手に負えるものではなく、後にエンジンを空冷の金星に換装した三三型が登場、終戦まで使用された。

Nakajima B6N Carrier Based Attacker "Jill"

## 中島艦上攻撃機 天山

大戦後半の主力艦攻

全長	11.865m
全幅	14.894m
出力	1,850hp
全備重量	5,200kg
最大速度	481km/h
武装	7.7mm機銃×2 爆弾800kg

1939年に開発が始まった九七艦攻の後継機で、1943年天山一一型として正式に採用された。一一型は、搭載した護エンジンが不調で、これを信頼性の高い火星エンジンに換装した天山一二型が1944年3月に採用され、マリアナ沖海戦やフィリピン沖海戦に投入されたのを皮切りに終戦まで主力艦攻として使用された。性能的にはライバルのグラマンTBFアベンジャーを上回る機体であったが、ソフトも含めた総合性能で勝っていたとは言い難い。

Mitsubishi G4M Type1 Bomber "Betty"

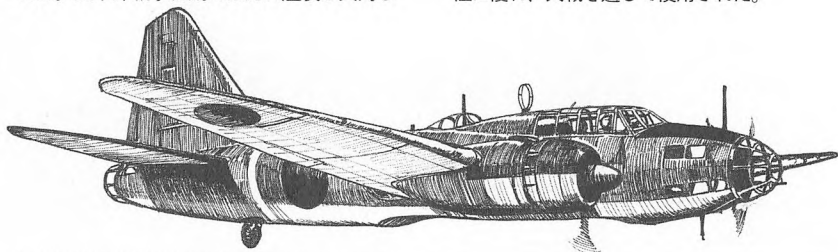
## 三菱一式陸上攻撃機

### 4発爆撃機なみの航続距離を誇る双発爆撃機

葉巻型の胴体が特徴の一式陸攻は、1937年、九六陸攻の後継機として開発が始まった。太いが抵抗の少ない胴体、セミンテグラルトンクの採用等、新機軸が盛り込まれた。試作1号機は1939年に初飛行したが、航続距離5,556kmという驚異的な性能を発揮。1941年4月に一式陸上攻撃機——型として採用された。太平洋戦争初期には九六陸攻と共同し

全長	19.97m
全幅	24.88m
出力	1,530hp×2
全備重量	9,500kg
最大速度	444km/h
武装	20mm機関砲×1、 7.7mm機銃×4 爆弾800kg

て戦艦プリンス・オブ・ウェールズ、レバルスを撃沈するなど活躍した。しかし防弾装備がなく、長大な航続距離を実現したセミンテグラルトンクは被弾するとすぐに火がついてしまい、米軍からワンショットライターというあだなをつけられてしまった。が、安定性や操縦性に優れ、機内の広さもあって実用性に優れ、大戦を通じて使用された。



Yokosuka P1Y Bomber "Frances"

## 空技廠陸上爆撃機 銀河

### 最初で最後の心弱な高迎陸上爆撃機

全長	15.0m
全幅	20.0m
出力	1,825hp×2
全備重量	10,500kg
最大速度	546km/h
	20mm機関砲×2 13mm機銃×1 爆弾800kg爆弾

海軍は1939年長距離急降下爆撃機の構想をまとめ、翌年一五試陸上爆撃機という新しい機種を開発を要求した。零戦並の速度と一式陸攻並の航続性能が要求され、これを実現できると考えられた空技廠が開発を担当した。しかしながら理念先行で複雑な工程など設計に現実性を欠き、試作機はすばらしい性能を発揮したが、量産型では生産精度の悪さやエンジンの不調により所定の性能を発揮できた機体は少なかった。夜戦型も作られた。

Kawanishi H8K Type 2 Flying Boat

## 川西二式飛行艇

### 大型飛行艇の最高傑作

全長	28.12m
全幅	37.98m
出力	1,850hp×4
全備重量	24,500kg
最大速度	454km/h
	20mm機銃×5 7.7mm機銃×3 爆弾最大2t

傑作機九七式飛行艇の後継機として1933年に開発が始まった二式飛行艇は、第二次大戦中に使用された飛行艇の中でずば抜けた性能を誇る傑作飛行艇であり、哨戒、偵察、輸送、連絡などに活躍した。通称二式大艇。1942年に正式に採用され、以後九七式飛行艇に替わり、主力飛行艇として活躍した。この機体を元に人員64名を運ぶ輸送機型も作られ、これは哨空と命名されている。二式大艇は各型合計131機生産された。

Mitsubishi Ki-67 Type4 Bomber "Peggy"

## 三菱四式重爆撃機 飛龍

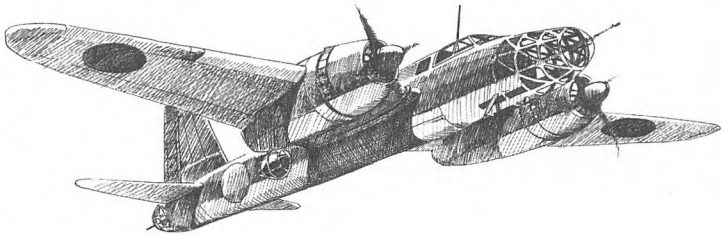
雷撃も行った陸軍の重爆

全長	18.7m
全幅	22.5m
出力	1,900hp×2
全備重量	13,765kg
最大速度	537km/h
武装	12.7mm機銃×3 20mm機銃砲×1 爆弾最大1t

1939年、一〇〇式重爆飛龍の後継機として開発が始まった機体だが、どちらかといえばおなじ三菱製の海軍一式陸攻の面影が強く残る機体であり、1944年8月に正式に採用された。運動性が極めて良好で、水平波形飛行や爆弾非搭載なら宙返りすら可能であった。陸軍はこの機体に雷撃も行わせようと、雷撃装備が取り付けられた。

初陣は海軍の指揮下で台湾沖航空戦に参加、以後、フィリピン、沖縄戦に少

数投入された。本土決戦機として温存されたために、雷撃戦に投入されたことのほうが多かった爆撃機だった。海軍でも使用され、靖国の名で呼ばれた。武装の違いにより甲型乙型があり、合計707機生産された。



Mitsubishi Ki-21 Type97 Bomber "Sally"

## 三菱九七式重爆撃機

日中戦争当初から終戦まで活躍した爆撃機

全長	16.0m
全幅	22.5m
出力	1,450hp×2
全備重量	9,710kg
最大速度	478km/h
武装	7.7mm機銃×6 爆弾750kg～ 1,000kg

1937年採用の陸軍重爆で、登場時は高速の爆撃機であった。最初の生産型一型甲（143機生産）は尾部銃座がなく防弾装備も貧弱なために改良を受け、乙型（120機生産）丙型をへて、1940年エンジン強化型の二型となった。二型は太平洋戦争初期の陸軍爆撃隊の主力で、1944年9月までに1,282機が生産された。本来の任務を外れた後も、使い勝手の良さから輸送、連絡などにも使用された。また、胴体を再設計した一〇〇式輸送機がある。

Nakajima G10N Bomber "Fugaku"

## 中島長距離爆撃機 富嶽

夢の超大型爆撃機

全長	46.0m
全幅	63.0m
出力	3,000hp×6
全備重量	122,000
最大速度	780km/h
武装	20mm機銃×4 爆弾最大20t

中島知久平によるZ機構想を元にした大型の戦略爆撃機で、アメリカ本土を爆撃できる超重爆として期待された。機体は気密室、排気タービンを装備した6発機で、5,000馬力のエンジンは空冷星型4重36気筒のハ五四を予定していたが、実用化できるはずもなく、2,500馬力のハ四四、続いて3,000馬力のハ五〇の搭載を考えた。開発は陸海軍共同で進められたが、計画段階で二転三転し、結局1944年7月に開発中止とされた。



Battleship "Yamato" class

# 戦艦 大和級

世界最大の弩級戦艦

全長	263m
全幅	38.9m
基準排水量	64,000t
最大速度	27kn
武装	46cm砲×12 15.5cm砲×6 12.7cm高角砲×24

1937年の㊦計画にて計画、建造された日本戦艦の集大成的な艦で、排水量64,000tは戦艦としては現在でも世界最大である。1934年には新型戦艦の研究が始まっており、様々な案、意見の調整が行われた末、大和級の建造が開始されることになった。

主砲に採用された45口径46cm砲は、口径を秘匿するため九四式40cm砲と呼ばれていた。徹底した集中防御方式を取り、また、重量を軽減できるところは徹底的に軽量化していたため、このクラスの戦艦としては非常にコンパクトにまとまっていた。副砲には軽巡最上級に使われていた15.5cm 3連装砲塔4基が流用されたが、防御に難がありこの部分が本級の弱点であったと指摘する意見もある。また、機関の関係で速力は27knとなってしまった点も近代戦艦としてはやや不満の残るところであった。

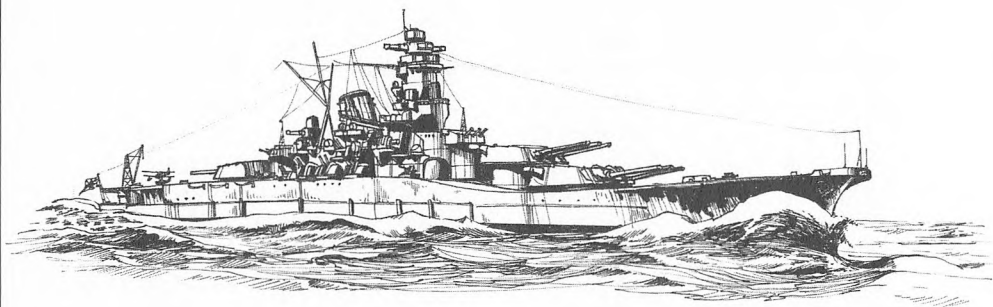
1941年12月に竣工した大和は直ちに連合艦隊旗艦となったが、航空機が主役となった太平洋戦争では出番はなく、ガダルカナルの激戦にも大和は出撃せず、豪華な旗艦設備を

擲棄されて大和ホテルなどといわれた。この間に2番艦武蔵も竣工したがこちらもほとんど何もすることなく時は流れた。1943年末には僚艦武蔵とともに対空砲の強化工事をを行い、レーダーも装備、1944年のマリアナ沖海戦、レイテ沖海戦に参加した。

大和は1945年4月7日、菊水一号作戦で一億総特攻の先駆けとして、沖縄に出撃したが、米軍の機動部隊の波状攻撃により、魚雷10本、爆弾5発を受けて沈没した。

2番艦武蔵はそれより前の1944年10月24日、レイテ沖海戦にて米軍の航空攻撃を一身に受け、魚雷18本、爆弾20発を受けて沈没した。

3番艦信濃は建造途中で空母に改造されることになり、1944年11月19日竣工したが、わずか10日後の11月29日、呉軍港への回航途中に潜水艦の雷撃により魚雷4本が命中、突貫工事のために水密処理がおざなりだったこともあり沈没した。4番艦の111号艦は起工後に建造中止となった。未曾有の大戦艦大和級はその主砲をついに敵戦艦に向けて発することなく終わったのである。



とりあえず

## 勝ちたくて…

## 生産ユニットは絞り込もう！

マップ上に展開するユニット数には各シナリオごとに制限がある。上限はシナリオごとに異なるが、結構、シビアにできていて、どうしても足りないケースが多々ある。まれに「スターリングラード」のようにマップが狭すぎて、逆に身動きがとりにくいシナリオもある。ズバリ言えば、ユニットの種類は絞り込んだほうが勝利が得やすい。

合流コマンドを使いやすいので補給車を作らなくてもすむし、性格をよく把握しているのと、とまどわずにすむからだ。

ただし、強いからといって戦車や戦闘機オンリーにしるというのではなく、類似ユニットは必要なしということだ。たとえば、高射砲と対空戦車、軽戦車と重戦車、攻撃

T - 34 B		3号戦車H型	
55	ATTACK	45	
45	DEFENSE	23	
40	TR	250	
5	TERRAIN	0	
34	TOTAL	46	
0	EXP	250	

データ的には見劣りしても、訓練値が高ければそれほど弱くはない。

機と戦闘攻撃機など。

また、当然、同じことが、同一ジャンルに属するユニットにもあてはまる。P-38とP-47、零戦と隼、B-17とB-24、Bf 109とFw 190など。進化の度合いによってケースバイケースの選択が必要になるが、数種の爆撃機を使うなんて愚の骨頂である。

Battlecruiser "Kongo" class

巡洋戦艦  
金剛級

最長老にして最も活躍した高速戦艦

全長	222m
全幅	31.02m
基準排水量	32,220t
最大速度	30.3kn
武装	36cm砲×8 15cm砲×14 12.7cm高角砲×8

金剛級4隻は、日本で最も古いクラスの戦艦だったが、30knの高速を生かし、空母機動部隊の護衛として各地を転戦した。また、ガダルカナル戦では金剛と同型艦榛名がヘンダーソン飛行場を艦砲射撃、基地機能を一時的に喪失させるという戦果を挙げている。

各地を転戦したために戦場での喪失も多く、同型艦比叟、霧島は1942年中に、金剛も1944年には沈没、唯一生き残った榛名も1945年の空襲で大破、着底してしまった。

Battleship "Nagato" class

戦艦  
長門級

国民に親まれた連合艦隊旗艦

全長	224.5m
全幅	34.6m
基準排水量	39,130t
最大速度	25kn
武装	40cm砲×8 14cm砲×18 12.7cm高角砲×8

長門は、八八艦隊計画によって建造された戦艦群の第1世代として登場した。計画自体は軍縮条約によって立ち消えたため、本級2隻（長門、陸奥）のみが竣工した。長い間連合艦隊旗艦の任にあったため国民に最も親しまれた戦艦であった。大戦中は大和級同様攻撃の機会がほとんどなく、1943年に陸奥が爆沈、長門のみが終戦時には横須賀にあって小破した状態で生き残り、戦後にビキニの水爆実験の標的艦となった。

Aircraft Carrier "Shokaku" class

# 航空母艦 翔鶴級

## 理想的な日本型艦隊空母

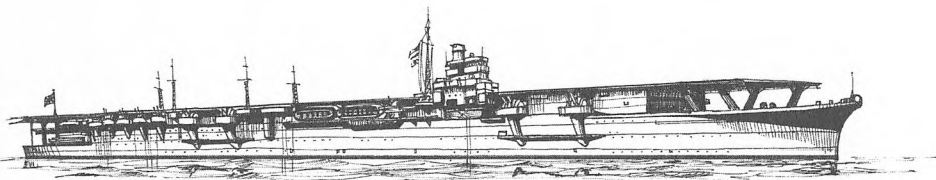
全長	257.5m
全幅	26m
基準排水量	25,675t
最大速度	34.2kn
武装	12.7mm高角砲×16 搭載機84機

1937年の㊦計画で建造が決定した翔鶴級は、太平洋戦争開戦時の最新鋭艦で、攻防のバランスがとれた艦隊型空母だった。

建造に当たり、それまでに蓄積した空母建造のノウハウがすべて投入され、軍縮条約による排水量の制約にとらわれない、理想的な艦形になっている。基本的に前作飛龍の拡大型として設計され、船体右舷中央に下向きにつけられた煙突、密閉式の格納庫など、日本空母の特徴はすべて揃っていた。艦橋は、当初は艦中央部左側に設置される予定であったが、改装後の赤城及び飛龍の使用実績が悪く(船体右側に出る煙突の煤煙と艦橋が巻き起こす気流が関係して艦尾付近で不安定になり、艦載機の着艦時に影響があった)、急遽元の右側前方の位置に戻している。

2番艦瑞鶴とともに太平洋戦争開始直前の1941年に竣工、真珠湾攻撃に参加した。この2隻の完成がなければ、あれほどの成功はなかったともいわれる。この後のインド洋作戦に参加後、南雲機動部隊とは別れてMO作戦

を支援。1942年5月の珊瑚海海戦に参加し、空母レキシントンを撃沈するものの翔鶴は大破、瑞鶴は搭載機を失ったため、ミッドウェー海戦には参加できなかった。ミッドウェーでの主力4空母の喪失後は、文字通り屋台骨となって日本機動部隊を支える活躍をし、1942年中の第2次ソロモン海戦、南太平洋海戦に参加。南太平洋海戦では空母ホーネットを撃沈する。1943年は機動部隊再建に当てられたため海戦はなく、翔鶴級2隻には、この間にレーダーの装備、機銃など対空兵装の強化などの工事が行われた。この間に戦局は大いに日本不利となった。翌年には再建なった米機動部隊とマリアナ沖での決戦を挑み、この戦いの中で空母翔鶴は潜水艦の魚雷4本を受けてついに沈没した。続いて起こったレイテ海戦では、生き残った幸運の空母瑞鶴も主力戦艦部隊のレイテ湾進入のために囮部隊として米機動部隊の集中攻撃を受け、沈没。歴戦の翔鶴、瑞鶴の沈没によって実質的に日本機動部隊は壊滅したのである。





Aircraft Carrier "Akagi"

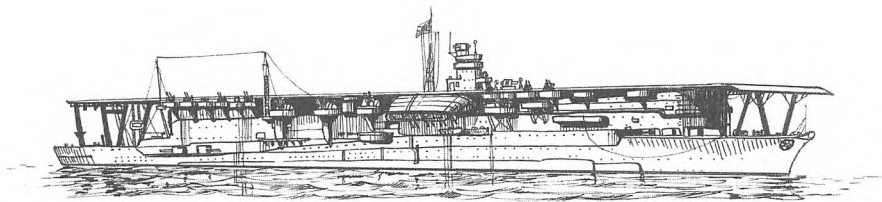
## 航空母艦 赤城

南雲機動部隊旗艦

全長	260.67m
全幅	31.92m
基準排水量	36,500t
最大速度	31.2kn
武装	20cm砲×6 12cm高角砲×12 搭載機91機

八八艦隊の巡洋戦艦として起工した天城級(天城、赤城)だったが、軍縮条約の結果空母に改装されることとなる。途中天城が関東大震災で復旧不能のダメージを受けて廃艦となり、かわって戦艦加賀が空母に改装されることになった。完成した当初の赤城は飛行甲板が3段に別れていたが、運用実績が悪く、後に1段甲板に改装された。この際艦橋の位

置を左側にもって来たため、飛龍とともに世界で稀少な左側艦橋の空母となった。太平洋戦争では南雲機動部隊の旗艦として、真珠湾攻撃を始め各地を転戦、大活躍した。しかし1942年6月5日のミッドウェー海戦で爆弾と魚雷の転換作業中に米機動部隊の奇襲攻撃を受け、爆弾、魚雷に引火して大破、自没した。



Aircraft Carrier "Kaga"

## 航空母艦 加賀

戦艦改造の大型空母

全長	248.6m
全幅	32.5m
基準排水量	38,200t
最大速度	28.3kn
武装	20cm砲×10 12.7cm高角砲×16 搭載機90機

八八艦隊の第2世代戦艦として建造された加賀、土佐の2隻は、進水した段階で廃艦が決定。土佐は標的艦となって処分されたが、加賀は天城の破損廃棄により、急遽空母に改装されることになった。当初は赤城同様3段空母だったが、後に1段に改められている。太平洋戦争では赤城とともに南雲機動部隊の主力として活躍したが、1942年6月のミッドウェー海戦にて、爆弾3発を受けて大破、ダメージコントロールに失敗して後に沈没した。

Aircraft Carrier "Soryu"

## 航空母艦 蒼龍

日本中型空母の基礎を築いた名艦

全長	227.5m
全幅	21.3m
基準排水量	15,900t
最大速度	34.5kn
武装	12.7cm高角砲×12 搭載機72機

軍縮条約の枠内で建造された空母で、当初は航空機100機搭載の航空巡洋艦として計画された。もともと無理な計画だったため設計は二転三転、最終的に支鶴事件を受けて復原性を考慮した設計としたため、きわめてオーソドックスな中型空母として完成した。太平洋戦争では飛龍とともに第2航空戦隊に所属、南雲機動部隊の一員として大活躍した。蒼龍もミッドウェー海戦で奇襲攻撃を受け、爆弾の誘爆で大破、沈没してしまった。

Aircraft Carrier "Hiryu"

## 航空母艦 飛龍

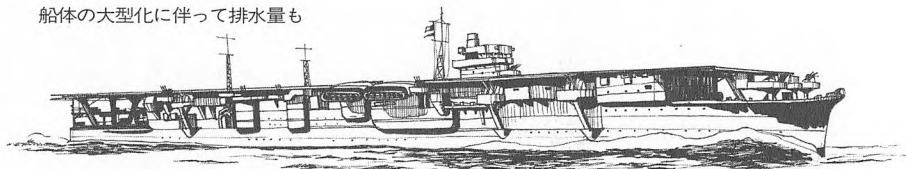
ミッドウェー海戦で単艦奮闘した中型空母

全長	227.35m
全幅	22.32m
基準排水量	17,300t
最大速度	34.5kn
武装	12.7cm高角砲×12 搭載機72機

当初蒼龍の2番艦として計画されたが、蒼龍の設計変更によって建造が遅れたため飛龍の完成が軍縮条約明けになる見込みとなり、大幅に設計を変更、余裕のある設計となった。

まず飛行甲板の幅を広げて航空機を運用しやすくし、艦橋を後ろに下げ、そのままだた煙突の上になってしまうため船体左側に設置した。この左側配置の艦橋は、赤城とともに現在に至るまで唯一のものである。船体の大型化に伴って排水量も

2,000t増えることになった。太平洋戦争では南雲機動部隊の一艦として活躍、ミッドウェー海戦では南雲機動部隊の3空母が被弾後唯一生き残り、攻撃隊を反復して空母ヨークタウンを大破するが、ついに被弾して大破、自沈した。



Aircraft Carrier "Taiho"

## 航空母艦 大鳳

短命に終わった最新鋭重装甲空母

全長	260.6m
全幅	27.7m
基準排水量	29,000t
最大速度	33.3kn
武装	10cm高角砲×12 搭載機53機

1939年の補充計画で建造された空母大鳳は、従来の空母の弱点だった飛行甲板に装甲を施した艦だった。重心位置の上昇を抑えるため格納庫を1段減らして艦首をエンクローズド・バウとし、煙突も艦橋内から外側に向けて配置されたために日本艦離れした艦形となった。1944年3月に竣工、6月のマリアナ沖海戦に旗艦として参加したが、潜水艦の魚雷を受け1本が命中、これが因で艦内にガスが充満引火して内部から大爆発を起こし、沈没。

Aircraft Carrier "Unryu" class

## 航空母艦 雲龍級

戦時急造された改飛龍級空母

全長	227.35m
全幅	22m
基準排水量	17,480t
最大速度	34kn
武装	12.7cm高角砲×12 12cm28連装噴進砲×6 搭載機53機

1942年、ミッドウェー海戦での4空母の喪失によって、急遽空母増強が叫ばれ、15隻の建造が決定した。設計期間短縮のために飛龍の図面が流用され、最小限の改良が施された。機関は重巡のものや駆逐艦のものを2隻分づつ使用、この他大型空母5隻の建造も計画されたが、終戦までに雲龍級3隻（雲龍、天城、葛城）が完成したにとどまっている。雲龍は船団護衛中に潜水艦攻撃により沈没、天城は空襲で転覆し、葛城のみが生き残った。

Type95 Light Tank (Ha-go)

## 九五式軽戦車八号

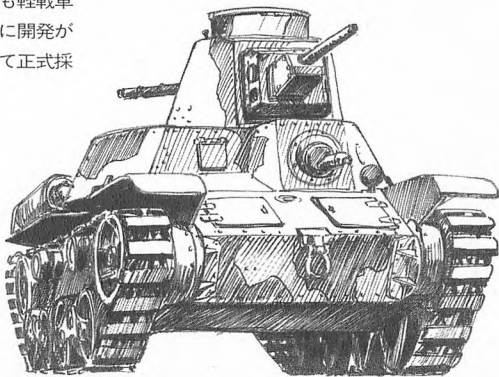
大戦全期間にわたり使用された主力軽戦車

全長	4.3m
全幅	2.7m
全高	2.28m
重量	7.4t
最大速度	40km/h
武装	37mm戦車砲×1 7.62mm機銃×2

1930年代に入ると、将来の大陸での戦車運用において、高い機動性を持つ戦車の必要性が高まり、また仮想敵国のソ連が高速戦車BTシリーズを装備するに及び、日本でも軽戦車を開発することが決定した。1934年に開発が始まり、1936年に九五式軽戦車として正式採用された。

大陸の独立混成第1旅団に配備されたのを皮切りに騎兵旅団の装甲車隊、戦車連隊に配備され、太平洋戦争開始時には約1,000両の九五式軽戦車が保有されていた。しかし、本車に限ったことではないが、装甲が弱く(機銃弾を防御できるくらい)十分な対戦車装備を持つ米軍

相手には太刀打ちできず、1943年をもって生産は終了した。合計2,375両生産。



Type94 Light Armoured Car (TK)

九四式軽装甲車  
TK

歩兵の直協に活躍した豆タン

全長	3.08m
全幅	1.62m
全高	1.62m
重量	3.5t
最大速度	40km/h
武装	7.7mm機銃×1

イギリスのガーデンロイド戦車を輸入して研究、前線への弾薬運搬を目的とした特殊牽引車として開発された。各戦車中隊の1個小隊に配備された他、独立の軽装甲中隊に配備された。また、各師団内の搜索連隊にも配備され、一般師団唯一の装甲兵力として歩兵の直協に活躍。1939年頃には後継の九七式軽装甲車に交替したが、それまでに約840両が生産された。武装が7.7機銃のみだったので、戦車が現れるとどうしようもなかった。

Type97 Light Armoured Car (Teke)

九七式軽装甲車  
(テケ)

世界最小戦車?

全長	3.7m
全幅	1.9m
全高	1.79m
重量	4.8t
最大速度	40km/h
武装	37mm戦車砲×1

九四式軽装甲車の使用実績をベースに、より強力な武装を装備した後継車両として開発され、より強力な空冷ディーゼルエンジンと、主砲に37mmを装備していた。1939年から生産が開始され、九四式軽装甲車に変わって各師団の搜索連隊に配備された。九四式軽装甲車同様、一般師団が運用できる唯一の装甲車両として重宝された。また、車体が軽く旧式の輸送船などでも迅速に運搬が可能であった。1942年までの3年間で約570両作られた。

Type97 Medium Tank (Chiha)

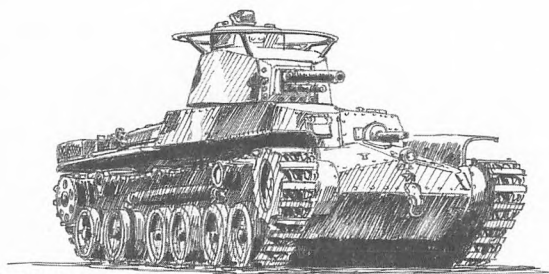
## 九七式中戦車 (チハ)

太平洋戦争初期に活躍したマレーの虎

1935年、八九式中戦車の後継車輛として開発が始まり、翌年の審議によって大馬力・重装甲の第1案(チハ)と小型軽量の第2案(チニ)の2種の試作車が作られ試験された。この結果第1案が採用されて1937年、九七式中戦車となった。日中戦争の勃発により大量生産され、日本中戦車としては最大の2,123輛が生産された。ノモンハン事変を初陣とし、以後日本軍の主力戦車として各地で使用されたが、太平洋戦争では

全長	5.52m
全幅	2.33m
全高	2.23m
重量	14.3t
最大速度	38km/h
武装	57mm戦車砲×1 7.7mm機銃×2

マレー戦以後はライバルとの性能差からほとんど活躍することなく終わった。また、ノモンハンの戦訓により、新型の47mm戦車砲を搭載した新砲塔を装備した型が1942年から生産された。この型は九七式中戦車改(新砲塔チハ)と呼ばれた。



Type98 Light Tank (Ken)

## 九八式軽戦車 (ケニ)

本土決戦に温存された軽戦車

全長	4.11m
全幅	2.12m
全高	1.82m
重量	7.2t
最大速度	50km/h
武装	37mm戦車砲×1 7.62mm機銃×1

九五式軽戦車の後継車として開発されたが、試作車完成後、折から勃発した日中戦争により、九五式軽戦車の増産が優先されたために1942年まで生産されなかった。開発は日野自動車が行ったが、三菱重工が製作した試作車で、大型転輪を持つ、見た目にスマートなタイプもあった。性能的には九五式の1割~2割程度優秀だったが、1942~43年に113両生産されたに止まった。本土決戦用に温存されたため、戦歴はない。

Type89 Medium Tank (I-go)

## 八九式中戦車 (イ号)

日本最初の国産量産戦車

全長	5.75m
全幅	2.18m
全高	2.56m
重量	12.7t
最大速度	25km/h
武装	57mm戦車砲×1 6.5mm機銃×1

全備重量10tの軽戦車として開発された八九式中戦車は、本格的に量産された最初の日本戦車である。イギリスのピッカースMk. C戦車をコピーしたため、後の日本戦車との外形的な共通点は少ない。当初は車体重量が10t以下だったため軽戦車に分類されていたが、改良されて11.5tと増加したため、10t以上を中戦車と分類した日本陸軍の規定により中戦車となった。1929年の正式採用から10年間生産され、太平洋戦争にも参加した。

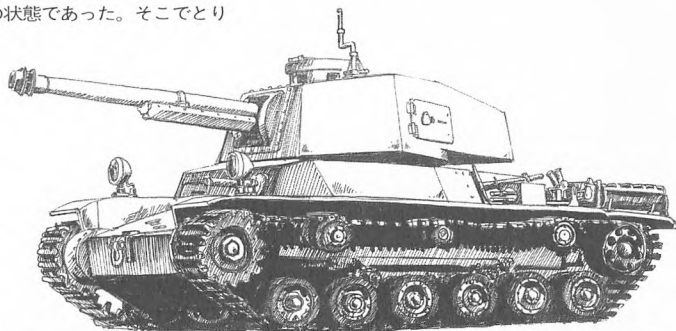
Type3 Medium Tank(Chinu)

## 三式中戦車 (チヌ)

野砲搭載の応急対戦車戦闘用戦車

太平洋の戦いで、米軍がM4 シャーマン中戦車を投入するようになると九七式改、一式の47mm砲では全く威力不足であることが判明し、急遽火力の増強が必要となった。しかし、搭載する主砲の製造が高射砲等の需要に応えるだけで精一杯の状態であった。そこでとりあえず既存の九〇式75mm野砲を装備した新型砲塔を開発して一式中戦車に搭載した。これが三式中戦車である。

1944年5月からわずか5カ月で試作車が完成、



12月には量産が始まり、終戦までに66両が完成した。完成が遅かったこともあり、生産型はすべて本土決戦用に温存されたため、実戦には投入されなかった。

全長	5.73m
全幅	2.33m
全高	2.61m
重量	18.8t
最大速度	39km/h
武装	75mm戦車砲×1 7.7mm機銃×1

Type1 Medium Tank(Chihe)

## 一式中戦車 (チヘ)

車体が改良された九七式中戦車

全長	5.73m
全幅	2.33m
全高	2.38m
重量	17.2t
最大速度	44km/h
武装	47mm戦車砲×1 7.7mm機銃×2

九七式中戦車改の47mm新型砲塔を流用して車体を新型の溶接車体とし、装甲、エンジンを強化したのが一式中戦車で、1942年に正式採用された。しかし戦火の拡大によって生産は遅れ、ようやく1944年になって生産が始まった。新型の三式中戦車の登場ですぐに生産は終了したため、1944年中に155輛作られたにとどまる。一式中戦車は九七式中戦車とともにフィリピン戦に投入されたほかは、本土決戦用に温存されていた。

Type4 Medium Tank(Chito)

## 四式中戦車 (チト)

新型主砲を搭載した待望の主力戦車

全長	6.42m
全幅	2.87m
全高	2.87m
重量	30t
最大速度	45km/h
武装	75mm戦車砲×1 7.7mm機銃×2

1942年から開発された新型中戦車で、当初一式中戦車の拡大型的な長砲身57mm砲搭載型だったが、戦争の趨勢を見て75mm搭載型に変更された。ポフォース75mm砲をコピーした新型の四式中戦車砲を搭載、30tの重量を支えるために新型の空冷ディーゼルエンジンが開発され、軽快な運動性を示した。1944年末から量産態勢に入ったが、新型主砲の生産遅延、資材の不足などにより、試作も含めて終戦まで6輛完成したに過ぎない。



Type5 Medium Tank (Chiri)

## 五式中戦車 (チリ)

重戦車並みの威力を秘めた試作中戦車

全長	7.3m
全幅	3.05m
全高	3.05m
重量	37t
最大速度	45km/h
武装	75mm戦車砲×1 37mm戦車砲×1 7.7mm機銃×2

1943年、四式中戦車よりさらに大型の戦車を開発することが決定し、1945年初頭には車体が1輦完成していたが、主砲の搭載を待つ間に終戦となった。主砲は四式中戦車と同様四式75mm戦車砲を予定していたが、一回り大型の九四式88mm砲も搭載できるようになっていた。エンジンは、ディーゼルではアンダーパワーと搭載容積の問題があり、余剰の航空機用の液冷エンジン「八九」を使用した。軽快に走ったという。

Particular Type2 Mortar Launch (Kam)

## 特二式内火艇 (カミ)

潜水艦から発進する水陸両用戦車

全長	4.8m
全幅	2.8m
全高	2.3m
重量	9.15t
最大速度	37km/h (陸上)
武装	37mm戦車砲×1 7.7mm機銃×2

1941年に海軍から「潜水艦より発進して島嶼に上陸が可能な戦車」の開発を依頼され、陸軍技術本部が開発した水陸両用戦車。九五式軽戦車との部品の共通化を図り、短期間で実用化され1942年正式採用された。フロートは脱着式で、戦車が上陸すると前後部のフロートを投棄する。余裕のある内部スペースを利用して、潜水艦による物資の強行輸送や、敵前逆上陸に使用された。1942年から3年で184輦生産された。

Experimental 120ton Tank (O)

## 試製超重戦車 (オイ)

マウスを意識した和製超重戦車

全長	11m
全幅	4.2m
全高	4m
重量	120t
最大速度	不明
武装	100mm戦車砲×1 47mm戦車砲×1 7.7mm機銃×3

1944年に計画された大型戦車で、ドイツのマウス戦車の情報を受けて計画されたものらしい。100tを越える車体重量を支えるためサスペンションは新方式を採用し、動力は五式中戦車と同様の川崎製液冷エンジン「八九」(550馬力)を並列に2基並べ車体後部に設置、変速機は人力操作、方向制御は油圧によるものとされていた。実車は完成しなかったが、一説には完成し、大陸へ輸送するために分解された状態で終戦を迎えたとも言う。

Experimental Anti-Aircraft Tank (Soki)

## 試製対空戦車 (ソキ)

九八式軽戦車ベースの試作対空戦車

全長	不詳
全幅	不詳
全高	不詳
重量	不詳
最大速度	不詳
武装	20mm対空機関砲×2

連合軍機の地上攻撃が激しくなると、機動性を持った対空火力が試作となった。発想の経緯はドイツの4号戦車ベースの対空戦車群と同じである。とりあえず対戦車戦闘には役に立たない九八式軽戦車の車体をベースに、九八式20mm機関砲2門を砲塔に搭載したのが、試製対空戦車ソキである。対空攻撃姿勢を取りやすいように射手の座席位置を高くとり、そのまま180度回転が可能で、敵機の動きに随従できるように工夫した。

Type1105mmSPH(HoniI)

## 一式自走砲 (ホニI)

ヴェスベに砲をとった自走榴弾砲

全長	5.52m
全幅	2.33m
全高	2.39m
重量	16.3t
最大速度	38km/h
武装	105cm榴弾砲×1

ドイツ軍の105mm自走榴弾砲ヴェスベを参考に開発された自走榴弾砲。九一式105cm榴弾砲を九七式中戦車の車体に搭載したもので、1943年11月より生産された。九〇式砲を搭載したホニIIとともに、戦車部隊の機動砲兵部隊に配備されている。正確な生産数は不明。ホニIIと合わせて138輦という説がある。生産数が少なく、また、太平洋戦争の戦況が大規模機動戦にならなかったため、本車が活躍する機会はなかった。

Type175mmSPH(HoniII)

## 一式砲戦車 (ホニII)

M4に対抗できた数少ない日本車輦

全長	5.9m
全幅	2.33m
全高	2.39m
重量	15.9t
最大速度	38km/h
武装	75mm榴弾砲×1

九七式中戦車の車体に九〇式75mm野砲を搭載した自走砲で、1939年から陸軍技術本部で研究が始まり、1941年試作車が完成した。その年のうちに正式に採用され、機動砲兵部隊に配備された。もともと間接砲撃を主とした野砲だったので照準など問題も多かったが、対戦車戦闘力の低い日本陸軍においては貴重な攻撃兵力でもあった。生産は1943年から始まったが正確な数は不明。55〜138輦という。フィリピン戦線やビルマ戦線に送られている。

Type4155mmSPH(Horo)

## 四式自走砲 (ホロ)

直接射撃を主任務とした間接自走榴弾砲

全長	5.52m
全幅	2.33m
全高	2.36m
重量	16.3t
最大速度	38km/h
武装	155mm榴弾砲×1

大戦末期、日本陸軍は来るべき本土決戦を予見して、対戦車火器を少しでも多く整備しようと考えた。そこで、ドイツ軍の自走重歩兵砲をヒントに、九七式中戦車の車体に旧式化した三八式155mm榴弾砲を搭載した自走砲を開発した。自走砲ではあったが、前線で不足している対戦車火力を補うためのものであり、直接照準装置が取り付けられていた。1945年初頭に生産されたが、総数は諸説あり。少数が沖縄に送られ、米軍と戦っている。

Type9437mm Anti-Tank Gun

## 九四式37mm 対戦車砲

日本最初の対戦車砲

口径	37mm
砲身長	1,7065m
重量	約327kg
初速	700m/秒
射程	2,870m

1933年、戦車を初めとした機械化兵器を撃破する兵器が研究されることになった。取り回しや用法から37mm口径が選ばれ、1,000mで20mmの装甲を貫通する能力の対戦車砲が開発された。各種試験を経て1935年、九四式37mm砲として正式採用された。取り扱いが容易だったため大量に生産された。1935年には初速を上げて一式37mm砲となったが後継の一式機動47mm砲が生産されていたために、こちらは少数の生産に止まっている。

Type147mm Anti-Tank Gun (Motorized)

## 一式機動47mm砲

登場の遅れた機動対戦車砲

口径	47mm
砲身長	2,5265m
重量	800kg
初速	830m/秒
射程	6,900m

本砲は1937年に試作された試製47mm砲を、機械牽引が可能ないように抗弾ゴム製の車輪に換装したもので、1942年に正式に採用された。固定目標に対しては1分間に20発の発射速度を誇る。九七式中戦車改や一式中戦車の主砲に使われている。砲の性能は優秀だったが、登場時にはすでに戦車砲の主流は75mmから90mm級であり、威力不足は否めなかった。1941年にはこの47mm砲を上回る57mm対戦車砲が試作されたが、同様の理由で研究は中止された。

Type8875mm Anti-Aircraft Gun

## 八八式75mm高射砲

大戦を通じて主力だった高射砲

口径	75mm
砲身長	4,23m
重量	3,355kg
初速	720m/秒
射程	13,800m
射高	9,100m

1928年に採用された高射砲で、前タイプの一年式よりも有効射高が約2,000m増している。初速720m/秒で最大射高9,100m。採用後も車輪や車軸などに様々な改良が加えられた。これとは別に1944年には、イギリスのポフォース75mm対空砲をコピーした四式75mm高射砲が開発、採用されている。この砲は初速、射程、運動性など八八式をはるかに凌ぎ、四式、五式中戦車の主砲に採用されたが、全部で約70門生産されたに止まった。

Type998mm Anti-Aircraft Gun

## 九九式88mm高射砲

ドイツ発但製造日本産

口径	88mm
砲身長	3,959m
重量	6,500kg
初速	800m/秒
射程	15,700m
射高	10,420m

1937年の日中戦争時、南京江陰砲台よりドイツのクルップ製88mm砲を押収し、これを国産化したのが本砲である。試作審査は1938年に始まり、良好な成績を収めたので翌年正式に採用された。45口径、初速800m/秒、最大射高10,420mで360度の射界をもつ。対空部隊の主力として約1,000門が生産されている。元々は固定火砲だったが専用の運搬車が作られたほか、末期には五式中戦車の主砲の候補にもなっている。

Type9075mm Field Gun

## 九〇式75mm野砲

日本軍野砲の主力

口径	75mm
砲身長	2,883m
重量	1,400kg
初速	683m/秒
射程	13,890m

日本では初めて砲口制退器を採用した野砲。それまでの主力野砲に変わり射程13,000m、重量1,4t、多少の運動性を犠牲にして威力を増大するという方針の元研究、試作された。外国製火砲との比較審査など紆余曲折を経て1932年、正式に採用されて九〇式野砲となった。この砲の車軸、車輪を改良し、車両で牽引できるようにした機動九〇式野砲も作られた。また、九〇式野砲は、一式砲戦車、三式中戦車の主砲に採用されている。

Type91105mm Field Gun

## 九一式105mm 野砲

### フランス製野砲

口径	105mm
砲身長	2.09m
重量	1,500kg
初速	454m/秒
射程	10,800m

1924年の欧米視察の際、フランスのシュナイダー社の105mm砲の優秀さに注目した陸軍が同社に発注して作った火砲で、1931年九一式野砲として正式に採用された。契約の終了後は国内で生産している。九〇式野砲とともに師団砲兵の主力として使用された。こちらの砲も車軸と車輪を改良した機動砲があり、機動九一式野砲と呼ばれた。105mm砲にはこの他重砲に分類される九二式加農砲があり、こちらは射程15,000m、重量4,3tであった。

Type96150mm Howitzer

## 九六式150mm 榴弾砲

### 野戦砲の中では最大級

口径	149.1mm
砲身長	3.523m
重量	4,140kg
初速	540m/秒
射程	11,900m

九六式150mm榴弾砲は、1934年、車輛による機械牽引専用の榴弾砲として開発され、翌年試作砲が完成、野砲校での試験の後1937年採用された。採用と同時に、折から勃発した日中戦争に投入され、以後太平洋戦争終結まで、各地で使用された。この他、150mm級では、ドイツのラインメタル社製150mm榴弾砲が日中戦争中捕獲され、ラシ5糎短加農と呼ばれて以後使用されている。これは初速590m/秒、射程15,300mであった。

## 日本軍の歩兵部隊

### 装備が遅れた前近代的部隊

日本軍の歩兵部隊は、一般的に日露戦争からほとんど変化のない夜襲と着剣突撃を重視し、野砲など支援火器の整備が遅れていた。また、部隊のほとんどは機械化されておらず、自転車装備の「銀輪」部隊なども存在したが、基本的に移動はすべて徒歩で行っていた。歩兵は自分の体重に等しい60kgの装備、弾薬のみならず食料等の生活物資もろもろを背負い、一日40kmの行軍を強いられた。生身の肉体には戦闘よりこの行軍がつらく、中国大陸では戦闘中は身を伏せることが出来るために、敵と遭遇するとホッとしたりとさえ伝えられる。

他国では歩兵の機械化が国情により相違あれど推進されたが、日本においては、ごく一部戦車部隊に付属した歩兵が機動歩兵として、機械化されていたのみであった。要するに、日本陸軍の歩兵部隊は国家の経済力がそのまま反映した装備・運用をとらざるを得ない軍

隊であった。火砲は戦時中の生産数でアメリカの10分の1、砲弾は約500分の1である。重火器によって敵陣地を粉碎するなどというカネのかかる戦術がとれるわけではない。銃剣突撃という戦闘法、夜襲という戦術を繰り返さざるを得なかったのは、何も指揮官将校の能力に原因を帰するわけにはいかない話である。

歩兵部隊の中でも花形とされていた空挺部隊(落下傘部隊)は日本では挺身部隊と呼ばれ、軽武装ながら太平洋戦争初期のインドネシアのパレンバン油田などの要地攻略に投入されている。この戦いは「空の神兵」として戦意高揚の宣伝映画として格好の題材を提供した。挺身部隊は大戦後半になると、生還をはじめから考慮しない特別攻撃隊のひとつとして、フィリピンや沖繩戦で米軍に占領された飛行場に強行着陸・強襲し、散っていった。



# ドイツ第三帝国



第一次大戦後、認められたわずか10万名のドイツ軍は、1935年の再軍備以降急速に軍備を拡張し、また、当然ながら1935年以降に開発された新兵器で整備されていた。しかし陸軍中心に整備されたため海軍は最後まで空母を保有できず、空軍も完全に陸軍の地上支援を主任務とした直協空軍であった。

陸軍にしても、1944年までは大戦争を行うには準備不足であり、ヒトラーもそれ以前に戦争を起こす意図がないことを、1938年に正式にコメントしている。事実、ポーランド侵攻時点での陸軍は98個師団が動員可能であったが、実際に戦力となったのは58個師団、150万程度と、40個師団のポーランド軍に対して圧倒的優位に立ったわけではない。装備にしても主力となるのは3、4号戦車はごく少数であり、練習用の1号戦車や軽戦車の2号戦車が主力であった。ポーランドと同盟していた英仏がドイツに宣戦することで、世界大戦となったわけで、少なくともこの時点でヒトラーが世界戦争を起こす意図がなかったことは明確である。もっとも、戦備が整わない点は英仏も同様で、1940年5月に対仏戦が開始されるまで、両陣営とも大きな動きは無かった。対仏戦は戦車を中心とした電撃戦により短期間で勝利を収めることに成功するが、本来、対英戦をする意図が薄いヒトラーは、英陸軍を取り逃がし、バトル・オブ・ブリテンにて敗北を喫する。戦争終結への決め手を失ったヒトラーは、1941年6月、開けてはならない東への扉を破るのである。

独ソ戦はドイツ軍の質対ソ連軍の量の戦いとなったが、戦略に徹底さを欠き、モスクワ進攻は冬将軍にはばまれ、軍を二分した翌年の攻勢は、ソ連軍の的確な攻勢防御によりスターリングラードでの消耗戦に巻き込まれ、ドイツの攻撃野戦軍は、一時期まったく力を失うに至った。1943年より、シュペーア軍需相のもと、機甲軍の再建は成ったが、クルスクの戦車戦で敗北を喫し、以降、抵抗が続けながらも、機動戦を無視した無意味な死守命令により再攻勢のための戦略的撤退を許されず、ズルズル後退していったのである。

ドイツ陸軍は、第二次大戦で約1,250万人以上が戦い、350万人が犠牲となり戦争を終えた。

陸軍の直接支援として編成された空軍は、初期こそ決定的な活躍を見せたものの、対英・対ソ戦では長距離進攻により、敵生産地への戦略爆撃をできず、逆に大戦後半は米英による戦略爆撃への迎撃に追われた。それでも大戦終盤ミサイルV-2号、ジェット戦闘機Me262、ロケット戦闘機Me163などを実用化し、戦後の兵器開発はおろか、戦術戦略に大きな影響を残した。

海軍は、戦備不足のまま大戦に突入、Uボートによる通商破壊作戦は、一時は英国を敗北手前に追い込んだ。

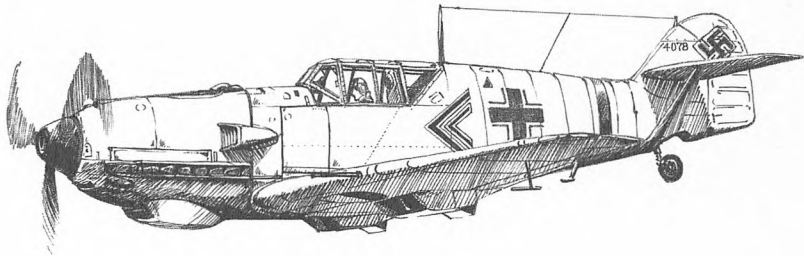


Messerschmitt Bf109

# メッサーシュミット Bf109

大戦全期を通じたドイツ主力戦闘機

全長	9.74m
全幅	9.86m
出力	1,200hp
全備重量	2,767kg
最大速度	578km/h
武装	20mm機関砲×2 7.9mm機銃×2



1934年に、来るべき日の空軍主力戦闘機となる機体の開発要求が提示された。BFW社（バイエリッシュ航空機会社）、フォッケウルフ社、アラド社、ハインケル社の4社がこれに応じて試作機を製作し、1935年10月から各社の試作機による飛行試験が開始された。この試験の結果BFW社の提案したBf109が選定されることになった。

このBf109は同社の主任設計者メッサーシュミット博士（のち同社社長に就任、社名もメッサーシュミット社に変更）が設計したもので、当時の水準を大きく越える全金属製単葉機であり、多くの新機軸が採用されていた。ドイツ空軍に制式採用されてスペイン内乱で実戦を体験したBf109は、初期の生産型では低出力のエンジンを搭載していたが、本格的な量産型となったE型では出力がアップしたエンジンを採用し、生産の早い段階で主翼の7.92mm機銃に替えてより強力な20mm機関砲が装備された。また、E型をベースに主翼を延長して着艦フックを設けた艦載型のT型も開発されている。つづくF型はエンジンのさら

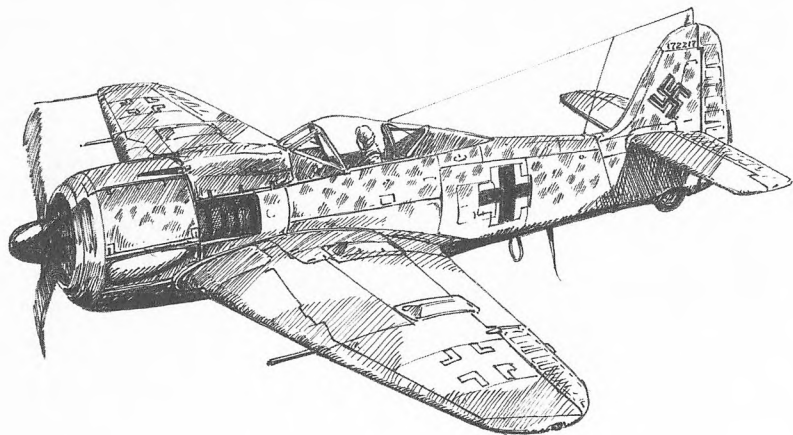
なる強化を図り、機首を洗練した流線形に改めたもので、内部構造も全く新しくなり外形、内容ともにE型と一線を画す機体となった。もちろん性能も大きく向上し、Bf109シリーズ中最もバランスがとれた機体との評価を得ている。続くG型は約2万3000機と、シリーズ中最多生産を誇っており、エンジンのパワーアップ、防弾板と火力の強化などが盛り込まれたが、エンジンが強化されたのにもかかわらず重量増加により全体的な性能ではF型より劣ってしまった。このためG型でも後期生産型はさらにエンジンのパワーアップを図り、最大速度は685km/hとF型を上回っている。最終生産型となったK型は、高高度性能を強化した新型エンジンを採用したもので、700km/hの最大速度を有しており、第一線戦闘機として十分使用することができたが、初期の面影はほとんど残っていないのもまた事実であった。全く問題がなかったとは言えないが、内外含めて約33,000機という生産量は、単一機種として世界最高級であり、本機の能力を無言で物語るものである。

Focke-Wulf Fw190

# フォッケウルフ Fw190

Bf109とともにドイツ空軍を代表する戦闘機

全長	8.84m
全幅	10.50m
出力	2,100hp
全備重量	4,900kg
最大速度	654km/h
武装	20mm機関砲×4 7.9mm機銃×2



Bf109が実戦部隊へ配備を始めて間もなく、Bf109を補佐する新戦闘機の開発要求がフォッケウルフ社に出された。最初からBf109の生産を阻害しないためエンジンはダイムラーベンツDB601系の使用を禁じられていたので、フォッケウルフ社では開発されたばかりの空冷エンジンBMW139空冷エンジンに白羽の矢を立てた。当時のヨーロッパでは高速戦闘機には液冷エンジンを使用するというのが暗黙の了解となっていたが、フォッケウルフ社の主任設計技師クルト・タンク博士はあえてこの常識に挑戦し、見事に成功を収めた。1939年6月に初飛行したFw190の試作機がBf109Eを上回る高速性能を発揮したのである。

またBf109は生産性の向上と軽量化を図って主脚を胴体の隔壁に直接取り付けため、脚のトレッドが著しく狭くなってしまい離着陸の際に事故が多発したのに比べ、はるかに扱いやすい機体となったのも数字には現れにくいメリットであった。この機体の高性能に驚いたドイツ空軍ではFw190を制式採用し、最初の生産型であるA型はさらにエンジンを

パワーアップ、最大速度は630km/hとBf109Eの578km/hを大きく越えることに成功した。

バトル・オブ・ブリテンにこそ間に合わなかったものの、1941年9月からドーバー海峡の上空でライバルであるイギリス空軍のスピットファイアを完膚無きまでに叩き落とし、一時はイギリス空軍をパニックに陥れたほどであった。このA型は国内のライバル機、Bf109同様に発展を続け、夜間戦闘機型や写真偵察機型なども生産された。このA型と同仕様の機体を戦闘爆撃機としたものがG型で、A型の初期生産型をベースに戦闘爆撃機として生産された。またA型の後期生産型も戦闘爆撃機として生産されているが、この型はF型と称されている。A型は期待を大きく上回る高性能を発揮したが、高高度性能の不足が目立った。このためエンジンを液冷のJumo213Aに換装し機首を改設計したD-9が1944年に生産に入り、700km/h近い最高速度を発揮し9月から実戦に投入されたが、空襲の影響で700機程度の生産数にとどまった。総生産機数は2万機である。

Focke-Wulf Ta152H

## フォッケウルフ Ta152H

究極のレシプロ戦闘機となった高高度戦闘機

全長	10.82m
全幅	14.44m
出力	1,750hp
最大速度	752km/h
全備重量	5,217kg
武装	30mm機関砲×1 20mm機関砲×2

1942年末にドイツ空軍は高高度戦闘機の開発要求を出し、完成したのがTa152Hである。開発中の液冷型Fw190Dをベースにより強力なエンジンを搭載し、高高度での運動性を確保するために長大な主翼を採用するなど、Fw190とは大きく変化したスタイルはまさに究極の戦闘機の名にふさわしい。原型機は1944年7月に完成し、直ちに生産が始められたが67機しか完成しなかったため高性能を発揮することなく終わった。

Focke-Wulf Ta183Huckebein

## フォッケウルフ Ta183

B-29とモスキートに対抗する緊急戦闘機

全長	9.40m
全幅	10.0m
推力	1,300kg
全備重量	5,080kg
最大速度	950km/h
武装	30mm機関砲×4

1944年末に空軍総司令部は緊急戦闘機の名で仕様を提示。この要求に応じたクルト・タンク博士はTa183ヘッケバイン（カラス）の名で40度という当時としては大きな後退翼をもつジェット戦闘機の開発に着手した。これは高度7,000mで950km/hの速度を有し、作戦高度は14,000mを越える驚異的な性能の機体で、機首には4門の30mm機関砲を搭載していた。完成にはいたらなかったが、戦後ソ連のMiG-15開発の基礎資料となった。

Heinkel He162 Salamander

## ハインケル He162 サラマンダー

大戦末期に登場した国民戦闘機

全長	9.05m
全幅	7.20m
推力	916kg
全備重量	2,805kg
最大速度	890km/h
武装	20mm機関砲×2

Me262の成功でジェット戦闘機の真価をようやく理解したドイツ空軍は、より短時間で生産できる簡易型ジェット戦闘機の開発を決め、1944年9月に各メーカーに要求を提示した。この戦闘機は国民戦闘機と名付けられ、あまり訓練を積んでいないパイロットでも容易に操縦できることが要求されていた。審査の結果ハインケル社の案が選択され直ちに製作に入り、敗戦までには約240機が完成して実戦にも参加したが、大量に使用するには遅すぎた。

Messerschmitt Me163 Komet

## メッサーシュミット Me163 コメット

世界初の実用ロケット戦闘機

全長	5.85m
全幅	9.40m
推力	1,700kg
全備重量	4,310kg
最大速度	1,000km/h
武装	30mm機関砲×2

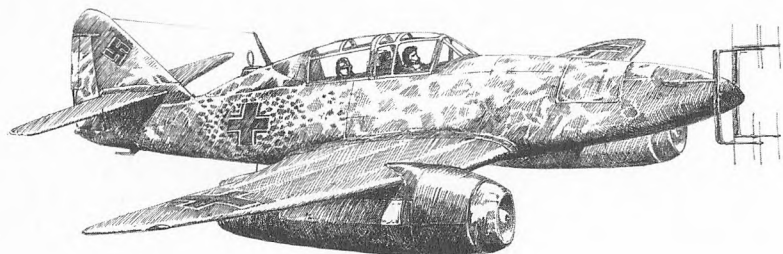
リピッシュ博士が考案した無尾翼機と、ロケットエンジンを組み合わせた高速迎撃機として1939年から開発が始まり、試作機の試験後メッサーシュミット社で研究が続けられ、1944年5月には生産機が実戦部隊に引き渡された。最大速度1,000km/h、高度10,000mまでの上昇時間はわずか2分という驚異的な性能を発揮したが、特殊燃料による事故や着陸にソリを用いるという特殊な機体であったため、実用機と呼ぶには難があった。

Messerschmitt Me262

# メッサーシュミット Me262

世界初の実用ジェット戦闘機

全長	10.58m
全幅	12.5m
推力	898kg×2
全備重量	6,390kg
最大速度	869km/h
武装	30mm機関砲×4



ハインケル社が自社のベンチャー・ビジネスとしてジェット機の開発を行っていた1939年1月、メッサーシュミット社は早くも空軍と単発ジェット戦闘機の開発を契約することに成功した。これはナチス嫌いのハインケル博士の存在もあったろうが、反対に言えばメッサーシュミット博士の設計能力と、政治力のバランスが微妙にとれていたことを示すものであった。ともあれこの契約によりメッサーシュミット社は直ちに設計作業に着手したが、当時のジェットエンジンはまだ推力が低くこのため将来登場するであろう高速のレシプロ戦闘機に対しても余裕を持たせるために双発とした設計案P.1065を提示した。この設計案は空軍の認定を受けたが、当初の予定では直線翼を採用しエンジンは主翼に串刺しになったスタイルで装備していた。しかし、装備エンジンであるBMW003が予定の重量をオーバーしたため翼下面にポッド式に搭載するように設計が変更され、同時に主翼には18.5度の後退角が与えられることになった。

この機体はMe262と名づけられ、試作機は

1941年の初めに完成したもののエンジンが間に合わず、機首にレシプロエンジンを搭載して初飛行を行った。その後もエンジンのトラブルは続いたので、エンジンをJumo004に換装することが決まり、それ以降はトラブルもなく1943年12月から実戦部隊への配備が開始された。しかし同年秋にヒトラーが戦闘爆撃機として本機を用いることを強引に決めたため戦闘機として実戦に投入されたのは1944年10月からで、当時すでに1,000機以上の編隊によるドイツ爆撃が行われており、いかに高性能な機体とて劣勢を挽回するにはならず、生産機は1,400機以上だが、実際に部隊に送られた機体は半分以下で、稼働率も低く組織だった運用を行うのは難しかったことも否めない。これ以外にも偵察型や複座の夜間戦闘機型などが実戦に参加し、卓越した性能を見せつけたが、敗戦は目前に迫っていた。終戦間際に、戦闘機総監アドルフ・ガーラント中将や有名なエース、ウォルター・ノボト二少佐らが率いる戦闘団に配備され、B-17やP-51、モスキート相手に勇名を馳せた。

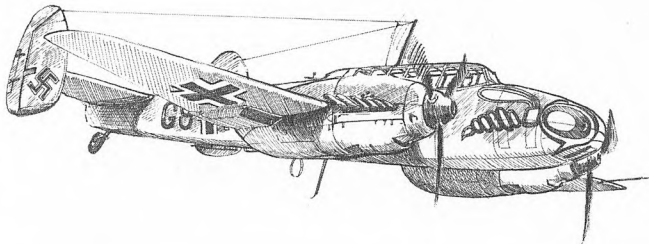
Messerschmitt Me110

## メッサーシュミット Me110

多用途機として用いられた双発重戦闘機

全長	12.07m
全幅	16.80m
出力	1,050hp×2
最大速度	560km/h
全備重量	6,028kg
武装	20mm機関砲×2 7.9mm機銃×5 250kg~500kg爆弾×2

長距離戦闘機や爆撃機の援護、迎撃、支援爆撃など多くの任務を1機でこなすことのできる万能双発戦闘機として1934年から開発が始められたもので、各社の設計案の中から3社の案が選ばれて試作を行い、その中で飛行性能と重武装を追求したBFW社(のちにメッサーシュミット社と改称)製が採用され1938年から生産に着手した。本格的な生産型として1938年末に登場したC型は、機首に装備した7.9mm機銃4挺、



20mm機関砲2挺、そしてコクピット後方の旋回式7.9mm機銃という重武装で電撃戦で活躍した。続くD型は航続距離の増大を図ったが、バトル・オブ・ブリテンでその低性能振りを露呈し、続くE型では戦闘機というより支援爆撃機として使われている。

Messerschmitt Me410

## メッサーシュミット Me410

Bf110の最終発展型

全長	12.48m
全幅	16.35m
出力	1,750hp×2
全備重量	9,651kg
最大速度	624km/h
武装	20mm機関砲×2 13mm×2 7.9mm×4

Bf110が試験を行っている最中の1937年に空軍省は早くも次期双発戦闘機に要求を提示した。この要求に従ってメッサーシュミット社が製作し制式化されたのがMe210だが、設計のミスで空力的な問題が多発し結局生産は中止された。このMe210を根本的に再設計して制式化されたのがMe410である。外見こそ似ているが主翼やエンジンナセルを新設計のものに改め性能が向上し、迎撃機や偵察、戦闘爆撃機として使用された。

Dornier Do335 Pfeil

## ドルニエ Do335 プファイル

前代未聞のエンジン中置配置戦闘機

全長	13.85m
全幅	13.80m
出力	1,905hp×2
全備重量	10,000kg
最大速度	763km/h
武装	30mm機関砲×1 15mm機銃×2

機首に牽引式のエンジンを、胴体中央に推進式のエンジンを装備した双発戦闘機だが、試験飛行で760km/hを記録しこの特異な装備法が間違いではないことを証明した。Ta152Hとともにレシプロ戦闘機として最も期待がかけられた機種で、戦闘機型以外に武装を強化した重戦闘機型、爆撃機型、偵察機型、複座の夜間戦闘機型など多くの機体が計画されたが、敗戦までに原型機と量産機合わせて35機が完成しただけに終わった。



Junkers Ju88

# ユンカース Ju88

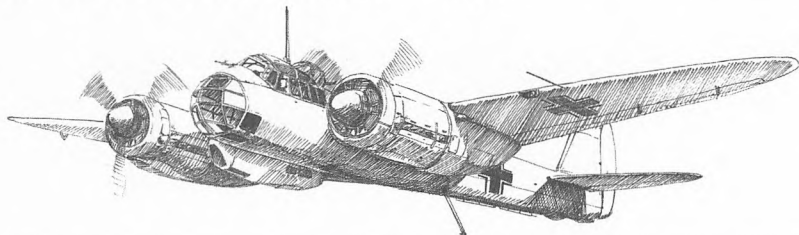
ドイツ空軍で最多生産された爆撃機

戦闘機より速い高速爆撃機として開発されたJu88だが、性能とサイズのバランスがよかつたために様々な任務に転用された。派生型も数多く、その多用途性では世界の爆撃機の中でもトップにランクされる機体である。

本機の開発は1935年より始まり、生産型のA型は1939年8月に部隊への引き渡しを開始した。急降下爆撃や雷撃もでき、最大速度

は450km/hを軽く越え、当時の戦闘機にやや遅れる程度の高速度性を誇った。しかし高速度性を追求するため燃料搭載量が少なく、爆撃機としては航続距離が短いという問題をもっていた。高速型として開発されたS型は機首のガラス部を整形しゴンドラを外してエンジンを強化した発展型で、速度は600km/hを越える。

全長	14.36m
全幅	20.08m
出力	1,400hp×2
全備重量	14,000kg
最大速度	475km/h
武装	7.92mm機銃×5 爆弾最大1,500kg ～4,000kg



Horten Ho229

# ホルテン Ho229

世界初の本格的無尾翼戦闘機

全長	7.47m
全幅	16.78m
出力	1,000kg×2
最大速度	1,000km/h
全備重量	8,500kg
武装	30mm機関砲×4

ホルテン兄弟が1920年代の終わりから研究を進めてきた無尾翼機の最終形態となった機体で、ジェットエンジンを搭載した本格的な試作機が完成する前に敗戦となってしまいその真価を発揮することなく終わったが、最近ではステルス性も追求していたことが判明しており、最新のB-2爆撃機の祖先と言ってよい機体でもある。本格的な試作機となる予定であった3号機からは生産がゴータ社に移され、名称がHo229からGo229に改められた。

Arade Ar234 Blitz

# アラド Ar234 ブリッツ

世界初の邦用ジェット爆撃機

全長	12.64m
全幅	14.44m
推力	800kg×2
全備重量	9,800kg
最大速度	742km/h
武装	20mm機関砲×2 爆弾1,500kg

開発当時は高速度性を活かした偵察が主任務とされていたが、後に爆撃機として用いられることになった機体で、1941年の初めから開発に着手した。試作機は1941年の末に完成したがエンジンの開発が遅れたため初飛行したのは1943年6月となってしまった。当初は離陸に専用のドリーを用い着陸はソリを使用するという特異な方式を採用していたが、後に引き込み脚に変更された。4発型も開発されたが生産機が配備される前に敗戦を迎えた。

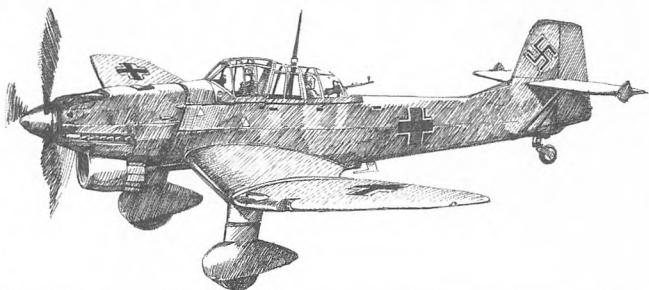
Junkers Ju87 Stuka

## ユンカース Ju87 シュツカ

大戦初期に活躍した急降下爆撃機

全長	11.5m
全幅	13.87m
出力	1,400hp
全備重量	6,577kg
最大速度	410km/h
武装	7.92mm機銃×3 爆弾最大1,800kg

ユンカース社で生産された機体としては初めてモノコック構造を採用してことでも知られるJu87は、開戦当初の電撃戦では圧倒的な威力を発揮して他国に急降下爆撃機の内容を再認識させた。しかし、バトル・オブ・ブリテンでイギリス戦闘機に完膚無きまでに叩きのめされ、その低速振りを暴露した機体でもある。初期に生産されたB型を空母艦載型としたのがC型で、折り畳み式主翼や着艦フックを装備していたが



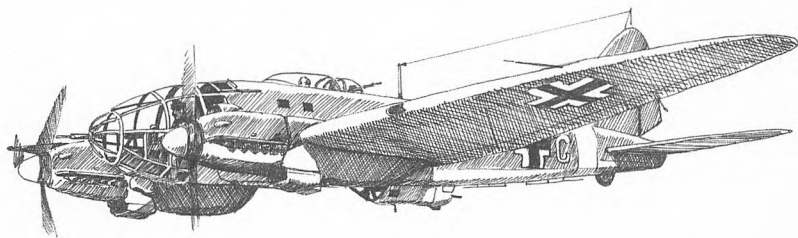
肝心の空母が完成しなかったため生産機は陸上基地で用いられた。また航続距離を延ばすため主翼下面に燃料タンクを装着したのが長距離型のR型である。エンジンを換装し出力向上と抵抗の減少を図ったD型が、1941年末に登場し以後の主力となった。

Heinkel He111

## ハインケル He111

ドイツ爆撃機の主力機

全長	16.40m
全幅	22.60m
出力	1,350hp×2
全備重量	14,000kg
最大速度	440km/h
武装	20mm機関砲×1 13mm機銃×1 7.9mm機銃×7



大戦全期を通じドイツ爆撃隊の主力として用いられた機体で、7,300機を超える機数が生産された。再軍備を予測して高速旅客機として開発され、初期の電撃戦では高戦闘機、非力だったことも手伝い、その活躍振りが各国の注目を集めた。が、バトル・オブ・ブリテン

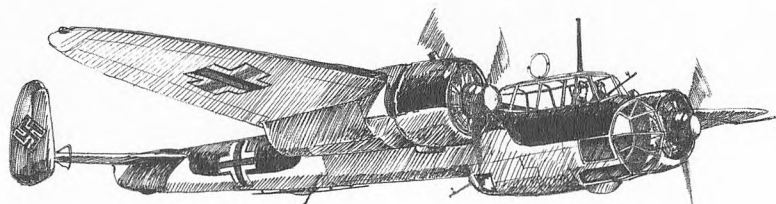
以降は既に旧式化し、その低速さと防御力の弱さがその後問題となってしまった。しかし他に替わる適当な機体もないままに生産が続けられ、数多くの派生型が登場、輸送任務やグライダーの曳航、V1空中発射母機など様々な任務に使用された。爆弾は最大2t搭載。

Dornier Do17

# ドルニエ Do17

電撃戦の初期に活躍した双発軽爆撃機

全長	15.79m
全幅	18.00m
出力	1,000hp×2
全備重量	5,962kg
最大速度	410km/h
武装	7.9mm機銃×5 爆弾最大1,000kg



双発爆撃機としては細くて長い胴体を採用したためフライングペンシル（空飛ぶ鉛筆）という軍用機らしからぬあだ名をつけられたDo17だが、当初高速郵便・旅客機として開発されたため当然と言えば当然であった。試作機は1934年の末に初飛行し、戦闘機より

早い高速爆撃機として名をあげスペイン内乱から実戦に参加した。1939年より生産が始まった最終生産型のZ型からキャビンの形状が改められ、軍用機らしいスタイルとなったが、すでに老朽化し、速度・航続力等、性能は二線級となっていた。

Dornier Do217

# ドルニエ Do217

Do17から発展した本格的爆撃機

全長	17.1m
全幅	19.0m
出力	1,700hp
全備重量	16,500kg
最大速度	515km/h
武装	13mm機銃×2 7.92mm機銃×2 爆弾最大3,000kg

登場当時は高性能であったDo17も、1930年代の後半になるとその能力の低さが目立ちはじめた。このため1937年にDo17を大型化し、爆弾搭載量と航続距離の増大を図った新型爆撃機の要求がドルニエ社に出され、これに応じて開発されたのがDo217である。初期に主力として用いられたE型は機首にDo17Zのイメージを残していたが、後期生産型のM型と液冷エンジンに換装したM型ではキャビンが一体化されている。

Heinkel He177 Greif

# ハインケル He177 グライフ

一見双発機、実は4発爆撃機

全長	22.0m
全幅	31.44m
出力	2,950hp×2
全備重量	31,000kg
最大速度	488km/h
武装	20mm機関砲×2 機銃×3 7.9mm機銃×3 爆弾最大6,000kg

当初は長距離を飛行して戦略爆撃を行うという思想をもたず、4発爆撃機を考慮していなかったドイツ空軍の中で初めて本格的な4発爆撃機として開発、実戦化されたのがこのHe177である。高速性を追求するためにエンジンは直列に2基を結合したので外見は双発機にしか見えない。しかし急降下爆撃をするため機体構造を強化したので重量が増加、速度は低下しエンジンの火災も多発、実用機と言うにはほど遠かった。

Battleship "Bismarck" class

# 戦艦 ビスマルク級

英国海軍を戦慄させたドイツ海軍の象徴

全長	251m
全幅	36m
基準排水量	41,700t
最大速度	29kn
武装	38cm砲×8 15cm砲×12 10.5cm砲×16 53cm魚雷発射管×8

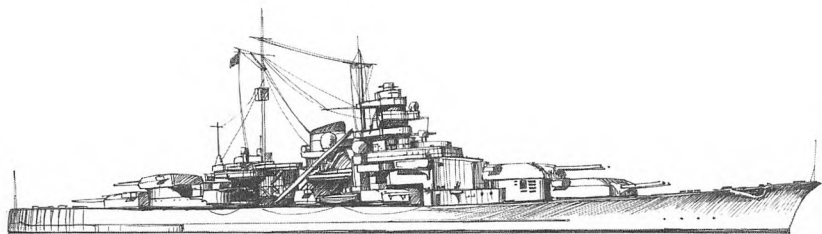
1935年に締結された海軍協定を受けて建造された最新鋭戦艦。ドイツ海軍復活の象徴的存在である。

ライバルとなるはずのフランス戦艦の主砲が38cmと想定されたため主砲を38cmとした。基本的には第一次大戦時の戦艦バイエルン級を近代化し水平防御を強化したものになっている。推進方式は当初電気式を考えていたが、信頼性の点で保証が持たず、結局オーソドックスな蒸気タービンとなった。ドイツの蒸気タービンは日本のものと違って高温高压が特徴で、推進軸も3本と特徴的だった。副砲はすべて砲塔式であったが、両用砲ではなく、高角砲は別に設置されていた。基準排水量は35,000tと発表されたが実際には41,700t、出現当時は世界最大の巨艦であった。

仮称艦名“F”として1936年に建造が開始された1番艦ビスマルクは1940年8月に竣工した。翌年5月には、重巡プリンツ・オイゲンを引き連れて大西洋の通商破壊作戦に出撃する。5月24日、デンマーク海峡でイギリス巡洋戦艦フッド、最新鋭戦艦プリンス・オブ

・ウェールズの2隻と戦い、フッドを一撃で撃沈、プリンス・オブ・ウェールズを大破する。しかしこの後復讐に燃えるイギリス海軍の厚重な包囲作戦により、プリンツ・オイゲンと別れ、単独でprest港に向かっているところを空母アークロイヤル搭載のソードフィッシュ雷撃機の攻撃を受けて舵が故障。グルグルと旋回するばかりとなったところを、イギリス戦艦群に集中攻撃され、ついに自沈してしまった。

旧式戦艦の代艦として建造された仮称艦名“G”ビスマルク級2番艦ティルピッツは1941年に竣工したが、完成後にはもっぱらノルウェーに引っ込み、イギリス軍の注意を引き付けた。ティルピッツ出撃の誤報のため混乱して壊滅したPQ17船団の悲劇は有名である。しかし1944年11月、5t爆弾3発、至近弾1発を受けてついに転覆、沈没した。最後までイギリス海軍艦艇と砲火を交えなかった巨艦ティルピッツの沈没までにイギリス軍の空襲はのべ14回、626機におよび、命中爆弾30発、至近弾3発を与えていた。



Battlecruiser "Sharnhorst" class

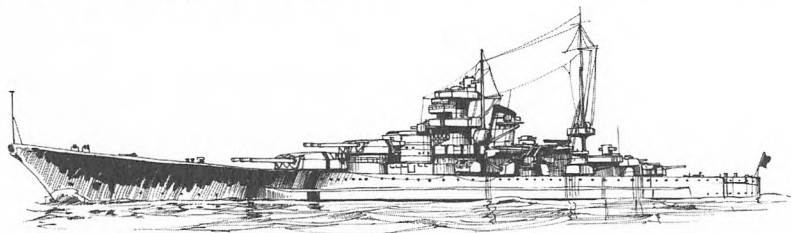
# 巡洋戦艦 シャルンホルスト級

空母を撃沈した高速戦艦

全長	226m
全幅	30m
基準排水量	32,000t
最大速度	31.5kn
武装	28cm砲×9 15cm砲×12 10.5cm高角砲×14 53cm魚雷発射管×6

シャルンホルスト級は、ポケット戦艦の拡大型として建造された。2番艦グナイゼナウ。公式には排水量26,000tと発表されたが、実際の排水量は32,000tであった。第二次大戦勃発と同時にノルウェー侵攻、通商破壊に活躍、1940年6月8日にはイギリス空母グローリアスと駆逐艦2隻を撃沈するという大戦果を挙げた。この後グナイゼナウとともに大

西洋での通商破壊作戦に従事、その後ブレストに帰還、1942年2月英仏海峡を突破してドイツ本国に帰還した。グナイゼナウはこの直後空襲で大破し、除籍された上主砲は海岸砲に流用されてしまった。シャルンホルストは1943年12月、敵船団攻撃のため北海に出撃、優勢なイギリス艦隊の攻撃により撃沈された。



Battleship "H" class

# 戦艦 H級

日本の大和級に匹敵する巨大戦艦

全長	277.8m
全幅	37.6m
基準排水量	60,900t
最大速度	30kn
武装	40.6cm砲×8 15cm砲×12 10.5cm砲×16

1939年に計画された、イギリス海軍に対抗できるバランスの取れた艦隊を整備するというZ計画で建造されることになった戦艦で、1943年後半から44年頃の完成を目指していた。1939年7月から8月にかけて1番艦「H」2番艦「J」が起工されたが、第二次大戦の勃発によって工事中止となり、翌年解体されてしまった。1番艦がフリードリヒ・デア・グロッセ、2番艦がグロス・ドイッチェラントと命名されるはずであった。

Aircraft Carrier "Graf Zeppelin"

# 航空母艦 グラフ・ツェッペリン

ついに完成しなかったドイツ海軍最初の空母

全長	262.5m
全幅	36.2m
基準排水量	23,200t
最大速度	33.8kn
武装	15cm砲×16 10.5cm砲×12 搭載機40機

1935年に計画された航空母艦「A」がグラフ・ツェッペリンで、1936年に起工された。設計にあたり日本空母を参考している。しかし完成前の1939年に第二次大戦が勃発し、工事は中止。1942年に再び工事は再開されたが、1943年に大型艦の工事中止命令によって建造は止められた。1945年4月、ソ連軍の進撃により、シュテッティンで自沈。1947年にソ連軍がこれを引き上げレニングラードに曳航したが、途中機雷に触れて沈没した。



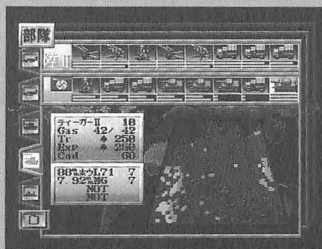
ちょっと

# 勝ちたくて…

## 敵ユニットを各個殲滅せよ！

どんなユニットでも戦うと、それなりに経験値と訓練値が上昇する。訓練値が上がるということは、実戦経験豊かなベテラン兵ということになっていく。経験値が上がると進化・改良につながる。つまり、技術的な面でその兵器の欠点は明らかになり、改良や進化への基礎データが蓄積されるという考え方である。

さて、訓練値が高い部隊は攻撃・防御とも強力になる。自軍ユニットが上がるのは嬉しいかぎりだが、当然、交戦した敵ユニットも上昇している。これを放置しておく、強力なユニットとして、キミの前に立ちただかることになるのだ。しかも、ユニットそのものが、強いティーガー戦車や



ただでさえ無敵重戦車ティーガーII型戦車がこうなる勝手に負えない。

P-51だったら手に負えなくなるだろう。ダメージを与えた敵ユニットはさっさと始末するべきだ。交戦した場合、ユニットの数かなり影響する。相手がどんなに強力なユニットでも、10対5で戦えば、ほぼワンサイドで勝利をつかめるだろう。序盤は徹底的に各個撃破を狙おう。

ドイツ第二帝国

Battleship "Richelieu" class

戦艦

リシュリュー級

フランス最後の戦艦

全長	247.9m
全幅	33m
基準排水量	35,000t
最大速度	30kn
武装	38cm砲×8 15.2cm砲×9 10cm砲×12

1935年に建造が開始されたリシュリュー級は、前作ストラスブール級と同様主砲を前部に集中、後部には副砲のみという特異なスタイルだった。建造中にドイツ軍がフランスに侵入、造船所が占領される恐れが出たため未完成のまま急遽就役、すぐさま脱出して、海外に移った。リシュリューはほぼ完成していたためその後海軍の主力として使用され、英国艦とも砲火を交えている。2番艦ジャン・パールは戦後の1950年に完成した。

Battleship "Littorio"

戦艦

リットリオ

誘導弾によって撃沈された戦艦

全長	237.8m
全幅	32.95m
基準排水量	43,835t
最大速度	30kn
武装	38cm砲×9 15.2cm砲×12 9cm砲×12 12cm砲×4

フランスのダンケルク級に対抗して建造されたヴィットリオ・ヴェネト級の2番艦。ブリエーゼ式水中防御を採用し、高速で運動性は優れていたが航続距離が短かく、2週間程度の作戦行動しかできなかった。レーダー等の機装面でも遅れていた。4隻の建造が計画されたが4番艦インペロは完成しなかった。1943年7月、イタリアと改名された。3番艦ローマは降伏後マルタに回航中、ドイツ軍の誘導弾攻撃によって撃沈された。

Leichte Panzerspawagen (20mm) Sdkfz222

## 4輪軽装甲車 Sdkfz222

機動性主体の快速装甲車

全長	4.8mm
全幅	1.95mm
全高	2m
重量	4.8t
最大速度	85km/h
武装	20mm機関砲×1 7.92mm機銃×1

4輪駆動の装甲車としては決定版的な存在で、20mm機関砲を搭載する全周旋回式の砲塔を備え武力偵察にも使われた。最高速度は85km/hと当時の装甲車としては快速で、その快足を活かして最前線の偵察任務に投入されている。本車の生産は1936年に始まり、1943年6月までに989輛が生産された。本来なら新型の軽装甲車が開発されるはずであったが、たび重なる計画変更により後継車は開発されずに終戦まで使用され続けた。

Schwere Panzerspawagen (Sdkfz231) 8-Rad

## 8輪重偵察装甲車 Sdkfz231

大戦初期に活躍した大型装甲車

全長	5.85m
全幅	2.2m
全高	2.35m
重量	8.3t
最大速度	85km/h
武装	20mm機関砲×1 7.92mm機銃×1

1934年に悪路での機動性向上を目的として開発に着手した大型の装甲車で、そのサイズもさることながら全輪が駆動し、また操行もできるという高度な機構を採用したことで知られる。このため車体前後にそれぞれ操縦室が設けられて前進も後進も同じ速度で行うことができたが、機構が複雑すぎ整備性が悪く高価すぎるという欠点ももっていた。20mm機関砲を搭載したSdkfz231/1が607輛生産された以外に、支援型、指揮車型が生産された。

Schwere Panzerspawagen (Sdkfz234/2)

## 8輪重装甲車プーマ

8輪重装甲車の決り版

全長	6.8m
全幅	2.4m
全高	2.28m
重量	11.74t
最大速度	80km/h
武装	50mm機関砲×1 7.92mm機銃×1

新型の8輪重装甲車として1940年8月から開発が始められた車輛で、北アフリカという熱帯地での使用を前提においたためドイツの装甲車輛としては珍しくディーゼルエンジンを採用していた。火力の向上を図って装甲車としては強力な50mm砲を装備していたが、生産は100輛で終わり20mm砲を装備した234/1に生産は移行し、200輛が完成した。また短砲身の75mm砲搭載の234/3が88輛、長砲身の75mm砲搭載の234/4が89輛生産されている。

Panzerkampfwagen II

## 2号戦車

実戦でも多用された訓練用の標準戦車

全長	4.81m
全幅	2.28m
全高	2.15m
重量	9.5t
最大速度	40km/h
武装	20mm機関砲×1 7.92mm機銃×2

7.92mm機銃を搭載する1号戦車の補助戦車として計画された軽戦車で、20mm機関砲を装備しているが装甲も薄く、あくまでも訓練用として開発されたが、電撃戦やソ連侵攻にも用いられた。最初の本格的な量産車となったA型はその前後の型と合わせて1,000輛以上が生産された。集大成的なF型は装甲の強化などが図られており524輛が完成、最終型となったL型はトーションバーを採用し、外見も大きくリファインされ100輛が作られた。

Panzerkampfwagen III

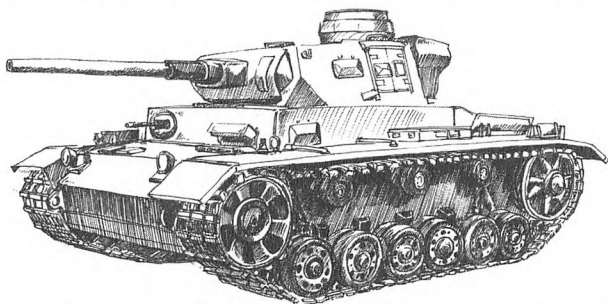
## 3号戦車

電撃戦の立役者

来るべき日に備えて1935年から開発が始められた戦車で、火力、装甲とも非力な1、2号戦車が当初より訓練戦車として開発されていたのに対し、本車は最初から装甲部隊の主力として開発、実戦化がなされた。初期に開発された型は先行量産型と言ってもよいも

ので、サスペンションなど各部に変更が見られるが、E型から本格的な生産が始められ、形状も細部の変更を除き、このE型でほぼ完成した。

以後、F型(435



全長	6.28m
全幅	2.95m
全高	2.5m
重量	21.5t
最大速度	40km/h
武装	50mm砲×1 7.92mm機銃×2

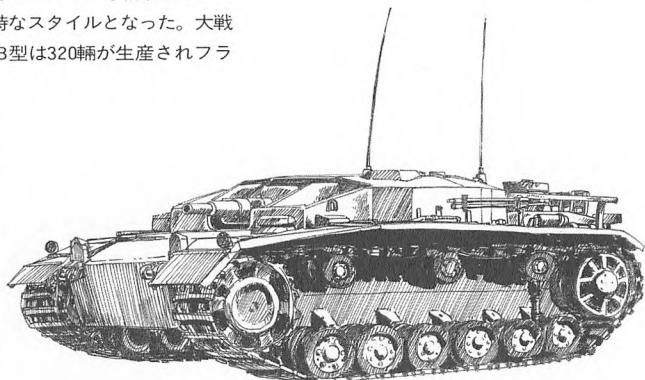
輛、G型(600輛)、H型(308輛)、J型(2,616輛)、L型(653輛)、M型(250輛)、N型(663輛)が生産された。H型以降の車輛は従来の37mm砲に替えて50mm砲を装備し、J型の生産半ばからは長砲身の50mm砲が採用され、装甲なども強化されて1944年まで使用が続けられた。

Sturmgeschutz III

## 3号突撃砲

歩兵支援から対戦車車輛に発展した自走砲

歩兵と行動をともにし強固な敵陣突破に用いられる自走砲として、1936年6月から開発が開始された。全高が人間の高さを越えないという要求があったためIII号戦車をベースに無砲塔式の独特なスタイルとなった。大戦初期に活躍したB型は320輛が生産されフランス戦の終了後に部隊への配備を始め、ロシア侵攻にも参戦している。E、F型と生産が進む間に任務がソ連のT-34やKV-1等、優秀な敵戦車撃破へと変



全長	6.77m
全幅	2.95m
全高	2.16m
重量	23.9t
最大速度	40km/h
武装	75mm砲×1 7.92mm機銃×1

化する。最終生産型のG型では、4号戦車H型と同じ48口径の75mm砲を装備し、7,720輛が生産され、装甲師団の戦車不足を補った。

Panzerkampfwagen IV

# 4号戦車

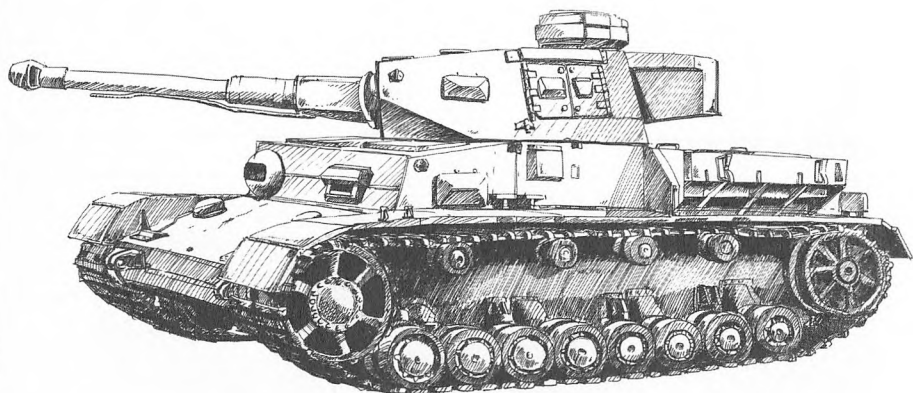
軍馬と呼ばれたドイツ軍の主力戦車

全長	7.02m
全幅	2.88m
全高	2.68m
重量	25t
最大速度	38km/h
武装	75mm砲×1 7.92mm機銃×2

3号戦車とともに開発が始められた戦車で、3号戦車が37mm砲を搭載したのに対し、この4号戦車ではより強力な75mm砲を採用していたが、24口径という短砲身で対戦車戦闘を中心には考えておらず、あくまでも歩兵の支援が目的であった。当時としては他国に先んじて機甲戦を最も理解していたドイツ軍ですらこの程度の考えであったのだ。同時期に開発を始めた3号戦車が初期の型では先行量産車的なものであったのに比べ、4号戦車は最初よりほぼ完成したスタイルとなっていたが、これは技術的革新よりも確実な主力戦車としての早急な配備を目指していたからである。

本格的な量産型となったD型は229輛が生産され、続いて砲塔を新型化したのに加え装甲の強化を図ったE型が223輛生産された。このE型までは一部の型を除き操縦室の前面が2段となっていたが、F型からはより生産性が高く車内容積も広く取れる一枚板に変わり、以後最終生産型のJ型まで踏襲されている。

このF型は637輛が完成しているが、このうち175輛には対戦車戦闘能力の向上を図り主砲は長砲身43口径75mm砲に換装された。このため従来の短砲身75mm砲搭載車はF1、長砲身型はF2と呼称されている。1,687輛が生産されたG型は生産当初はF2型と同じ仕様であったが、途中さらに強力な48口径75mm砲が採用され、増加装甲の追加も行われて連合軍のM4シャーマンやソ連軍のT-34/76と互角に戦うことができた。車体と砲塔の側面に対戦車銃防御のサイドスカートが装着されるようになったのもこのG型からである。シリーズ最多生産型となったH型は、3,774輛が完成した。G型の生産中で採用された48口径砲が最初から装備された以外はG型と同仕様だが、生産中に各部の簡易化が行われ生産性の向上が図られた。最終型となったJ型はさらに簡素化がされ、それまで砲塔旋回用として搭載されていた補助エンジンを外し燃料タンクを新設したのが特徴で、1,758輛が生産されている。



Panzerkampfwagen V “Panther”

## 5号戦車パンター

攻、走、守のバランスがとれた主力戦車

全長	8.86m
全幅	3.4m
全高	3.08m
重量	45.5t
最大速度	46km/h
武装	70口径75mm砲×1 7.92mm機銃×2

バルバロッサ作戦でソ連のT-34戦車と遭遇すると、ドイツ軍が主力として用いていた3号戦車や37mm対戦車砲が全く役に立たないことが判明した。これがいわゆるT-34ショックで、その対処として新たに開発された主力戦車がこの5号戦車パンターである。

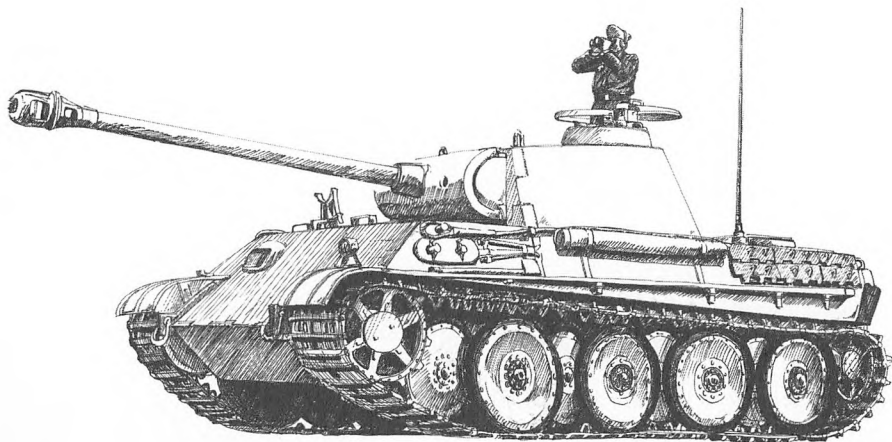
開発に当って捕獲したT-34を十分検討した結果、それまで装甲板を直角に組み合わせ、ゴツゴツした感じのドイツ戦車とは異なり、T-34と非常によく似た避弾径始に優れたスタイルとなった。このためT-34とサイズこそ違いが兄弟と呼んでもおかしくない戦車といえよう。

当初MAN、ダイムラーベンツ両社の競作とされたが、ダイムラーベンツ社の試作車は要求に従ってT-34に範を得た大馬力のディーゼル・エンジンを採用しており、結局当時の技術では大馬力のディーゼル・エンジンの実用化は不可能であったため、1942年5月にMAN社の案が選定され、12月より5号戦車D型として生産が開始された。このD型は

850輛が生産され、1943年7月のクルスク戦を初陣としたものの、実用化を急ぎすぎたため機械的故障が多発し、期待されたほどの活躍を見せるには至らなかった。

D型の問題点を改めてより実用性を高めたのが1943年8月から生産に入ったA型で、車体前方の機銃をポールマウント式として近接防御能力を高めるとともに、D型の後期生産車で採用されたペリスコープ付きのキューボラが標準装備となるなど、外形もやや変化している。A型は2,000輛が生産され、1944年3月からは最終型で集大成といえるG型の生産が開始された。

G型では車体側面の装甲を強化し、取り付け角が変化したのに加え、後部の段がなくなりよりすっきりとした外見となった。また車体前部のハッチは回転式から単純なヒンジ式に替わり、回転式のペリスコープも採用されている。敗戦直前まで生産は続けられ、3,126輛が完成したが一部の車輛では鋼製転輪を装備するなど細部に改良が加えられている。





Panzerkampfwagen VI "Tiger I"

# 6号戦車ティーガー I

ドイツ初の本格的重戦車

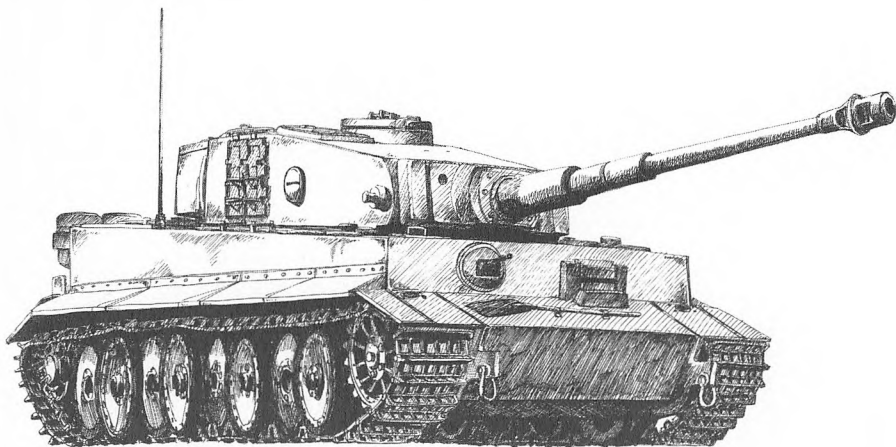
全長	8.45m
全幅	3.70m
全高	2.93m
重量	57t
最大速度	38km/h
武装	88mm砲× 1 7.92mm機銃× 2

ソ連への侵攻前から重戦車の開発を行っていた兵器局は、侵攻直前の1941年5月にヘンシェル、ボルシェ両社にVK4501の名称で新型重戦車の試作を命じた。この要求に従い試作車が製作され試験の結果ヘンシェル社のVK4501(H)が選ばれ、6号戦車ティーガー Iとして生産されることになった。当初は75mm砲を主砲として採用する予定であったが、開発中にそれまでドイツ軍の戦車が出会ったことのない強敵に遭遇した。これがT-34とKV-1で、この結果予定されていた75mm砲では非力であるとし、フランス戦からその高初速を生かして水平射撃に用いられた88mm高射砲を搭載することになった。このため砲塔は競争相手となったボルシェ社が、同社の試作車VK4501(P)用として開発したものを一部改良を加えて採用されている。

ティーガー Iは1942年7月から44年8月までに1,354輛が生産されたが、生産時期によって変更が見られる。まず、初期生産車とよばれるものは、外装式エアクリナーを標

準装備とし、その重量から渡れる橋が制限されるため潜水装置と呼ばれる吸排気装置が採用された。しかし生産に手間取るために早い段階でこの潜水装置は廃止され、その後エアクリナーも廃止された。続く中期生産車は車長用キューボラが円筒形の視察スリット付きのものから、周囲にペリスコープが設けられた背の低い新型に替わり、砲塔左側に装着されていたピストルポートが廃止された。また一部の車輛では走行時に砲身を固定するトラベリングクランプが新設されている。後期型は転輪が内部にゴムを仕込んだ鋼製転輪に換装され、砲塔周囲にあたる部分に防弾リングが新設された。この鋼製転輪は以前の型に対しても換装作業が行われている。

T-34に対抗できる戦車として登場したティーガー Iは、続くバンターやケーニヒスティーガーがT-34の影響を強く受け外形も似ているのに対し、開発がT-34との遭遇前に始まったため、形態的には従来の設計思想を引き継ぐ最後のドイツ戦車となった。



Panzerkampfwagen VI "KönigsTiger"

## 6号戦車ティーガーII

第二次大戦最強の重戦車

全長	10.3m
全幅	3.76m
全高	3.08m
重量	66t
最大速度	35km/h
武装	88mm砲×1 7.92mm機銃×2

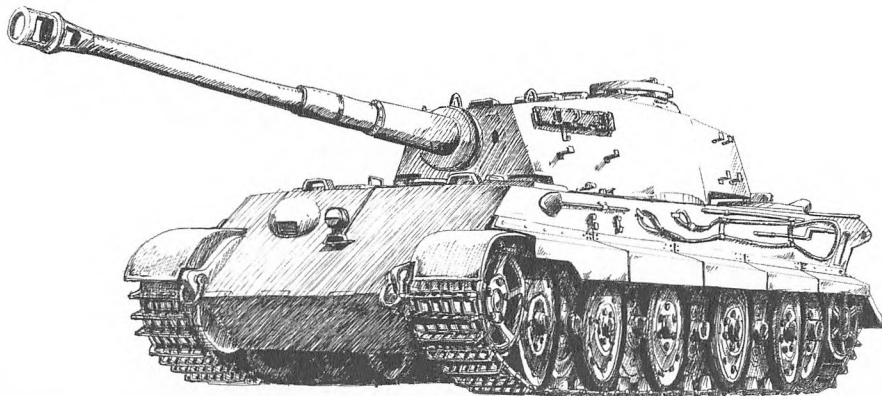
ティーガー I 開発当時に検討された71口径の88mm砲搭載型の具現化として、1943年1月から開発に着手した新型重戦車で、ティーガー I が従来のドイツ戦車の流れを汲んで車体が平面の装甲板を溶接して構成されているのに対し、捕獲したライバルのT-34を徹底的に検討して設計が進められたため、避弾径始に優れたスタイルにまとめられている。

これは本車に先立って開発されたパンターも同様で、このため名称こそティーガー I と同じ6号戦車でティーガー II とも呼ばれているものの、実質的にはパンターの大型化と見るべきだろう。実際サイズや武装、装甲の違いがあるものの車体の形状などは全く同じと言ってよいほどだ。残念なことにドイツでは車載用エンジン技術がまだ遅れており、重量がパンターより20t以上も上回っているのにエンジンは同じ600馬力のものが用いられていて、これでは機動性の確保などできるはずはなかった。ドイツの大型戦車を評して「たずらに大型化し過ぎた」といことが多いが、これは小型かつ大馬力のエンジンを実用化で

きなかったため、車体の全高とエンジンの全高がほぼ一致しているため必然的に車体のサイズが決まってしまったと見るほうが妥当である。

試作車は1943年12月に完成したが、この車輻にはボルシェ社が設計した砲塔が搭載されていた。この砲塔は前部が丸みを帯びたいかにも被弾に対して効果的な形状のように見え1944年2月に登場した生産車でも採用されていたが、これに先立つ試験で実際には前部に命中した弾丸が丸みで滑って、装甲の薄い車体上面を直撃することが判明したため、製作が進められていた50基を除き、新たにヘンシェル社で設計した前面に平面の装甲板を用いた新型砲塔が搭載されることになった。

生産は1945年3月まで行われたが、パンターやティーガー I よりも資材と生産時間を要するため、ボルシェ設計の砲塔を搭載した50輻を含んで489輻が完成したのにとどまる。また、燃費の悪さ、重量に起因する故障等もあり、連合軍将兵から死神の如く恐れられながらも、ドイツを守り切れなかった。



Panzerkampfwagen "E-50"

## E-50戦車

統制化されたパンター後継車

データ不明

1943年にそれまで無計画に生産を進めてきた戦車生産を、統制して重量別に分けて単純化を図るE計画の一環として開発に着手したもので、このE-50はパンターに替わる車輛として可能な限りケーニヒスティーガーと、部品の共用化を図ることが目的とされて開発に着手した。同じくケーニヒスティーガーの後継となるE-75と車体は同じものを流用する計画で、足回りも単純化が図られた。しかし時既に遅く計画の域を出ないまま敗戦を迎えた。

Panzerkampfwagen "Tiger (P)"

## ティーガー(P)

ティーガーになれなかったポルシェの野心作

全長	9.94m
全幅	3.98m
全高	2.8m
重量	57t
最大速度	35km/h
武装	88mm砲×1 7.92mm機銃×2

1940年5月に要求が出された重戦車開発計画に応じてポルシェ社が試作した戦車で、ガソリンエンジンで発電機を起動させこれにより得た電力でモーターを駆動させ動力とするガソリン・電気式機関を採用したのが特徴であった。さらにサスペンションもトーションバーを内部に組み込みそれぞれ2個の大直径転輪を配するというこれまた独創的なものであったが、走行性能に問題があり不採用となった。技術に溺れた好例といえよう。

Panzerkampfwagen "Maus"

## マウス戦車

空前絶後、世界最大の超重戦車

全長	10.09m
全幅	3.67m
全高	3.66m
重量	188t
最大速度	20km/h
武装	128mm砲×1 75mm砲×1 7.92mm機銃×1

現在までに作られた戦車の中でも最大のもので、戦車の出現当時に考えられた陸上戦艦の思想をそのまま具現化したものである。開発は1942年6月からポルシェ社の手で始められ、同社得意のガソリン・電気式機関を採用した。主砲は128mm砲が搭載されたが、1944年6月に完成した試作2号車を見たヒトラーは主砲が小さすぎると指摘し、量産車では150mm砲を装備することになったが、結局2輛が試作されただけで計画が終了した。

Panzerkampfwagen "E-75"

## E-75戦車

其通化が図られたティーガーII型の後継車

データ不明

E-50やE-100と同じく戦車生産を単純化するE計画で開発が始められたこのE-75はケーニヒスティーガーに替わる75~80t級の車輛であった。車体はパンターの後継として同時に開発を始めたE-50と共用化が図られているが、砲塔と転輪はケーニヒスティーガーによく似た独自のものが採用される予定だった。また主砲の命中精度を高めるためにバラマシ測遠機が搭載されるなど当時の最新技術が盛り込まれたが計画のみに終わった。

Panzerkampfwagen 38(t)

## 38(t)戦車

チェコから捕獲した優秀戦車

全長	4.61m
全幅	2.14m
全高	2.4m
重量	9.85t
最大速度	42km/h
武装	37mm機関砲×1 7.92mm×2

1939年3月のチェコ併合により手に入れたチェコの国産戦車で、その性能は3号戦車と大差なく初期の電撃戦から独ソ戦までアフリカ以外の各戦線で大活躍している。ドイツ軍では装填手1名を追加してより戦闘能力の向上を図ったため、オリジナルより弾丸搭載数が少なくなった。最初の生産型A型は150輦が生産され、以後B、D、E、F、Gの各型が合わせて、1,171輦が完成した。E型以降では戦訓により装甲が強化されている。

Jagdpanzer "Hetzer"

## 駆逐戦車ヘツツァー

38(t)から発展したミニ駆逐戦車

全長	6.38m
全幅	2.63m
全高	2.17m
重量	15.75t
最大速度	42km/h
武装	75mm砲×1 7.92mm機銃×1

グデーリアン将軍の要求で1943年の初めから開発が開始され、すでに旧式化して戦車としては使えずに自走砲用の車体となっていた38(t)戦車をベースに開発された。小柄な車輛で、戦闘室は狭かったが、48口径の75mm砲を採用したため、攻撃力に限ればより大型の3号突撃砲G型や4号駆逐戦車と同じ能力であった。1944年夏より実戦に投入され、1945年5月までに2,584輦が完成した。出現が遅かったのが惜まれる傑作駆逐戦車だ。

Jagdpanzer IV

## 4号駆逐戦車

大戦後半に登場した優秀な対戦車兵器

全長	6.85m
全幅	3.17m
全高	1.85m
重量	24t
最大速度	40km/h
武装	75mm砲×1 7.92mm機銃×1

3号突撃砲の後継車として開発された駆逐戦車で、当初は新型自走砲と呼ばれていた。4号戦車をベースに、パンターと同じ70口径の75mm砲を搭載する予定で開発されたが、供給が間に合わなかったため48口径の75mmを搭載して暫定的に生産を行い、70口径の75mm砲の供給が始められた時に直ちに生産ラインを替えることができるよう最初から戦闘室は大型のものが装備された。769輦が生産され低いシルエットを生かし東西両戦線で活躍した。

Jagdpanzer IV/70(V)

4号駆逐戦車  
L70(V)

パンターと同じ主砲を搭載した駆逐戦車

全長	8.50m
全幅	3.17m
全高	1.85m
重量	25.8t
最大速度	35km/h
武装	75mm砲×1 7.92mm機銃×1

4号駆逐戦車に当初の計画どおりパンターと同じ70口径の長砲身砲を搭載した車輛で、最初からこの長砲身砲の搭載を予定して大型の戦闘室を採用していたため、長砲身は極めてスムーズに行われた。ローシルエット、強力な主砲、そして避弾径始に優れた形状と強固な装甲で多大な戦果を収めたが、930輦という少数生産では雲霞のごとく押し寄せる連合軍の前になすすべもなかった。なお生産中に名称は4号戦車/70(V)と改められている。

Jagdpanther

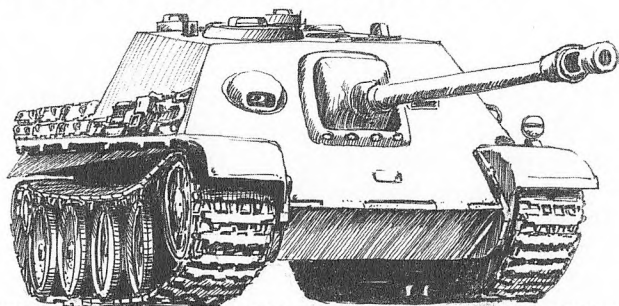
# 駆逐戦車パンター

ドイツが生んだ最優秀駆逐戦車

5号戦車パンターを原型として、71口径の88mm砲を搭載する重突撃砲として1942年10月から開発が始められたもので、1943年12月に試作車が完成した。ソ連のSu-85やSu-122を十分検討して完成されたそのスタイルは、避弾径先に優れた優美なもので世界最良の駆逐戦車と言われるが、少々まとまりが良すぎる気がしないでもない。パンター自体が大柄のため本車もまたかなり大型な車輛となったが、強力な武装

全長	9.90m
全幅	3.42m
全高	2.72m
重量	46t
最大速度	46km/h
武装	88mm砲×1 7.92mm機銃×1

と装甲がそれを補うのに十分であった。連合軍がノルマンディーに上陸した後の戦闘に投入され、その卓越した性能を遺憾なく発揮したが、1945年5月までに392輻しか完成せず、組織だった運用を行うにはあまりにも少なく、また使用期間も短かった。



Sturmgeschütz Mit 8.8cm Pak 43/2 "Elefant"

# エレファント

劣悪な機動性に泣いた重駆逐戦車

全長	8.14m
全幅	3.38m
全高	2.97m
重量	65t
最大速度	30km/h
武装	88mm砲×1 7.92mm機銃×1

ヘンシェル社のVK4501(H)に敗れたポルシェ社製VK4501(P)は、1943年夏に予定されているソ連軍への攻勢に備えて、この車体を重突撃砲に転用することが決定された。当初設計者であるポルシェ博士の名を採ってフェルディナンドと名付けられたこの車輛は、71口径という長砲身の88mm砲を車体後方に設けられた戦闘室に装備しており、前面の装甲厚は200mmにも達していた。90輻が生産され、後に無線席前面に7.92mm機銃が追加された。

Jagdpanzer VI "Jagdtiger"

# ヤークトティーガー

世界最大、最強の駆逐戦車

全長	10.65m
全幅	3.63m
全高	2.95m
重量	70t
最大速度	36km/h
武装	128mm砲×1 7.92mm機銃×1

開発に着手したばかりのケーニヒスティーガーをベースに、1943年の初めから開発作業が開始され、1944年4月に試作車が完成した重駆逐戦車。55口径の128mm砲を採用し、前面の装甲厚は250mmと断然他を圧している。いかなる連合軍戦車も撃破することが可能で、その重量とサイズゆえに運用できる局面は限られていたが、その威力は絶大なものがあった。しかし敗戦までに完成したのはわずかに77輻で戦局を左右するには至らなかった。



Panzerjäger II "Marder II"

## マルダーII

費用対効果に優れた簡易型対戦車自走砲

全長	6.36m
全幅	2.28m
全高	2.2m
重量	10.8t
最大速度	40km/h
武装	75mm砲×1 7.92mm機銃×1

ソ連に侵攻したドイツ軍を迎えたT-34の存在は、それまでの戦車を時代遅れにしてしまうのに十分だった。このためより強力な戦車の開発を急ピッチで進めることになるが、実戦化には時間がかかるため既存の戦車をベースに強力な砲を搭載する対戦車自走砲として開発されたのがマルダーIIである。2号戦車が母体として選ばれ、優秀な75mm対戦車砲を搭載し、パンター一等、大型戦車の実戦化以後も使用が続けられた。

Panzerjafer 38(t) "Marder III"

## マルダーIII

38(t)戦車ベースの自走砲

全長	5.85m
全幅	2.16m
全高	?m
重量	?
最大速度	42km/h
武装	76.2mm砲×1 7.92mm機銃×1

ソ連との戦いが始まると、戦車の不足がクローズアップされた。その解決法として旧式化した38(t)戦車の車体に、捕獲したソ連軍の76.2mm対戦車砲を搭載したマルダーIIIが開発された。1942年から配備され、東部戦線や北アフリカで活躍した。やがて国産の75mm Pak40を搭載し、より車高が低いH型やM型へと改良され、戦車猟兵大隊等に配備された。同じ38(t)戦車がベースのヘッツアーの生産が始まった1944年5月に生産が止められた。

Panzerjäger III/IV "Nashorn"

## ナスホルン

鋭い角を持った犀

全長	8.44m
全幅	2.86m
全高	2.65m
重量	24t
最大速度	42km/h
武装	88mm砲×1 7.92mm機銃×1

T-34をアウトレンジで一撃に葬れる対戦車砲として開発が進められていたPak43を搭載する4号戦車が母体の対戦車自走砲として、1942年半ばから開発が始められた。1943年夏に予定されていた攻勢での投入を考えて、急ピッチで開発が進められ、494輦が生産された。主砲はオープントップの大きな戦闘室に搭載され、攻撃力は同じ砲を搭載するエレファントなどかわらないが、オープントップに加え戦闘室の装甲厚が10mmと薄いのが難だった。

Demag D7 (SdKfz 10/4)

## デマークD7

大戦全期で多用された軽ハーフトラック

全長	4.75m
全幅	1.93m
全高	2.0m
重量	5.5t
最大速度	65km/h
武装	20mm機関砲×1

大戦勃発前に実用化された軽ハーフトラックで、牽引能力は1tであったため1tハーフトラックとも呼ばれる。当時主力対戦車砲として用いられていた37mm対戦車砲の牽引などを目的とし、車体の後部は兵員席とされ砲の操作員や兵員など6名を収容することができた。生産終了までに約17,500輦が生産されたが、このうち610輦は20mm高射機関砲を搭載した対空自走砲(SdKfz 10/4)として完成している。

Zugkraftwagen 8t (Sdkfz 7/1)

## 8t ハーフトラック (Sdkfz 7 / 1)

対空型大型ハーフトラック

全長	6.85m
全幅	2.40m
全高	2.62m
重量	11.55t
最大速度	50km/h
武装	20mm機関砲×4

ドイツ軍は数多くのハーフトラックを実用化した。その中でもこの8tハーフトラックは大型に属しており、8tという大きな牽引能力を生かして大重量の88mm高射砲や対戦車砲の牽引に多用された。火砲の牽引以外にも用いられたがなかでも知られるのが対空型で、車体後部のキャビンを外し、フラットなプラットフォームに4連装20mm機関砲を搭載したこのSdkfz 7 / 1は319輛が生産されて、対空攻撃はもちろん対地制圧にも活躍した。

Zugkraftwagen 12t (Sdkfz 8)

## 12t ハーフトラック (Sdkfz 8)

ドイツならではの大型ハーフトラック

全長	7.35m
全幅	2.5m
全高	2.8m
重量	20t
最大速度	50km/h
武装	88mm砲×1

戦前にダイムラーベンツ社の手により開発された大型ハーフトラックで、その牽引能力は12tに達し15cm榴弾砲やキャノン砲などの大型火砲の牽引に重用された。また1939年にはこの12tハーフトラックをベースに車体後部に88mm高射砲を搭載した重対戦車車輛が開発され、25輛が対戦車車輛として生産された。ポーランドやフランス侵攻で用いられたが、機動性が悪く防御もほとんど考えられていなかったため以後実戦では使用されなかった。

Flakpanzer 38(t)

## 38(t) 対空戦車

38(t)戦車ベースの簡易型対空戦車

全長	4.51m
全幅	2.14m
全高	2.17m
重量	9.75t
最大速度	42km/h
武装	20mm機関砲×1

連合軍の戦闘爆撃機の脅威に対抗して1943年から4号戦車をベースとした対空戦車の開発が始まったが、実戦には時間がかかるため暫定的に38(t)戦車を母体とした対空戦車が開発され、140輛が生産された。マードーIII用に開発された新型車体を用いて製作され、車体後部には20mm対空機関砲を搭載し周囲には折り畳み式の装甲板を配して、防御と作業性の確保が図られているユニークな車輛となったが、小型なため火力不足が問題であった。

PzFlak IV "Möbelwagen"

## メーベルワーゲン

家具運搬車と呼ばれる対空自走砲

全長	5.92m
全幅	2.95m
全高	2.73m
重量	24t
最大速度	38km/h
武装	37mm機関砲×1

4号戦車をベースとした本格的な対空戦車として最初に生産に入ったのがこのメーベルワーゲンで、試作車には4連装20mm機関砲が搭載されていたが、量産車では火力の向上を図ってより強力な37mm機関砲が搭載された。

砲塔を外してプラットフォームに整形された車体上面に37mm機関砲が搭載され、周囲に4枚の大きな起倒式装甲板が設けられたが、この独特な形状からメーベルワーゲン（家具運搬車）という名前が与えられ、240輛が生産された。

Flakpanzer IV / 2cm "Wirbelwind"

## ヴィルベルヴィント

4号戦車から改造された対空戦車

全長	5.92m
全幅	2.9m
全高	2.76m
重量	22t
最大速度	38km/h
武装	20mm機関砲×4

期待されて生産に入ったものの、生産が必要に追いつかないメーベルワーゲンを補佐する意味で、前線から修理などで後方に引き上げてきた4号戦車をベースに改造された対空自走砲で、特徴ある8角形の砲塔に4連装20mm機関砲を搭載し、生産の簡易化と防御力の向上を図っている。86輻が改造されたが1944年の秋に4連装の20mm機関砲では火力が不足と判断され、37mm機関砲を装備するオストヴィントに改造ラインが切り替えられた。

Flakpanzer IV / 3.7cm "Ostwind"

## オストヴィント

全長	5.92m
全幅	2.95m
全高	3.0m
重量	25t
最大速度	38km/h
武装	37mm機関砲×1

ヴィルベルヴィントでは火力不足が目立ったために1944年12月から製作された4号戦車ベースの対空戦車で、新たに開発された6角形の砲塔に37mm機関砲を搭載した以外はヴィルベルヴィントと同じで、4号戦車から改造された。本来ならば対空戦車の決定版として開発が進められていた30mm連装機関砲装備のクーゲルブリッツが生産される予定であったが生産されなかったため、暫定的にオストヴィントとして36輻を改造、7輻が新たに生産された。

88mm Flak auf Sonderfahrzeug

## 88mm高射砲搭載 特殊車輛

試作に終わった88mm高射砲搭載の対空自走砲

全長	7.0m
全幅	3.0m
全高	2.8m
重量	26t
最大速度	35km/h
武装	88mm砲×1

1941年に開発要求が兵器省から出された専用の88mm砲を搭載する自走砲で、当初はキャノン砲を搭載する対戦車車輛として計画された。が、車体が完成した時点で同じ88mm砲ながら高射砲を装備する対空自走砲に変更され1942年末に完成した試作車はFlak37が搭載された。側面と後面には起倒式の装甲板が取り付けられている。1944年にはさらに性能の向上したFlak41に換装されたが、制式化せず3輻が試作されただけに終わった。

Panzerkampfwagen 38(t) AASF "Grille"

## グリーレ

簡易型歩兵支援自走砲

全長	4.95m
全幅	2.15m
全高	2.48m
重量	10.5t
最大速度	42km/h
武装	150mm砲×1 7.92mm機銃×1

旧式化した38(t)戦車をベースに150mm重歩兵砲を搭載した自走砲がこの車輛で、ヒトラーの支援自走砲には昆虫の名を冠せよという命に従い、グリーレ(コオロギ)という名が与えられた。38(t)からの改造車と、エンジンを車体中央に移動し戦闘室の容積の拡大を図った後期型車体の2種から製作されたが、いずれもグリーレと呼ばれる。旧型車体からの改造車輛と、後期型車体を用いて生産された車輛とを併せて1,100輻以上が完成した。

Panzerkampfwagen II (sf) "Wespe"

## ヴェスペ

### 軽支援自走砲の傑作車輛

全長	4.81m
全幅	2.28m
全高	2.30m
重量	11t
最大速度	40km/h
武装	105mm砲×1 7.92mm機銃×1

1942年の初めに105mm砲を搭載する新型火力支援専用車の開発要求が出され、2、3、4号各戦車の車体を用いた車輛が検討されたが、そのなかで一番実用性が高いと判断された2号戦車を原型として用いることが決まった。最初はより本格的な車輛が登場するまでの応急車として考えられていたが、実戦に投入してみると非常に実用性が高い傑作ということが判明した。主砲には105mm榴弾砲を搭載し、車体後部は戦闘室という標準的なスタイルだ。

Panzerkampfwagen III・IV (sf) "Hummel"

## フンメル

### 装甲師団の後ろ盾

全長	7.17m
全幅	2.97m
全高	2.81m
重量	24t
最大速度	42km/h
武装	150mm砲×1 7.92mm機銃×1

装甲師団と行動をともにして火力支援を行う車輛として計画が開始された自走砲で、当初III号戦車の車体を用いて105mm軽野砲の搭載が検討されたが、車体のサイズに比べ105mm砲では小型過ぎるため、最終的に150mm榴弾砲を装備することが決まった。1943年の夏に予定していた攻勢に投入すべくまず100輛が発注されたが、最終的には700輛以上が完成し、東西両戦線で大活躍した。車体、戦闘室ともナスホルンとほぼ共通となっている。

37mm Pak36

## 37mm対戦車砲

### 大戦初期に用いられた非力な対戦車砲

口径	37mm L/45
砲身長	1.67m
重量	432kg
初速	762m/秒
最大射程	7,000m

1933年に開発された小型軽量の対戦車砲で、開発当時は標準的な口径であったが、フランス侵攻で連合軍の装甲の厚い戦車にはほとんど歯が立たないことが判明してしまった。さらにソ連侵攻ではT-34にかすり傷さえ負わせることができず、ドアノッカーや聴診器という芳しくないあだ名を頂戴してしまったほどであった。このため後に専用の成型炸薬弾が開発され実戦にも用いられたが、1941年以降には完全な二線級兵器となってしまった。

50mm Pak38

## 50mm対戦車砲

### 初期の主力対戦車砲

口径	50mm L/60
砲身長	3.17m
重量	966kg
初速	1198m/秒
最大射程	2,650m

37mm Pak37に続く対戦車砲として1936年に開発が始められ、貫通力と射程の向上を図って口径は50mmに増加した。1938年に制式化されたが、実戦に投入されたのは1940年の末からである。当時対戦車砲として唯一T-34を撃破できるとして重用されたが、敵戦車の装甲強化によって第一線の座に止まられたのは1943年頃までであった。しかしその後も使用は続けられ、敗戦まで東西両戦線において活躍している。

75mm Pak40

## 75mm対戦車砲

中型対戦車砲の決定版

口径	75mm	L/48
砲身長	370cm	
重量	1.5t	
初速	933m/秒	
最大射程	7,680m	

37mm、50mmと対戦車砲の開発を続けてきた陸軍総司令部は、1939年にさらに強力な75mm対戦車砲の開発要求を提示した。この新型対戦車砲は1940年に制式化されPak40と名付けられたが、実際に使用が始まったのは1941年の末からである。Pak38をそのまま75mmに拡大したようなスタイルだが、防盾は生産性の向上を図り単純なものに替わった。性能はこのクラスの対戦車砲としては文句なしにトップで、戦車砲などにも転用された傑作である。

88mm Pak43

## 88mm対戦車砲

Js-IIを一撃で屠る最優秀対戦車砲

口径	88mm	L/71
砲身長	6.6m	
重量	4.38t	
初速	1130m/秒	
最大射程	15,000m	

第二次大戦後半に実用化された対戦車砲で、連合軍のいかなる戦車に対しても致命傷を与えることができた。開発当初は低姿勢で射撃ができる十字型の脚を搭載する予定であったが生産が間に合わないため、暫定的に150mm重榴弾砲の脚回りと車輪を流用して、砲身をより簡単な構造とし防盾も新たなものを開発してPak43/41の名称で製作、1943年から戦線に投入した。その後十字砲架型も生産に入り最優秀戦車砲として各地で大活躍している。

88mm Flak36

## 88mm36式高射砲

第二次大戦の全期間を通じて活躍した高射砲

口径	88mm	L/56
砲身長	4.69m	
重量	5.15t	
初速	840m/秒	
最大射程	10,600m	

第一次大戦の終了間近に制式化された88mm Flak18の近代化バージョンとして1936年に制式化されたのがこのFlak36で、基本的には同一の仕様であるが、砲身が3分割となったのが変更点だ。十字砲架に載せられて前後に取り外し式の車輪を設けて牽引することができ、車輪を外せば簡単に設置することができる。フランス侵攻の際に強固な装甲をもつ英、仏軍の戦車攻撃に用いられて多大な戦果を収め、以後対戦車砲としても使われるようになった。

88mm Flak41

## 88mm41式高射砲

傑作88mm高射砲の最終形態

口径	88mm	L/74
砲身長	6.55m	
重量	11.24t	
初速	1000m/秒	
最大射程	14,700m	

1937年より現用のFlak36の能力向上を図った発展型として37兵器の名称で開発に着手した高射砲であり、1941年に開発は終了し制式化されたものの、多くの技術的問題が多発し実戦部隊に引き渡されたのは1943年の初めになってしまった。Flak36が砲座の上に載せられた比較的高い姿勢をとっていたのに対し、このFlak41は揺架から新設計され、俯仰の支点を極端なまでに後方にすることで低姿勢を実現しており、防盾も背の低いものになった。



105mmleFH18

## 105mm軽榴弾砲

軽支援火砲の傑作

口径	105mm L/28
砲身長	2.94m
重量	3.49t
初速	470m/秒
最大射程	10.675m

再軍備前の1928年から29年にかけて基礎研究が秘密裏に行われ、1933年に試作砲が完成した軽榴弾砲で、1935年以降国防軍の標準野砲として発注が続き、敗戦まで第一線において活躍した。1940年にはこの砲の射程を延長するために分割式となっている装薬を強化し、反動機構をこれに合わせて強力なものに変えている。また反動をさらに少なくするため砲口には新たにマズルブレーキが装着されたのが特徴となっている。

150mmsFH18

## 150mm重野砲

支援火砲の決定版

口径	150mm L/29.5
砲身長	4.44m
重量	6.9t
初速	520m/秒
最大射程	13.925m

1926年から30年までの長い期間をかけて基礎研究から基本設計を行った重野砲で、1933年に国防軍の標準重野砲として選択され、同年末から生産が開始された。部隊への配備は1934年初めから始まり、以後敗戦まで各戦線で使用が続けられている。イタリア軍にも供給され、149/28野砲の名称で用いられた。1942年にはマズルブレーキを砲口に装着して、砲身の内張りを張り替え命数の延長を図った改良型sFH18Mと呼ばれる改良型が登場した。

# ドイツ軍の歩兵部隊

世界最精鋭を誇った歩兵部隊の末路

いかに兵器が発達しても、戦争の最後の局面は小銃を持った歩兵同士の撃ち合いになる。弾薬が尽きれば白兵戦だ。歩兵は軍隊の根幹部隊であることは今も昔もかわらない。

ドイツ軍は他国同様に多くの歩兵部隊を有していたが、その所属により数多い名称もっていた。まず歩兵だが、これは他国と同じもの。ドイツ軍歩兵部隊の特徴は、最小の組織である各分隊（9名）に軽機関銃が配備されたこと、指揮官である下士官の戦術指揮能力が他国の士官並みに高かったことである。他国の歩兵部隊よりも火力も指揮能力も充実し、精鋭の名にふさわしいものであった。

この歩兵と呼称が異なるものとして擲弾兵と呼ばれるものがある。この実態は通常の歩兵と変わらないものだが、ドイツの英雄として名高いフリードリッヒ大王が士気高揚のために歩兵を擲弾兵と呼んだことに範を得て、

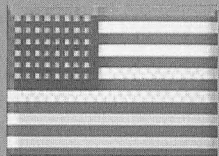
1943年からこう称されるようになった。

同じ擲弾兵でも装甲部隊に組み込まれたものは装甲擲弾兵と名を変えるのがいかにもドイツ的である。これも以前は自動車化歩兵と呼ばれていた。ドイツ軍は全歩兵を機械化つまり自動車化する計画であったが、車輛の不足、つまり生産力の不足から、大戦中に果たせなかった。自動小銃もいきわたらず、最後まで第一次大戦と同じポルトアクションのKar 98を使用していた。この点、自動車化とMI自動小銃をいきわたらせた米軍との、生産力の違いだろうか。

降下猟兵と呼ばれるものは空挺部隊のこと。

大戦末期に登場する国民擲弾兵は子供や老人など銃後の人間を臨時徴兵して編成した応急のもの。火器も不足し戦闘能力は低かった。大戦当初は、精鋭をうたわれたドイツ軍も、かつての面影は失せていたのである。

# アメリカ合衆国



連合国の勝利の原動力となったアメリカ合衆国。国力を背景とした生産力は脅威であったが、開戦までは弱兵と思われていた。

海軍は軍縮条約の影響で、日本海軍との艦艇数の比はおおむね5対3と優位で性能も世界水準に達していたが、太平洋・大西洋の2方面に展開しなければならず、また攻撃力の高い主力艦艇、優秀な魚雷や高性能の艦上機、高い練度など、日本海軍の実力は侮りがたく脅威であった。

海軍は1940年の二大洋海軍議案の通過で大量建造が認められ、真珠湾攻撃で太平洋艦隊に大打撃を受けると全面緊急戦争増強計画が代わり、1943年後半以降、大型高速のエセックス級空母15隻、小型のインディペンデンス級空母9隻をはじめ、新鋭艦が続々と就役した。ほぼ同時期にはF6F、F4U等、航空隊にも2,000馬力級の新鋭機が配備され、質量ともに日本軍を圧倒した。

特筆すべきは潜水艦隊の活躍で、当初は魚雷の質の低さから戦果が挙げられなかったものの、1943年以降の日本輸送船団への攻撃は、本土に対する戦略爆撃以前に日本から継戦能力を奪っていたのである。米海軍は単に量だけでなく、レーダー警戒網、射撃管制装置、ダメージコントロール、哨戒機や潜水艦による人命救助の徹底など、ソフト面からも、日本海軍を圧倒したといえる。

陸軍は、大戦が勃発した1939年は小規模で、予算は航空兵力や海軍の増強に当てたため、近代装備もほとんどなかった。が、武器貸与法などにより、開戦以前から軍需物資の生産は増大化しており、1940年の選択徴兵制の導入により、兵員は逐次拡大していった。緒戦は組織的にも技術的にも、不手際が続いた。が、経験がフィードバックされ近代戦をマスターすると、手強い部隊となった。戦車部隊は独身のそれに比べ、火力・防衛装甲ともに見劣りするが、航空優勢と重砲の圧倒的な支援火力により問題にはならなかった。

航空隊は陸軍の指揮下にあったものの、かなり自主性による運用がなされたおり、戦後に空軍として独立した軍組織となった。当初、B-17をはじめとする爆撃機はともかく、P-38、P-40などの戦闘機群は日独いずれを相手にしても不利であったが、中盤以降、P-38、P-47、P-51などの新鋭機戦闘機の登場により、世界中のあらゆる戦域において航空優勢を保ち、B-29による戦略爆撃の確立など、終戦時には世界最強の空軍国への成長をみせた。

海兵隊は、敵前上陸・島嶼の攻略を基本任務とし、太平洋戦域ではガダルカナル戦以降、日本軍守備隊と激戦を展開した。

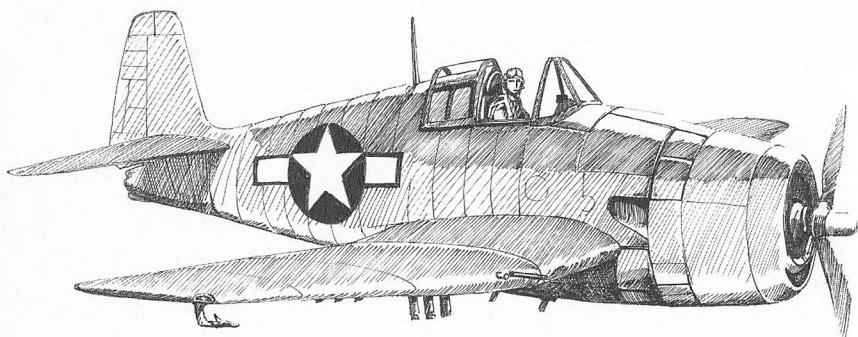
1940年にもとも20万人程度だった陸海軍は終戦時には、海軍400万人、陸軍1,000万人の大所帯になり、かつこの大部隊を有機的に運用した軍司令部の能力は賞賛に値する。

Grumman F6F Hellcat

# グラマンF6Fヘルキャット

アメリカ海軍を代表する艦上戦闘機

全長	10.31m
全幅	13.05m
出力	2,000hp
全備重量	5,914kg
最大速度	612km/h
武装	12.7mm機銃×6 爆弾900kg



グラマン社の戦闘機として初めて単葉を採用したF4Fの発展型として計画がスタートしたF6Fであったが、海軍はより高性能が売り物のポート社の新戦闘機計画（後にF4Uコルセアとして制式化）に期待をかけていた。グラマン社に対して本機の製作契約を結んだのは、万一F4Uが失敗したときの保険的意味合いが強く、あまり期待はかけられていなかったのである。しかし現実にはF4Uが配備されると、従来の戦闘機と比べて着艦速度が速くコクピットからの前方視界が悪いため空母での運用に向かないことが判明した。後に改良を加えられてようやく空母からの作戦が可能になったが、これは1944年からのことで、もしF6Fがなかったら米海軍の作戦は大いに支障を来したことは間違いない。

F4Fのエンジンを2,000馬力級にして機体を大型化したようなF6Fは、F4Uと比べて同じエンジンを採用しながら空力的洗練は図られていなかったため最大速度で70km/h近く差がつけられてしまったが、反面生存性は高く太平洋戦線で撃墜されたF6Fがわずか

270機しかなかったことがその事実を無言で物語っている。

F6Fは1943年1月に部隊配備を始め、8月31日から実戦に参加した。すでにF4Fに対しても絶対的優位を保てなかった日本海軍の零戦にとって、さらに強力なF6Fの登場はまさに致命的で、以後優位に立つことなく敗戦を迎えた。よくF6Fを評して2,000馬力級エンジン搭載機としては性能が低いとか、日本戦闘機に比べ洗練されてないといわれるが、日本機を相手にするにはこの程度で十分だったわけだ。もしF6Fが凡作としても、そんな機体にも手も足も出なかった日本の戦闘機のほうが恥じて然るべきであろう。戦争末期に対戦闘機戦が減ると、戦闘爆撃機として空母搭載機数の半数以上を占め、日本本土攻撃にも活躍した。F6Fは最初の生産型F6F-3が4,403機が生産され、一部に改良を加えたF6F-5が7,870機生産された。主要な生産型はこの2種のみであるが、いずれの型にもレーダーを搭載した夜間戦闘機型と写真機を装備する写真偵察型が製作されている。

Grumman F4F Wildcat

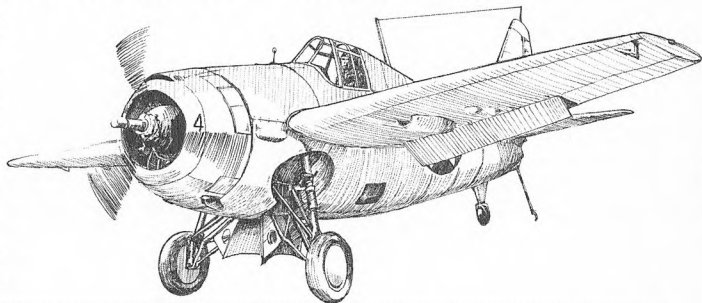
# グラマンF4Fワイルドキャット

## 太平洋戦争初期の主力戦闘機

1935年から開発が始められた機体で、開発当初は複葉を採用していたが、開発中に単葉に改められ、度重なる試作をへてようやく1939年に制式採用となった。太平洋戦争では日本海軍の真珠湾攻撃の頃から参戦しており、後継機となったF6Fの登場まで零戦と死闘を繰り広げ、F6F登場以後も護衛空母に搭載されて戦闘機としての使用が続けられた。さらに対潜任務や対地支援にも用いられて各型合わせて7,314機が生産された。

全長	8.87m
全幅	11.58m
出力	1,200hp
全備重量	3,359kg
最大速度	515km/h
武装	12.7mm機銃×6 爆弾90kg

その見るからに鈍重そうなスタイルから、零戦の敵ではないように見られがちなF4Fだが、性能自体はやや劣るもののサッチ・ウィーブと呼ばれる2機1組となって空戦機動を行う空戦法を取り入れてからは、零戦と互角以上に戦った。



アメリカ合衆国

Brewster F2A Buffalo

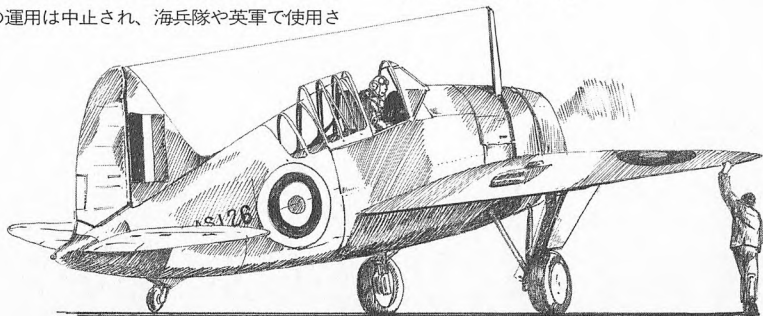
# ブリュースターF2Aブファロー

## アメリカ海軍初の単葉戦闘機

1936年から開発が始められた艦上戦闘機で、初めて単葉を採用するとともに引き込み脚が用いられ、ライバルとして開発されたグラマン社のXF4Fより性能が優れていたため、1938年から生産が始められ500機ほどが生産された。が、F4Fの生産が始まると、空母での運用は中止され、海兵隊や英軍で使用さ

全長	7.92m
全幅	10.67m
出力	1,200hp
全備重量	2,695kg
最大速度	520km/h
武装	12.7mm機銃×4 爆弾90kg

れた。太平洋戦争が勃発すると本機では性能が日本海軍の零戦よりはるかに劣り一方的に損害を受け、1942年で退役してしまった。太平洋ではまったく奮わなかったブファローだが、フィンランドに送られた機体はソ連相手に大活躍している。





Vought F4U Corsair

# ボートF4Uコルセア

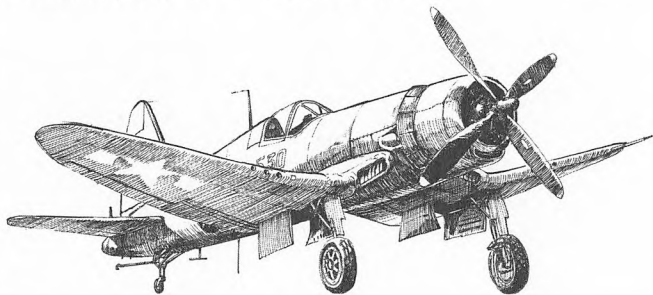
逆ガル翼を採用した傑作機

全長	9.8m
全幅	12.4m
出力	2,000hp
全備重量	5,750kg
最大速度	635km/h
武装	12.7mm機銃×6 爆弾900kg

開発に着手したばかりの2,000馬力級エンジンを装備する艦上戦闘機として1938年から開発が始められたもので、エンジンの出力を最大限に生かすため4mという大直径のプロペラを採用し、艦上機は主脚が長いと不利なため逆ガル翼という艦載機では特異な型式が用いられた。

試作機はアメリカの戦闘機として初めて650km/hの壁を破る高性能を発揮し直ちに生産が開始された。しかし実際に空母での試験を行って

みると、着艦速度が速すぎ、さらに視界も十分ではないことが判明したため、改良を図るとともに当初は陸上戦闘機として使用することになった。1944年からようやく空母で運用が開始され、戦後も長く使用が続き、12,571機が生産された。



Grumman F8F Bearcat

# グラマン F8Fベアキャット

太平洋戦争に間に合わなかった傑作機

全長	8.61m
全幅	10.82m
出力	2,300hp
全備重量	4,730kg
最大速度	720km/h
武装	20mm機銃×4 爆弾900kg

アメリカ海軍最後のレスプロ戦闘機で、F6Fヘルキャットの後継機として1943年初めから開発が始まった。太平洋戦争の初期に零戦に苦汁を飲まされたため、捕獲した零戦を徹底的に研究して開発され、その結果アメリカ戦闘機としては異例なほど小型軽量で、速度、機動性ともに日本機を大きく凌ぎ、まさに当時のスーパー・ファイターであった。1,230機が生産されたが、タッチの差で対日戦終了までに実戦に参加することはできなかった。

Grumman F9F Panther

# グラマン F9Fパンサー

初期のジェット戦闘機の傑作

全長	11.85m
全幅	11.58m
推力	3,180kg
全備重量	8,060kg
最大速度	972km/h
武装	20mm機関砲×4

大戦半ばからジェット戦闘機の研究を行ってきたグラマン社が、様々な基礎研究を下敷きに戦後間もない1946年試作機の製作に取りかかった。この機体は双発の複座機であったが夏にはキャンセルされ、新たに単発の単座機として再度契約が行われた。比較的平凡な機体が多かった初期の海軍ジェット戦闘機の中で本機は一際目立った存在で、頑丈な機体構造を生かし朝鮮戦争では戦闘爆撃機として大活躍しMiG-15の撃墜も記録している。

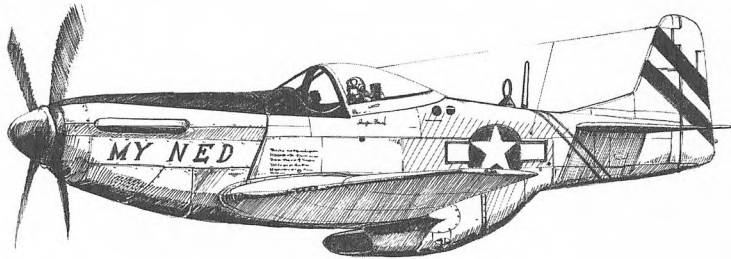


North American P-51 Mustang

# ノースアメリカンP-51マスタング

第二次大戦最高の傑作戦闘機

全長	9.83m
全幅	11.28m
出力	1,450hp
全備重量	4,585kg
最大速度	703km/h
武装	12.7mm機銃×6 爆弾900kg



戦闘機不足に対してP-40の生産を要求されたノースアメリカン社は、120日以内でP-40よりはるかに高性能な戦闘機を開発してみせるという大見栄を切り、実際にその約束の期間内に新しい戦闘機の開発に成功した。

この機体がP-51で、当初は国産のアリソン・エンジンを搭載していたが高空性能が悪く能力的にP-40よりましといった程度の機体であった。しかし本機の資質を見抜いたノースアメリカン社と陸軍航空隊は、エンジンをイギリスのスピットファイアに装備されて好評を博しているロールスロイス製マーリン・エンジンに換装することを決定。これにより登場したのがP-51Bである。

P-51の成功はこのB型からで、初期のA型と比べすべての点で性能は凄まじく、ドイツ本土爆撃に有効な護衛戦闘機を持たず腐心していた爆撃隊を救うべくイギリスに派遣されていた援護任務に就いた。本機の登場は爆撃機の乗員にとってまさに救世主であり、リトルフレンド、小さな友人というニックネームがつけられたほどであった。また、ドイツ空軍大

臣ヘルマン・ゲーリング元帥は、ベルリン上空に姿を見せた本機を見て、これで戦争は負けたと思ったと伝えられている。

このように高い評価を受けたP-51Bであるが問題がなかった訳ではない。それはA型より受け継いだ高速性追求のためのファスト・バック式のキャノピーからくる視界の悪さと、12.7mm機銃4挺という武装の貧弱さであった。このため一部の機体ではイギリス空軍が開発したマルコム・フードと呼ばれるバブル型のキャノピーに換装したものもある。が、それでも根本的な解決にはならず、胴体を改設計して水滴型キャノピーを採用し、機銃を6挺に増やした型式が登場した。これがP-51Dで、このD型の登場によりマスタングは真の意味での傑作となった。優れた航続距離を活かし、ドイツ本土爆撃や日本本土爆撃の掩護として大きな役割を果たしたのである。しかし胴体の下面に大きな冷却器を設けたため、この部分に被弾すると飛行が不可能になってしまうという弱点もあった。

Curtiss P-40 Warhawk

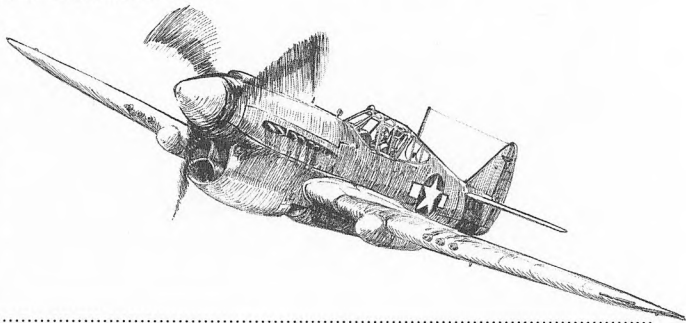
# カーチスP-40ウォーホーク

平凡だが実用性の高かった戦闘機

期待以上の成功を収めたP-36に、空冷エンジンに替えて液冷エンジンを装備することで抵抗の減少を図り、速度・上昇力を向上させることを目的に開発されたP-40は、速度性能はともかく機動性などが劣った平凡な機体であった。1939年より配備が始まり、フィリピン、ハワイ、マレーなどで日本軍の零戦や隼相手に戦ったが、急降下性能を活かす以外は劣性であった。しかし十分とは言えない能力でも、生産性の高

全長	10.16m
全幅	11.38m
出力	1,200hp
全備重量	4,014kg
最大速度	552km/h
武装	12.7mm機銃×6 爆弾450kg

さで性能の低さを補い、主に太平洋方面で多用され戦闘爆撃機としても活躍した。総生産数は13,738機で、英軍では主に北アフリカやシシリー方面で、ソ連他諸国でレンドリース法により5,492機が使用されている。



Bell P-59 Airacomet

# ベルP-59 エアロコメット

アメリカ初のジェット戦闘機

全長	11.62m
全幅	13.87m
出力	907kg×2
全備重量	6,214kg
最大速度	658km/h
武装	37mm機銃砲×1 12.7mm機銃×3

アメリカ初のジェット戦闘機として開発されたのがこのP-59で、イギリスで開発されたエンジンをベースに国産されたジェネラルエレクトリック製エンジン2基を搭載し、試作機は1942年10月に初飛行に成功した。ジェットエンジンの採用で速度は600km/hを越えたが信頼性は低く燃料消費量がレシプロエンジンを大きく上回るため実用化は難しく、生産型のA型が20機、改良型のB型が30機生産されたが実戦に参加することなく終わった。

Northrop XP-79

# ノースロップ XP-79

アメリカ初の無尾翼ジェット戦闘機

全長	4.20m
全幅	11.40m
推力	520kg×2
全備重量	3,870kg
最大速度	1,015km/h
武装	12.7mm機銃×4

ノースロップ航空機の長であるジャック・ノースロップが長年暖めて来た無尾翼戦闘機の具現化で1943年1月に開発契約が結ばれた。プラス、マイナスそれぞれ12Gの機動を可能とするためパイロットは機体前端に腹ばいになって収まるという特異な方式を採用していた。ロケットエンジンを採用したXP-79Aに続き、ジェットエンジンを装備した発展型B型が製作され、1945年9月に初飛行に成功したが12月に事故で失われ計画も終了した。

Lockheed P-38 Lightning

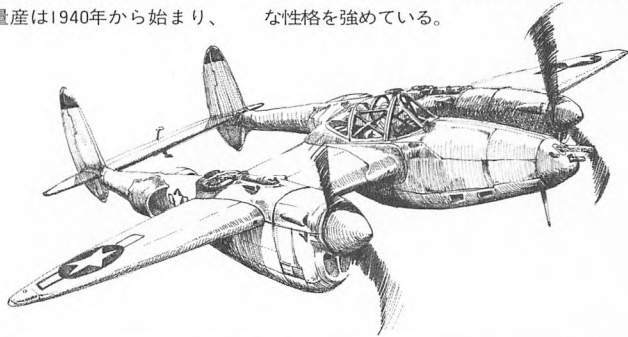
# ロッキードP-38ライトニング

速度記録を樹立した本格的な双発戦闘機

全長	11.53m
全幅	15.85m
出力	1,425hp×2
全備重量	9,806kg
最大速度	666km/h
武装	20mm機銃砲×1 12.7mm機銃×4 爆弾1,450kg

重武装を施した長距離迎撃機として1937年に開発が始まった双発戦闘機で、ターボ過給器や三車輪式降着装置の採用、動翼まで全金属製とするなど当時の常識を破る機体であり、1939年には大陸横断速度記録を樹立したほどであった。量産は1940年から始まり、P-38、D、E、F、G、H各型を経て1943年にはエンジンを強化したJ型が登場した。このエンジンの換装に伴いナセル下面が大きく膨らみ、以前の型との識

別点となっている。また急降下速度の増大を避けるためのエアブレイキが採用されたのもJ型からであった。続くL型では更にエンジンの強化が図られ、主翼下面にロケット弾各5発ずつが搭載可能になるなど戦闘爆撃機的な性格を強めている。



アメリカ合衆国

Republic P-47 Thunderbolt

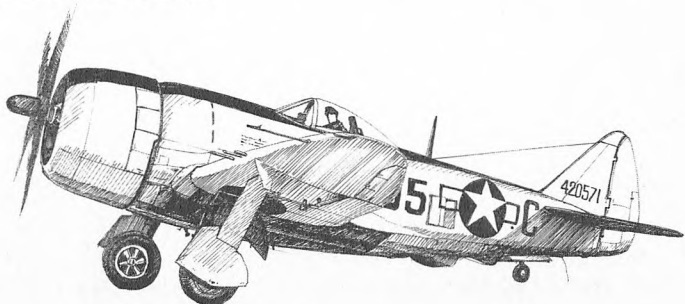
# リパブリックP-47サンダーボルト

ターボ過給器を採用した重量級単発戦闘機

全長	10.99m
全幅	12.42m
出力	2,200hp
全備重量	7,900kg
最大速度	685km/h
武装	12.7mm機銃×8 爆弾900kg

比較的大柄な機体が多いアメリカの戦闘機の中でも、単発単座の戦闘機としては最大級に属するP-47は、液冷エンジンを主に採用している陸軍戦闘機の中で、第二次大戦で陸軍が制式化した単座機としては唯一の空冷エンジン装備機である。当初より高高度戦闘機として開発が始められ、当時開発中であった2,000馬力級エンジンと、ターボ過給器を採用したために必然的に機体は大型化し重量もそれまでの戦闘機を

上回ったが、ターボ過給器の採用による高高度性能は断然他の機体を圧していた。当初長距離迎撃に用いられたが、P-51が登場した後には対地支援に多用され、大きな搭載量を生かして多大な戦果を記録した。



Douglas SBD Dauntless

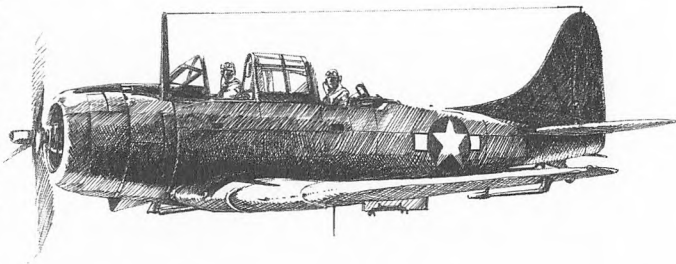
# ダグラスSBDドントレス

日本機動部隊壊滅の原動力となった艦爆

全長	10.07m
全幅	12.67m
出力	1,200hp
全備重量	4,925kg
最大速度	394km/h
武装	12.7mm×2 7.62mm×2 爆弾730kg

ノースロップ社が開発したBT-1の発展型として製作された機体。1939年採用の日本の九九艦爆のライバル機で、防御力や武装、爆弾搭載量で同機を凌ぎ、引き込み脚を採用するなど当時の急降下爆撃機のなかでも一際目立った存在であった。ミッドウェー海戦で日本海軍の空母4隻を撃沈するという大金星をあげたことでも知られ、ガダルカナル攻防戦でも多くの日本の輸送艦を沈めている。

本来ならば後



継であるカーチスSB2Cヘルダイバーの実戦化に伴って退役する予定であったが、開発の遅れから1944年になっても使用が続けられ、海兵隊では主力爆撃機として多用された。生産機数は5,936機。

Curtiss SB2C Helldiver

# カーチスSB2Cヘルダイバー

カーチス社最後の軍機

全長	11.18m
全幅	15.17m
出力	1,900hp
全備重量	7,537kg
最大速度	475km/h
武装	20mm機関砲×2 7.62mm機銃×2 爆弾730kg

当時の艦上爆撃機としては異例とも言える大馬力エンジンを採用し、機内に爆弾倉を設けたのに加えエレベーターに搭載するため極端に全長を縮めた独特のスタイルを採った急降下爆撃機。しかしこの特異なスタイルが災いして空力的な不安定を生み、このため改修に続く改修が行われ、本格的に実戦に投入されたのは1943年の末からであった。最後まで安定性の悪さは払拭できなかったが、多くの日本海軍の艦船を撃沈する功績を残した。

Douglas TBD Devastator

# ダグラスTBDデバステーター

出現当時出色の高性能機

全長	16.66m
全幅	15.23m
出力	900hp
全備重量	4,620kg
最大速度	331km/h
武装	7.62mm機銃×2 900kg魚雷

1934年、近い将来の新型空母の就役に伴って搭載機の新型化が図られ、この計画に沿って開発された艦上雷撃機がこのダグラスTBDだ。アメリカ海軍の艦上機として初めて単葉を採用した機体でもある。出現当時は世界の水準を越える高性能機だったが太平洋戦争の勃発時にはすでに旧式化が目立っており、ミッドウェー海戦に参加した機体の大半が撃墜されたことをきっかけに新鋭TBFアベンジャーにその座を譲り実戦部隊から退役した。

Grumman TBF Avenger

## グラマンTBFアベンジャー

アメリカ海軍の主力艦上攻撃機

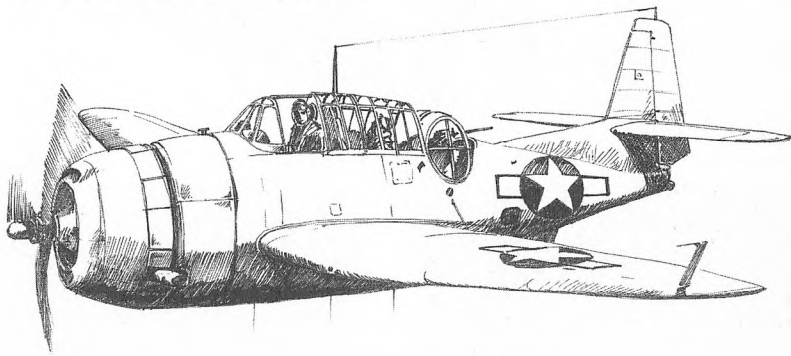
全長	12.20m
全幅	16.51m
出力	1,700hp
全備重量	7,876kg
最大速度	436km/h
武装	12.7mm機銃×3 7.62mm機銃×1 900kg魚雷

1939年10月、アメリカ海軍は旧式化が目立つダグラスTBDの後継機となる新型攻撃機の開発をグラマン社に要求した。海軍の要求は、爆弾倉を設けて魚雷を機内に収容し旋回式の動力銃塔を備えるというもので、このため必然的に機体は大型化し、主翼は中翼配置となり空力的には同社が開発したF4Fによく似た機体となった。

確かに大柄な機体ではあるが、1,700hpという当時の攻撃機としては大馬力のエンジンを採用したため、最大速度はTBDを100km/h

以上上回り、大柄なサイズも主翼を後方に折り畳む同社独特の方式を採用したため、空母への搭載も問題なく行えた。ライバルの日本の天山艦攻よりもカタログデータでは劣ったものの、構造が単純で量産に向き、頑丈で信頼性が高い機体であり、同機を圧倒した。

ミッドウェー海戦が初陣で、以後日本の敗戦まで主力攻撃機として活躍、戦艦「大和」「武蔵」の撃沈の戦果は主に同機によるもの。9,836機が生産された。



Douglas AD-1 Skyraider

## ダグラスAD-1スカイレイダー

大戦末期に試作され戦後に活躍した万能機

全長	11.63m
全幅	15.24m
出力	2,400hp
全備重量	18,030kg
最大速度	589km/h
武装	20mm機銃砲×4 爆弾2720kg

太平洋戦争の半ばに要求された雷撃機と急降下爆撃機の任務を1機で行うことができる単座攻撃機計画によりダグラス社が開発した機体で、当初XBTD-1と呼ばれていた。

その後より簡易化を図った発展型XBT 2Dに計画は移行し、1945年3月に試作機が初飛行に成功した。その後名称がAD-1に改め

られ十二分な性能を發揮したものの、日本の敗戦により太平洋戦争には参戦できなかった。ライバルと目される日本の流星改も雷撃・急降下爆撃が可能な機体だったが、拡張性等を考えると、AD-1の方が優れていたと思われる。朝鮮、ヴェトナム戦争まで使用され、30年以上も使用された傑作機である。

アメリカ合衆国



North American B-25 Mitchell

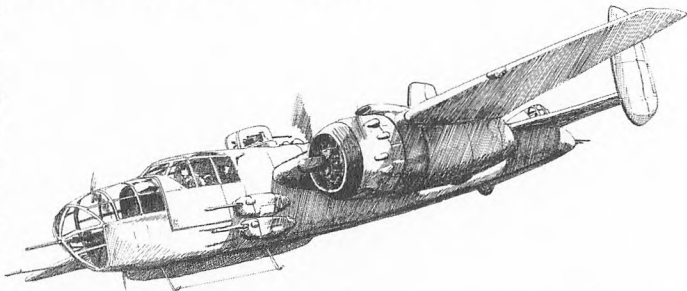
# ノースアメリカンB-25ミッチェル

アメリカ双発爆撃機の代表機

A-20、B-26と並んで第二次大戦に参戦したアメリカの双発爆撃機がこのB-25であるが、他の2機種がいずれも1万機に満たない生産数だったのに対し、B-25は11,000機近くが生産されまさにアメリカを代表する双発爆撃機ということができる。1938年から開発は始まり、試作機は1940年8月に初飛行を行った。以後生産が急ピッチで行われることになるが、性能的にはさほどのものではなく同時期に選定されたB-

全長	15.82m
全幅	20.60m
出力	1,700hp×2
全備重量	15,880kg
最大速度	438km/h
武装	12.7mm×12 爆弾1,360kg

26のほうが性能は優れていたが、価格の安さと取り扱いの容易さが大量生産につながった。本機のハイライトは空母ホーネットより発艦して初めて日本本土に初爆撃を行ったことで、ヨーロッパ戦線でも華々しい活躍振りを記録している。



Douglas A-20 Havoc

# ダグラス A-20ハボック

平凡だがキラリと光る隠れた傑作機

全長	14.63m
全幅	18.69m
出力	1,600hp×2
全備重量	10,964kg
最大速度	510km/h
武装	12.7mm×9 爆弾1,810kg

Aの接頭記号から本機が攻撃機として採用されたことがわかるが、実際には爆撃機とほとんど変わらないミッションに使用された。全長15m近い双発機だが、コックピットにはパイロット1名しか搭乗せず抵抗減少のために胴体が絞られていることがわかる。後期型では後部胴体の上面に旋回式動力銃塔が設けられ後方に対する防御としたが、他の双発爆撃機より防御火力は劣る。が、速度が高く生存性も勝っており、約7,500機が生産された。

Martin A-30 Baltimore

# マーチン A-30バルチモア

イギリス向けに生産された双発爆撃機

全長	14.8m
全幅	18.7m
出力	1,700hp×2
全備重量	10,270kg
最大速度	515km/h
武装	7.7mm機銃×11 爆弾900kg

イギリス向けとしてマーチン社が生産したモデル136メリーランドの性能向上型として開発された機体で、米陸軍は本機にA-30の呼称を与えたが自軍では採用せずすべてイギリス空軍向けとして生産し、バルチモア各型合わせて1,575機が生産された。生産中に後部胴体の旋回機銃を動力銃塔に改めたり、最終型ではエンジンを強化したりと改良が図られた。外見こそ目立たないが、当初爆撃機不足に悩んだイギリス空軍では重用された。

Boeing B-17 Flying Fortress

# ボーイングB-17フライングフォートレス

アメリカ初の量産型4発爆撃機

全長	22.70m
全幅	31.62m
出力	1,200hp×4
全備重量	29,484kg
最大速度	472km/h
武装	12.7mm機銃×13 爆弾5,450kg

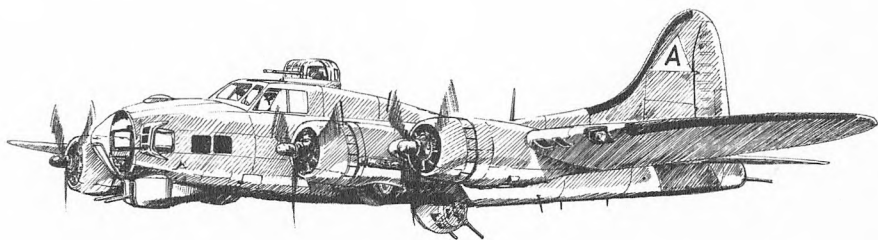
当初は周囲が海に守られ直接的な脅威とし  
ては中南米方面を考えていたアメリカでは、  
大型爆撃機の必要性を感じていなかったが、  
1933年から8,000kmの航続距離をもち320km/  
hで飛行できる大型爆撃機を、プロジェクト  
Aの名で開発に着手した。

さらにこのプロジェクトAとは別に現用の  
B-10に替わる新中型爆撃機の要求も1934年  
8月に出し、ボーイング社はこの両新爆撃機  
計画に対して応募したが、サイズこそ違うも  
のどちらもよく似た4発機案で、陸軍はボ  
ーイング社の提案を採用し試作機の製作契約  
が結ばれた。しかしB-10後継機のほうは1  
年後に試作機が完成することという要求が付  
けられていたため、全社を挙げてこのB-10  
後継機計画に取り組み、1935年7月に試作  
機モデル299が初飛行を行った。当時はまだ  
このような大型爆撃機が本当に必要となると  
はほとんど思われていなかったため、試作機  
を事故で失ったことをきっかけにダグラス社  
の機体を制式採用することになる。しかし、  
将来性を考慮してボーイング社のモデル299

をYB-17として増加試作機の発注を行った。  
これようやくB-17が登場することになる。

増加試作機が続けられている最中にヨーロッ  
パや極東の情勢が不穏になり、このため生産  
型であるB型が発注され、以後C、D、E型と  
生産が続き、枢軸国との戦争が勃発と時期が  
重なったF型から大量生産が行われることにな  
った。このF型はヨーロッパ、南太平洋で  
爆撃部隊の切り札として多用され、続くG型  
では武装を強化するなどの改良が盛り込まれ  
ている。

結局B-17は各型合わせて12,730機が生産  
され、戦略爆撃というジャンルを確立した。  
日本機との戦いではB-17は圧倒的な火力と、  
十分な防弾装備により日本軍をして本機を撃  
墜するのは非常に困難と嘆かせたが、緒戦を  
のぞき、主にヨーロッパ戦線で使用された。  
ドイツ爆撃では護衛戦闘機がつくまでは、高  
高度性能に優れるBf109や中高度では圧倒的  
なFw190などにより、手痛い損害を受けてい  
る。B-24と比較すると、航続距離では劣る  
が、防弾性・頑丈さでは上回っていた。



Boeing B-29 Super Fortress

# ボーイングB-29スーパーフォートレス

日本を壊滅させた超重爆撃機

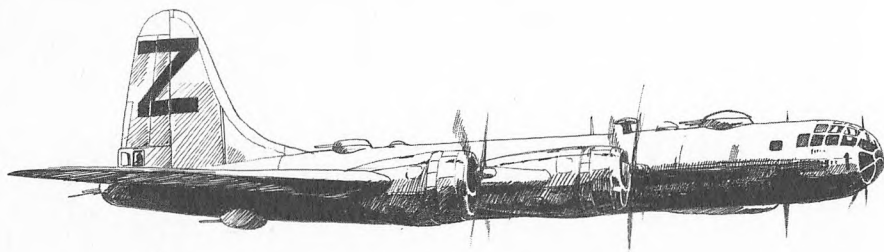
全長	30.18m
全幅	43.05m
出力	2,200hp×4
全備重量	54,480kg
最大速度	576km/h
武装	20mm機関砲×1 12.7mm機銃×10 爆弾9,070kg

日本を焦土にした戦略爆撃機。

B-17、B-24といった大型の4発重爆撃機を開発したノウハウを生かし、アメリカ陸軍は1939年11月に超長距離爆撃機の計画名称で開発要求を出すに至った。この要求は、8,500km以上の航続距離をもち、高高度で作戦可能なように与圧キャビンを備えるというもので、当時ドイツにより引き起こされた第二次世界大戦がその背景にあったのは言うまでもない。もちろんB-17の1.5倍程度の航続距離では米本土からの攻撃は不可能で、イ

ッパでの戦訓などを加味しセルフシーリング式の燃料タンクを装備したり、武装の強化などを盛り込んだ結果、試作初号機の初飛行は1942年9月と遅れてしまう。が、B-17などに比べ技術的に大変高度な機体をわずか2年で完成にこぎつけたのは特筆に値する。

生産機の引き渡しは1943年9月から始められたが、すでにヨーロッパ方面では本機の必要性が薄くなってしまっていたので、1944年3月よりインドと中国に展開を開始し、同年6月から日本本土に対する空襲を開始した。



ギリス、もしくは北アフリカからの作戦が前提となっていた。この要求に応じた各社の案の中からボーイング社と、ロッキード社の案が選定され、1940年8月にボーイング社に対しXB-29の名で試作機が発注された。結局ロッキード社はこの計画を辞退し、代わりにコンソリデーテッド社の案がXB-32として発注されたが、これはB-29が失敗した場合の保険にしか過ぎなかった。

これにより早速ボーイング社では本格的な開発と試作作業に取りかかったが、ヨーロ

以後継続的に日本への爆撃を行い、10月からは日本軍より奪取したサイパン島から作戦を実施した。1万mの高々度で進入し、防御火力・防弾装備とも完璧なB-29をまともに迎撃できる機体は日本にはなかった。

1945年に入ると、それまでの高高度からの工場施設などへの精密爆撃を止め、焼夷弾を用いた大都市への無差別爆撃に切り替え多くの人命を奪い、さらに広島、長崎への原爆を投下した。総生産機数は3,970機で、朝鮮戦争まで使われた。

やっぱり

# 勝ちたくて…

## 索敵用ユニットは使い捨てで!

「ワールドアドバンス大戦略」の醍醐味は、やはり索敵モードでプレイすることだ。が、この索敵モードで索敵中に敵ダメージを受ける。奇襲効果という考え方に基いた設定で、はなはだ不利である。

対策としては、序盤で会敵しそうな場合は、まず敵から自軍の勢力圏内に進入させること。ある程度、敵に攻撃させて損耗させてから、反撃開始が「大戦略」のセオリーだ。

ただし、シナリオによってはこんな悠長なことを言っていられない。大勝利を狙うとき、たいせい制限ターン数があるので、強行突破が要求され、そのためには強行索敵が必要となる。索敵ユニットは消耗品と



早い安い弱く装甲車はまさに索敵のために用意されているのだ。

割り切るのが基本である。航空ユニットで防御力の高いものがベストだが、航空ユニットは概して高価である。陸上なら、軽装甲車が無難な選択だろう。また、これ以上、進化・改良せず、使い捨てようと思っているユニットも可能であろう。

アメリカ合衆国

Consolidated B-24 Liberator

## コンソリデーテッド B-24リベレイター

アメリカ軍用機中最大生産数を誇った爆撃機

全長	20.47m
全幅	33.53m
出力	1,200hp×4
全備重量	25,400kg
最大速度	475km/h
武装	12.7mm機銃×10 爆弾5,800kg

ヨーロッパや極東で暗雲が立ち込めてきたため、制式化されたばかりのB-17を生産せよと要求されたコンソリデーテッド社では新規に4発重爆撃機を開発することを提案し、この結果誕生したのが本機である。スマートなB-17に比べて鈍重そうに見えるので損をしているが、実際は航続距離や速度ともに勝っており、島伝いに戦闘を続ける太平洋戦線で多用され18,431機という同一機としてアメリカ機中最大の生産機数を記録した。

Consolidated B-36

## コンソリデーテッド B-36

テン・テン・ボマーと呼ばれた超重爆撃機

全長	49.40m
全幅	70.14m
出力	3,500hp×6
全備重量	148,910kg
最大速度	613km/h
武装	20mm機銃砲×16 爆弾37,970kg

アメリカ本土から直接ドイツ本土への爆撃が可能な爆撃機計画により誕生した機体で、爆弾1万ポンドを搭載し1万マイルの航続距離が要求されたため、テン・テン・ボマーと呼ばれる。推進式の6発エンジン、引込式遠隔操作銃塔など革新的な機体であったが、コンソリデーテッド社ではB-24の生産に追われていたために開発が遅れ、この間に様々な改良が盛り込まれて試作機は1945年9月にロールアウトし、戦後の核抑止力の主力となった。

Battleship "Iowa" class

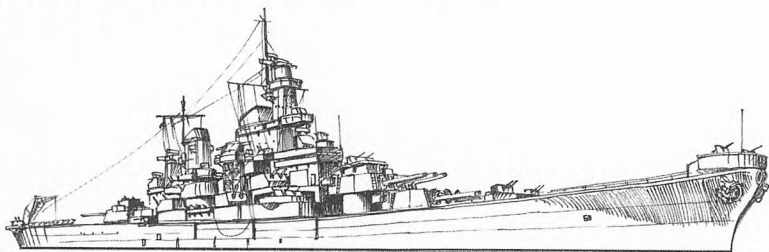
## 戦艦 アイオワ級

今なお現役にある最後の戦艦

全長	270.6m
全幅	33m
基準排水量	45,000t
最大速度	33kn
武装	40.6cm砲×9 12.7cm砲×20

1939年と40年に計画された戦艦でロンドン条約の制限を考えないで設計されたため、攻防のバランスの取れた戦艦となった。機関出力210,000hpを誇り、最大速力33ktという高速戦艦である。1943年2月に1番艦アイオワが竣工したのを皮切りに、終戦まで4隻が竣工、2隻が建造中であった。終戦により残り2隻は建造中止となった。パナマ運河を

通過する必要があったため幅は33mに押さえられており、このため本級の主砲は40cmが限界であった。この点が日本の大和級建造の際に予想され、大和の主砲にこれを凌ぐ46cm砲が採用されたという話がある。終戦まで機動部隊の護衛に活躍、3番艦ミズーリ艦上で日本の降伏文書調印が行われ、太平洋戦争終結となった。



Battleship "North Carolina" class

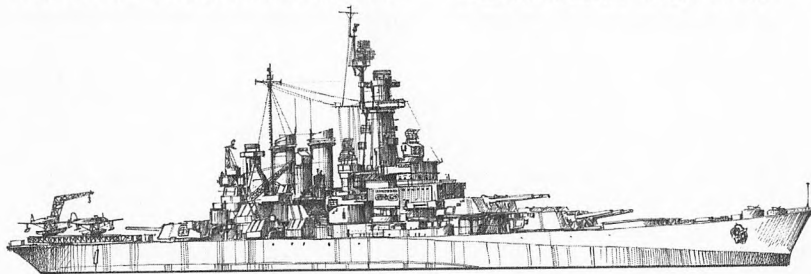
## 戦艦 ノースカロライナ級

条約明け戦艦の第一陣

全長	222.2m
全幅	33m
基準排水量	35,000t
最大速度	28kn
武装	40.6cm砲×9 12.7cm砲×20

1937年度に計画された戦艦で、当初は36cm級の戦艦として建造されたが、同時期に建造された日本の大和型（40cm砲を搭載していたと考えられていた）に対抗するために途中で主砲を40cmとして完成した。が、防御装甲は35.6cm砲の仕様である。本級では、副砲を廃止し、新たに実用化された高角砲を兼ねる

両用砲を採用している。機関出力121,000馬力で28ノットとなかなか優速であった。1941年に竣工し、始めは大西洋にあったガダルカナル戦から太平洋に転戦し、1942年には戦艦霧島と夜間砲撃戦を展開、これを撃沈している。その後は2番艦ワシントンとともに上陸支援や船団護衛に活躍している。





Aircraft Carrier "Yorktown" class

# 航空母艦 ヨークタウン級

ミッドウェー海戦の立役者

全長	246.9m
全幅	33.2m
基準排水量	19,800t
最大速度	34kn
武装	12.7cm砲×8 搭載機84機

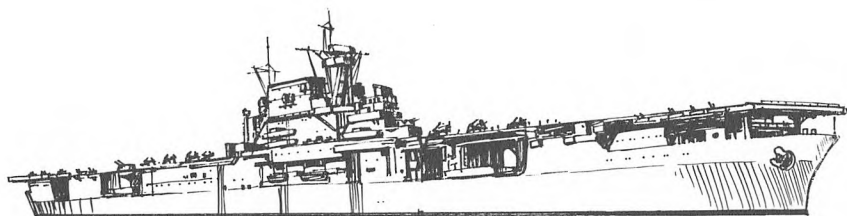
1933年に計画、建造された中型空母で、同型艦エンタープライズ、1939年に追加建造されたホーネットとともに太平洋戦争初期のアメリカ海軍機動部隊の主力として活躍した。建造に当たっては、先に建造されたレキシントン級およびラングレーの使用実績などを鑑みて、建造中の空母レンジャーよりも大型で速力の出るものとし、防御力も強化された。最初は2隻のみの建造だったが、後に条約切れにともなって空母増強の必要が迫り、設計を流用して3番艦としてホーネットが建造された。

1番艦ヨークタウンは、1937年9月に竣工し、ほぼそのままの状態で太平洋戦争に突入、1942年5月の珊瑚海海戦に参加し、僚艦レキシントンを失うも、軽空母祥鳳を撃沈した。この際ヨークタウンも大破した。真珠湾に帰還後、3カ月かかる見込みを突貫工事でわずか3日で修理され、サラトガの航空隊を載せてミッドウェーに派遣された。ミッドウェー海戦では同型艦のエンタープライズ、ホーネットとともに日本機動部隊を奇襲、赤

城、加賀、蒼龍の3隻を撃沈する。しかし飛龍艦載機の反撃で大破、真珠湾に曳航途中に潜水艦伊一六八号の雷撃を受けて沈没した。

2番艦エンタープライズは第二次大戦中最も活躍した空母で、1938年5月竣工した。ミッドウェー海戦での4空母撃沈を始め重巡三隈、衣笠など、日本軍艦を最も撃沈した空母となった。太平洋戦争中盤は文字通りたった1隻で日本機動部隊と渡り合い、エセックス級の竣工後もアメリカ機動部隊の主力として各海戦に参加、特攻機の攻撃も受けている。終戦後は復員船として使用の後解役、解体された。「ビッグE」と呼ばれた第二次大戦最高の武勳艦で、その名は原子力空母に受け継がれている。

1941年10月に竣工した3番艦のホーネットは若干の改良を受けた改ヨークタウン級空母で、1942年4月には陸軍のB-25爆撃機を16機載せて東京初空襲に成功した。ミッドウェー海戦に参加後、1942年10月の南太平洋海戦で日本機動部隊の空襲を受け、大破してのち沈没した。



Aircraft Carrier "Essex" class

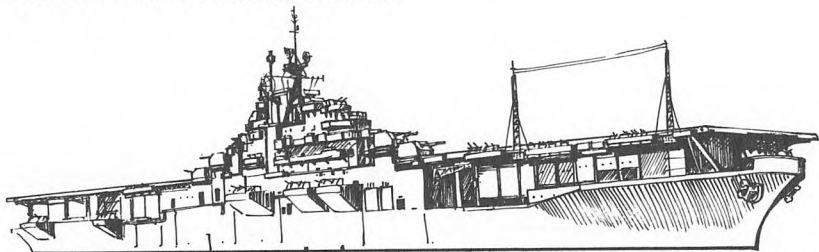
## 航空母艦 エセックス級

月刊正規空母

全長	267.2m
全幅	45m
基準排水量	27,100t
最大速度	33kn
武装	12.7cm砲×12 搭載機100機

1940年から44年までに33隻の建造が計画され、1番艦エセックスが1942年末に竣工、以後終戦までに17隻が完成した大型空母。成功したヨークタウン級を拡大改良した級で、建造も工数を減らして部品の共通化を図るなど建造しやすくなっていた。カタパルトや舷側エレベーターも採用されている。飛行甲板は装甲されていなかったが、格納庫甲板に防

御鋼板を張り、舷側には軽質油管を配置して防御力向上に努めている。このためダメージコントロール思想の取り入れもあって沈みにくい空母となっており、ひどいダメージを受けた艦はあっても沈没した艦はなかった。戦後も長く現役で使われ、最後のエセックス級が退役したのは最近のことである。



Aircraft Carrier "Lexington" class

## 航空母艦 レキシントン級

巡洋戦艦改造の大型空母

全長	270.8m
全幅	39.7m
基準排水量	36,000t
最大速度	34kn
武装	20.3cm砲×8 12.7cm砲×12 搭載機90機

ベースは1921年に建造が開始された巡洋戦艦だったが、ワシントン条約で建造が中止され、空母とされることになり、1927年竣工した。2番艦サラトガ。初めから飛行甲板を一段とし、大型の島型艦橋と煙突を右舷に設置していた。日本の赤城、加賀とともに世界随一の大型空母として「レディ・レックス」「いとしのサラ」と呼ばれ親しまれた。第二次大戦では珊瑚海海戦でレキシントンが沈没、サラトガは終戦まで活躍した。

Aircraft Carrier "Wasp"

## 航空母艦 ワस्प

条約の制限一杯で作られた中型空母

全長	226.1m
全幅	33.2m
基準排水量	14,700t
最大速度	29.5kn
武装	12.7cm砲×8 搭載機72機

1934年に条約の保有制限一杯に収まるように計画された空母で、ヨークタウン級空母の縮小型である。日本の蒼龍、飛龍と同級の空母だが、航空機搭載量は若干多い。試験的に舷側エレベーターを採用していたといわれる。1940年に竣工。その後第二次大戦中ほどまでほとんど大西洋に展開していた。後に太平洋の空母不足を補うため移動したが、1942年9月、燃料補給中に潜水艦伊一九号の雷撃を受け、ガンソリンに引火して大爆発、沈没した。

M4 Medium Tank Sherman

# M4 シャーマン中戦車

生産台数でドイツ戦車を圧倒した中戦車

全長	5.91m
全幅	2.62m
全高	2.74m
重量	30.3t
最大速度	42km/h
武装	75mm砲×1 7.62mm機銃×2

旋回式の大型砲塔の経験がないため37mm砲を装備する小型の砲塔を搭載し、車体に限定旋回式の75mm砲を装備して暫定的に生産されたM3中戦車の後継車としてM3の生産終了に合わせて生産が始められたもので、アメリカ初の本格的中戦車でもある。

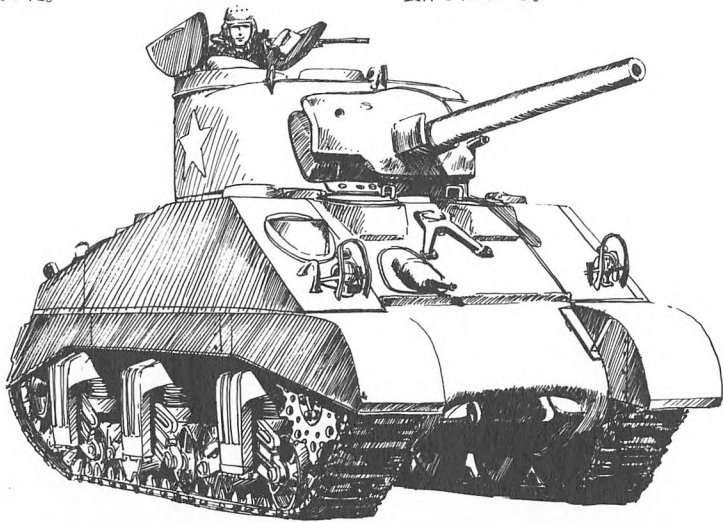
最初に生産されたのは溶接式の車体に、75mm砲を搭載する鑄造砲塔を組み合わせたM4で、389輛が生産され、イギリスでもシャーマンIとして用いられた。後期生産車ではM4A6と同じハイブリット型車体を用いられている。

ほぼ同時に生産された鑄造車体と鑄造砲塔の組み合わせの車輻はM4A1と呼ばれ、707輛を生産、イギリスではシャーマンIIと呼んでいる。

エンジンの生産が間に合わないため、それまでのガソリンエンジンからディーゼルエンジンに換装したのがM4A2で、エンジン以外はM4とほぼ同規格の車輻であった。10,968輛が完成し、イギリスではシャーマンIIIと称していた。

続くM4A3はシリーズ最多の12,596輛が生産されたもので、再びガソリンエンジンが用いられている。イギリスでの呼称はシャーマンIV。エンジンをトラック用ガソリンエンジン5基を組み合わせたマルチバンク型を用いて車体の長さを延長したのがM4A4で、7,499輛が生産されたが、そのほとんどがイギリスに送られ、シャーマンVとして多用されている。最終生産型となったM4A6は、車体の前部を鑄造、後部を溶接式としたハイブリット型で、75輛が生産されすべてアメリカ陸軍で使用された。

他には生産中に車体の前面装甲板の角度を変えて新型のハッチを用いたものや、サスペンションを新型に替えた車輻、さらに主砲を76mm砲としたもの、主砲を105mm砲に換装し歩兵支援車輻としたものなど数多くの改良型が登場した。また車体と砲塔に装甲板を追加した突撃型M4A3E2ジャンボや、新型車体と新型サスペンション、76mm砲を組み合わせたM4A3E8などもシリーズの一環として製作されている。



M3 Medium Tank Lea. Grant

## M3 リー中戦車

砂漠と太平洋の島々で活躍した中戦車

全長	5.64m
全幅	2.72m
全高	3.12m
重量	27.9t
最大速度	39km/h
武装	75mm砲×1 37mm砲×1 7.92mm機銃×3

M2A1中戦車でのご経験に基づき75mm砲を搭載する本格的な中戦車として開発されたが、当時まだ大口徑砲を装備する旋回砲塔のご経験がなかったため、早急に75mm砲搭載戦車を実戦化する必要に迫られた結果、車体に限定旋回式の75mm砲を装備して生産が行われた。装甲板をリベットで止めたものや、鑄造製車体、溶接車体のものなど生産型も多く、各型合わせて6,258輛が生産され、イギリス向けの車輛は砲塔が小型化されグラントと呼ばれている。

M26 Heavy Tank Pershing

## M26 パーシング重戦車

第二次大戦末期に登場した重戦車

全長	7.26m
全幅	3.51m
全高	2.78m
重量	41.9t
最大速度	48km/h
武装	90mm砲×1 7.92mm機銃×2

機動性を重視し、対戦車戦闘には旋回砲塔式の駆逐戦車を充てていたため重戦車の必要性があまりなかったアメリカ陸軍であったが、開発は行っていた。ノルマンディー上陸後バンターなどに対抗できる重装甲の戦車が必要になったため急遽開発中のT26がT26E3として生産され、1945年1月に完成した20輛がヨーロッパに送られて実戦にも短期間であるが参戦した。その後制式化されてM26と呼ばれて、終戦までで1,436輛が完成した。

M10 Gun Motor Carriage

## M10駆逐戦車 GMC

アメリカ初の本格的駆逐戦車

全長	5.96m
全幅	3.04m
全高	2.89m
重量	29.6t
最大速度	48.0km/h
武装	75mm砲×1

M3中戦車から派生したM7支援自走砲の開発に成功した陸軍が、旋回砲塔を装備する駆逐戦車の開発に取りかかったのは1941年末であった。当初はM3戦車の車体が用いられたが、車体を低くするためにM4の車体が使われることになり、1942年6月にM10として制式化された。車体は避弾径始を図った角度をつけた装甲板で構成され、車体中央の砲塔と併せドイツ戦車のイメージがある。6,706輛が生産されチュニジア戦が初陣となった。

M18 Gun Motor Carriage Hellcat

## M18対戦車自走砲 ヘルキャット

機動性に優れた小型駆逐戦車

全長	6.65m
全幅	2.87m
全高	2.58m
重量	17.0t
最大速度	88.0km/h
武装	76mm砲×1

M10とほぼ同時期に開発が行われた駆逐戦車だが、より小型な軽駆逐戦車として開発されている。強力な76mm砲を全周旋回式の砲塔に装備し、アメリカの戦車としては初めてトーションバー・サスペンションを採用しており、80km/hをこえる高速性を売り物にしたヒット・エンド・ランが得意であったが、反面装甲が薄く正面からの射撃戦は苦手としていた。1944年10月までに2,507輛が生産された。

M36 Gun Motor Carriage Jackson

## M36駆逐戦車 ジャクソン

M10の火力強化型駆逐戦車

全長	6.14m
全幅	3.04m
全高	2.71m
重量	28.1t
最大速度	48km/h
武装	90mm砲×1

そのバランスのよさで期待以上の成功を収めたM10駆逐戦車であったが、唯一問題となったのが装備する75mmがドイツの戦車を相手にするには非力であったことだ。このため主砲を90mm高射砲に換装して攻撃力の強化を図った車輛が開発された。これが1944年6月に制式化されたM36である。90mm砲搭載のため砲塔が新型化され、M10A1の車体を用いられたが、後期生産車ではM4A3の車体で使用されM36B1と改称されている。

T95 Gun Motor Carriage

## T95 自走砲

アメリカ版ヤクトティーガー

全長	11.13m
全幅	4.40m
全高	2.85m
重量	85.5t
最大速度	13.0km/h
武装	105mm砲×1

ドイツ軍の強固な陣地を突破する重戦車として1944年4月から開発に入ったT28がルーツで、当初重戦車と分類されていたが主砲が限定旋回式のため1945年3月に自走砲に改められ、名称もT95に変わった。装甲は前面が300mmもあり主砲は105mm砲を採用したため重量は80tを越えてしまった。このため足回りと履帯は二重の並列式となり、輸送時は外側の履帯を足回りごと取り外すという特異な手法を採った。試作車2輛のみが完成した。

M15 Multiple Gun Motor Carriage

## M15 対空自走砲

M13の火力強化型

全長	6.64m
全幅	1.95m
全高	2.4m
重量	9.04t
最大速度	81km/h
武装	37mm機関砲×1 12.7mm機銃×2

M16と同様に、連装の12.7mm機銃を搭載した対空自走砲M13の火力向上を目的として開発された車輛で、連装の12.7mm機銃はそのままだが、機銃の中央に37mm機関砲を追加したものでM16とともに対空自走砲の主力となった。このM15は1943年4月までに680輛が生産され、10月にはM15の機銃マウントを新型に換装したM15A1の生産が始まった。44年2月まで生産は続き1,652輛を生産した。戦後は自衛隊にも供与されている。

M16 Multiple Gun Motor Carriage

## M16 対空自走砲

肉切り包丁と恐れられた対空自走砲

全長	6.40m
全幅	2.35m
全高	2.90m
重量	8.14t
最大速度	81km/h
武装	12.7mm機銃×4

M3ハーフトラックに12.7mm連装機銃を搭載した対空自走砲M13の火力強化型として1942年に制式化されたのがこのM16対空自走砲だ。12.7mm機銃は4連装と一挙に倍増し、対空以外にも水平に向けて地上掃射にも大きな威力を発揮した。このM16が初めて実戦に参加したのはノルマンディー戦からであり、M13にかわってアメリカ陸軍の標準対空自走砲となっている。1943年5月から生産を始め、44年3月までに2,877輛が完成した。



M19 Anti-aircraft Cannon Motor Carriage

## M19 対空戦車

アメリカ初の本格的対空戦車

全長	5.81m
全幅	2.93m
全高	2.96m
重量	15.63t
最大速度	56km/h
武装	40mm機関砲×2

軽戦車の車体をベースに、ポフォース製40mm機関砲を連装に装備した本格的な対空戦車として1943年2月から開発に着手したもので、当初M5軽戦車の車体を用いて製作される予定であったが、M5軽戦車の後継として開発が進められていたM24軽戦車の生産が決定したため、生産はこのM24の車体を流用することになった。車体は機関部の配置など大きな変更を受け後部には全周旋回式の砲塔が配されている。終戦までに285輛が完成した。

M12 Howitzer Motor Carriage Kingkong

## M12 キングコング

155mm砲を搭載した長射程自走砲

全長	6.77m
全幅	2.67m
全高	2.88m
重量	26.76t
最大速度	38km/h
武装	155mm砲×1

同じくM3中戦車をベースとした自走砲だが、このM12キングコングは155mmという大口径のキャノン砲を装備した長距離射撃が可能な車輛で、ノルマンディー上陸後唯一機甲師団と行動をとることができる中口径砲であった。開発は1941年6月から始まり機関部を車体の中央に移し、後部はオープントップの戦闘室とされて第一次大戦で制式化された155mm砲を搭載した。100輛が生産されたが実戦への参加はノルマンディー上陸からであった。

M7 Howitzer Motor Carriage

## M7プリースト 自走榴弾砲

ヴェスペのライバルとなった自走砲

全長	6.02m
全幅	2.78m
全高	2.95m
重量	22.97t
最大速度	39.0km/h
武装	105mm砲×1 12.7mm機銃×1

M3中戦車の車体を用いて開発された砲兵部隊に配備する自走砲で、1941年6月から開発が始まった。車体はM3のものをそのまま用い、上部に鋼板で構成されたオープントップ式の戦闘室が設けられた。主砲は105mm榴弾砲が搭載され、その右側には円形の大きな機銃台が設けられているが、この機銃台の形状からイギリスでプリースト(司祭)というニックネームがつけられた。後期生産車はM4A3の車体を使用しM7B1と改称されている。

37mm Anti-Tank Gun M3

## 37mm対戦車砲 M3

初期に用いられた小型対戦車砲

口径	37mm
砲身長	2,010mm
重量	413kg
初速	870m/秒
最大射程	1,170m

大戦前の1937年から開発に取り掛かった対戦車砲で、入手したドイツのPak36/37mm対戦車砲2門を研究することから開発はスタートし、1938年10月にM3として制式化された。砲身は単純なモノブロック構造で、砲架に取り付けられた車軸には車輪が装着され、折り畳み式の簡単な2脚が設けられているところなど確かにPak36に大きな影響を受けたことがわかる。非力ではあるが太平洋戦争では最後まで用いられている。

57mm Anti-Tank Gun M1

## 57mm M1 対戦車砲

大戦半ばまでの標準対戦車砲

口径	57mm
砲身長	2,972mm
重量	1,272kg
初速	840m/秒
最大射程	9,337m

大戦前の37mm対戦車砲を実用化したアメリカ陸軍であったが、ヨーロッパで戦争が勃発するとこれでは威力不足なことを痛感し、1941年にイギリスで開発された6pdr砲を国産することを決め、同年5月にM4対戦車砲として制式化された。国産化といってもそのままの形で生産されたわけではなく、アメリカの規格に合わせて各部品の耐久性やギアのサイズなどが変更され、砲身の長さも40cmほど延長され重量がやや増加した。

3in Anti-Tank Gun M5M5

## 3インチ M5 対戦車砲

アメリカの対戦車砲の決定版

口径	76mm
砲身長	4,023mm
重量	2,213kg
初速	780m/秒
最大射程	1,465m

1940年に当時のいかなる戦車も一撃で撃破できる強力な対戦車砲として開発が始められたもので、3in高射砲M3の砲身と105mm榴弾砲M2の機関部を組み合わせたもので、1941年12月にM5/3in対戦車砲として正式化された。3inという口径は76mmに相当し、ちょうどドイツ軍の75mm/Pak40のライバルということができ、開発時期もほぼ一致していた。1942年から配備が始められ大戦の終了まで使用され、戦車砲にも転用されている。

3in Anti-aircraft Gun M3

## 3インチ M3 高射砲

大戦初期に用いられた高射砲

口径	76mm
砲身長	4,019mm
重量	5,539kg
初速	840m/秒
最大射程	3,450m

第一次大戦で実用化されたM1917/3in高射砲を原型として、戦後各部に改良を加えながら開発が続けられ、1928年にM3高射砲として制式化された。その後さらに改良されて軽量化が図られたものが1938年に制式化されたが、砲身や砲架などの名称が改められたものの兵器としての呼称であるM3高射砲という名称はそのまま使用が続けられた。開戦時には旧式化が目立っており、90mm高射砲M1の実戦化に伴い開戦後間もなく退役した。

90mm Anti-aircraft Gun M1A1

## 90mm 高射砲M1A1

88mm高射砲の対抗馬

口径	90mm
砲身長	4,728mm
重量	8,626kg
初速	810m/秒
最大射程	17,745m

長らくM3高射砲を使用して来たアメリカ陸軍であったが、1938年に沿岸部の防衛を強化するためにより口径の大きな高射砲を開発することが決まり、1940年3月に正式化されて生産が始められたのがこのM1である。1941年5月には各部に改良が図られた発展型M1A1が制式化されて同年末から生産が開始された。部隊への配備は1941年の初めから行われ、1942年の北アフリカ上陸から実戦に投入されて終戦まで主力として用いられた。

105mm Howitzer M3

## 105mm M3 榴弾砲

アメリカ陸軍の標準型榴弾砲

口径	105mm
砲身長	1,888mm
重量	1,133kg
初速	306m
最大射程	7,548m

1941年にアメリカ陸軍は航空機で空輸できる軽量の105mm榴弾砲の開発を要求し、この結果誕生したのが第二次大戦で標準型榴弾砲として多用されたM3 / 105mm榴弾砲である。開発期間を短縮するため同じ105mm榴弾砲であるM2A1の砲身を約69cm短縮したものをうい、脚をより小型なM3A1 / 75mm榴弾砲から流用し、機関部は75mmパック・ホイッサーのものを用い、機関部は75mmパック・ホイッサーのものを105mmに拡大したものをそれぞれ使用し、1943年2月に制式化された。

155mm M59 Long Tom

## 155mmキャノン砲 ロングトム

アメリカ長射程砲の傑作

口径	155mm
砲身長	7,036mm
重量	13,892kg
初速	840m/秒
最大射程	22,860m

アメリカ陸軍は第一次大戦終了直後の1920年から、重砲兵部隊で用いる長射程キャノン砲の基礎研究に着手した。この砲は同一の砲架の155mmキャノン砲と203mm榴弾砲を搭載することで生産性の向上とコストの低下を図ったもので、M1型砲架と名付けられて1938年に制式化された。1941年には混同を避けるため155mm砲はM59という新たな名称が与えられ、ヨーロッパ、太平洋両戦線でその長大な射程を生かして活躍した。

LVT1

## LVT1

初期に生産された水陸両用装軌車輻

全長	7.95m
全幅	3.25m
全高	2.46m
重量	36t
最大速度	32.5km/h
武装	37mm砲×1 12.7mm機銃×3

近代戦車の祖クリスティーが1924年に製作した水陸両用装軌車に続いて、1930年代の半ばにフロリダの湿地帯で救難活動に用いるアルミ合金製のアリゲーターと呼ばれる水陸両用装軌車が製作された。この車輻には水上での走行を容易にするため履帯には水掻きが装着されていた。これが原型で、防御力の強化を図って車体を鉄板に替えたものが1940年に発注され、改良を加えたうえでLVT1として1941年に制式化された。1,255輻を生産。

LVT4

## LVT4

本格的な水陸両用装軌車輻

全長	7.9m
全幅	3.25m
全高	3.09m
重量	18.59t
最大速度	25.7km/h
武装	75mm砲×1 12.7mm機銃×3

転輪にサスペンションを装着し地上での走行能力の向上を図ったLVT2の発展型がこのLVT4で、エンジンはそれまでの車体後部から車体前部に移して後部に大きな乗降ドアを新設したのが特徴で、足回りには変化がないが車体はやや大型化された。後部のキャビンには兵員30名、もしくは軽車輻を収用することが可能で、8,348輻が生産された。1944年サイパン島への上陸が初陣で、イギリスにも供与されてバッファローと呼ばれている。

とにかく

# 勝ちたくて…

## 機動部隊の決戦は索敵が決め手！

「ワールドアドバンス大戦略」では、ほとんどが海上での戦いというシナリオが何本か用意されている。太平洋の戦いで機動部隊同士の決戦をシュミレートした珊瑚海やミッドウェー、マリアナ沖などである。これには今までの陸戦中心の都市を占領していく戦術とは180度の転換が必要される。なにせ、攻略の中間指標となる地点が見えたらないからだ。そのかわり、敵機動部隊の無力化が中間目標となる。ただし、機動部隊というだけあり捕捉しがたいので索敵の重要性がかなり増大する。潜水艦や戦闘機などをクサイ海域へ先行させ発見に努めること。発見後はまず戦闘機で艦爆・艦攻を叩くこと。艦爆・艦攻がなくなれば、敵



コツさえつかめば、機動部隊同士の戦いは、それほど難しくはない。

の攻撃力は0に等しくなるからだ。

ところで、実戦では敵部隊の捕捉殲滅が目的となるだろう。が、ゲームでは、敵司令部の破壊となる。つまり、敵機動部隊と交戦せずに巧みにかわし、敵司令部にのみ集中攻撃をかければいい。これも敵機動部隊の位置を把握することが重要である。

アメリカ合衆国

## アメリカ軍の歩兵部隊

民主主義と物資に支えられた歩兵部隊

今をときめく？アメリカ合衆国陸軍といっても、当時は他の国の歩兵と変わるものでもないが、さすがに物量の豊かな国だけあって装備は一段と優れていた。

その中でも挙げられるのが列強各国のなかで、軍用ライフルとして唯一半自動式のM1ガーランド・ライフルを装備していたことがあげられる。しかも戦争の真っ最中に。同じように、歩兵移動の自動車化も果たしている。

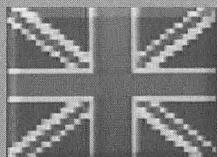
また独立した上陸専門部隊の海兵隊の存在も大きく、これがなければ南太平洋の島々を占拠していた日本軍をあそこまで効率よく壊滅することはできなかったといわれる。何事につけ大陸的な陸軍は反撃を食らうと全部隊で前進を停止し重砲隊による掩護射撃を受け再び前進する。これに比較し海兵隊は上陸後も柔軟な戦術対応力を示した。太平洋の島嶼を抑えたのは海兵隊の功によるものである。

米軍は空挺部隊も当然装備していたが、他国同様期待したほどの華麗な活躍はない。しかし、バルジの戦いで要衝バスターニュを守った第101空挺師団の奮闘は有名である。もっとも本来の任務、空挺作戦とは随分と違う。

圧倒的な航空や重砲の支援、バズーカ砲に火炎放射機と、スープが冷めない食事。もっとも贅沢な？環境にあった歩兵部隊であったが、これに抗した日本軍は生命を省みない出血強要作戦を取った。無謀と呼ばれるが、米軍は民主主義国家の軍隊であるので、過剰な損害は即選挙権を有する国民の非難的となり、講和に世論が傾くだろうし、それは政権維持に関わる。少しでも有利な条件で講和を結ぼうというのが大戦末期の日本軍の戦略だったので、一応戦略目的と戦術が合致していたともいえる。



# 大英帝国



イギリスの海軍（ロイヤルネイビー）は世界中に広がる植民地を守る目的があり、世界一の座にあったが、第一次大戦後に、数はアメリカと同等、質は日米に遅れを取っていた。主力艦のほとんどは老朽化しており、改装も間に合わず、空母は7隻保有していたものの艦載機の質は日米とは比べようがないほど劣っていたのである。ただし、海軍航空の分野はヨーロッパにおいて脅威となる勢力はなく、あくまでも支援部隊に過ぎないので当然であった。このように、日米の近代海軍に比べていささか老朽の感が拭えないが、ハードウェア的な問題はともかく、伝統の誇りに支えられ、人員の質は高く、航海技術に長け、管理運用は健全であった。世界最先端をいくレーダーが装備されると攻撃力は増し、その勇敢さと攻撃力のバランスは日本海軍に匹敵した。ドイツ海軍は、質はともかく数においては脅威ではなかった、空軍は、第一次大戦末期にはすでに独立した軍組織であり、戦略爆撃軍として発展した。ドイツ空軍の拡張に対し、機数の整備増産に努めたが、ドイツ空軍に対して緒戦では抗し得なかった。1940年のバトル・オブ・ブリテンでは、世界に先駆けたレーダー警戒網による正確な情報で、少ない迎撃戦闘機を効果的に運用、ドイツ空軍の侵略を退けた。戦争の推移に伴い、次第に攻勢をとり、4発戦略爆撃機によりドイツ本土を空襲、多大な被害を被りながらも、粘り強く戦い、ついに祖国を勝利に導いた。イギリス空軍の特徴は、スピットファイアに代表される優秀な機体と、そうでない機体の差が激しいことと、また旧式機でも、ハード優先に陥らず柔軟性を持って運用し戦果を収めたことにある。

イギリス陸軍は正規の職業軍人で構成され、兵員は限定徴兵を行い、インドなど連邦各国からも動員していた。日独も占領下から動員し、また隷下にある諸国軍も指揮下においたが、一部熱狂的な集団を除いては概して協力的ではなくかえって足手まといになる面も多く見受けられた。その点は、植民地治世が長く、外交センスに長けたイギリス人は巧みで、言語・習慣・士気の異なる“多国籍”軍をまとめ、戦力化に成功している。装備は緒戦はやはり旧式であったが、近代化し、数こそ多くはないがほとんど自動車化しており、将校は優秀であった。戦車の母国イギリスは、緒戦こそドイツ戦車隊を脅かしたものの、ドイツ戦車の進歩にはついていけなかった。また指揮戦車を撃破すると指揮系統がバラバラになり、北アフリカでは苦戦している。

イギリスは戦争には勝利したが、国力は疲弊し、経済的にみれば敗北と同様であり、戦後ほとんどの植民地が独立したことは、政治的見地に立っても勝利を得たとはいえない。もちろん、自国を防衛しきった粘り強さと勇気は記憶に残るところである。



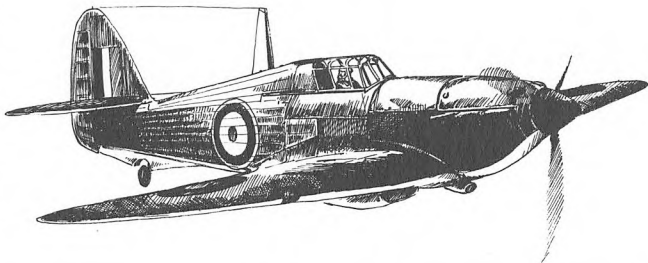
Hawker Hurricane

# ホーカー・ハリケーン

旧式だがイギリスの空を守った功労者

全長	9.45m
全幅	12.2m
出力	1,185hp
全備重量	3,530kg
最大速度	546km/h
武装	20mm機関砲×4 爆弾450kg

コクピットから後方の胴体は羽布張りであり、見た目も古臭い機体ではあるが、このハリケーンはバトル・オブ・ブリテンで来襲したドイツ空軍機撃墜においてトップスコアを記録し、近代的でかつ性能も優れたスピットファイアより貢献したことになる。試作機の製作は1935年2月から始まり、試作1号機は1935年11月に初飛行に成功。生産機は1937年12月から部隊への配備が開始された。ドイツへの宣戦布告後の10月にフランス



に展開する部隊の所属機がDol7を撃墜したのを皮切りに、フランス、次いでイギリスと防空戦に投入され多大な戦果を収めた。これは本機が爆撃機迎撃に多用されたこともあったが、イギリスの空を守り抜いた戦闘機であることは間違いない。

Hawker Typhoon

# ホーカー・タイフーン

戦闘爆撃機としてノルマンディーで大活躍

全長	9.78m
全幅	12.66m
出力	2,180hp
最大速度	648km/h
全備重量	5,030kg
武装	20mm機関砲×4 爆弾900kg

2,000馬力級液冷エンジンを搭載する高速戦闘機として1938年から開発を始めた機体で、1940年2月に初飛行に成功した。試験ではエンジンを中心に多くの問題が生じたが、戦局の悪化のため強引に生産されることになった。量産機は1941年9月から配備を始めたが乗員の評判は最悪で、一時は戦闘で失われる機体より事故で喪失する機体のほうが多かったほどだ。しかし関係者の努力で改修に成功し、対地攻撃機に変身して大きな戦果を収めた。

Hawker Tempest

# ホーカー・テンペスト

タイフーンの発展型

全長	10.06m
全幅	12.49m
出力	2,420hp
全備重量	5,175kg
最大速度	678km
武装	20mm機関砲×4 爆弾900kg

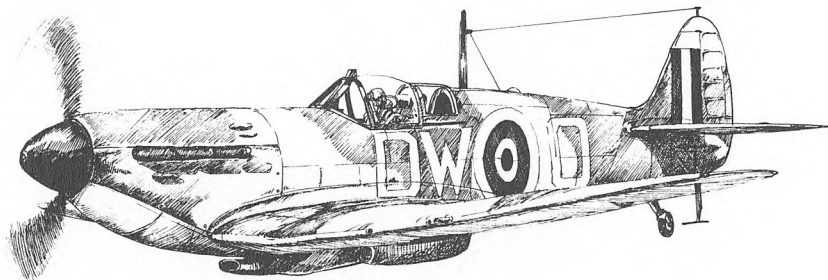
問題が多く高速戦闘機としては失敗に終わったタイフーンの発展型として1941年9月に開発に着手した機体がテンペストだ。タイフーンの特徴であった分厚い翼は薄い層流翼に替わり、胴体も新設計されたため当初タイフーンIIという名称が与えられていたものの、テンペストという新たな名が採用された。大戦中に生産されたのはテンペストV型だけで、800機が生産されて1944年6月から実戦に参加し、対地攻撃やVI撃墜に活躍した。

Supermarine Spitfire

# スーパーマリン・スピットファイア

イギリスの生んだ最高傑作機

全長	9.54m
全幅	11.29m
出力	1,650hp
全備重量	3,311kg
最大速度	669km/h
武装	20mm機関砲×2 12.7mm機銃×2



シュナイダー・トロフィーで勝利したレーサー機S.6Bの経験を生かして開発された戦闘機で、本機にわずかに先立って開発されたハリケーンと比べて速度で50km/h以上早い速度を記録し、また構造も全金属製のモノコックと当時のイギリス機としては革新的な機体構造を採用していた。

最初に生産されたMk 1は最初木製の固定ピッチ2翅プロペラを使用していたが、エンジンの効率を生かすために生産中に金属製可変ピッチ3翅に換装されている。続くMk 2とともにバトル・オブ・ブリテンで大活躍し、ドーバー海峡を渡って進撃して来たドイツ空軍戦闘機のBf109やBf110を迎撃し、ドイツに英本土上陸作戦を諦めさせた。当時、ドイツのエースで戦闘機総監となったアドルフ・ガーラントは空軍大臣ゲーリングの「どんな戦闘機なら満足するか」という問いに「スピットファイア」と答えている。

1941年9月にドイツ空軍が新鋭のFw190を登場させると、それまでドイツ機に対して優位を保っていたスピットファイアも一蹴されるようになってしまった。このため性能向上

型として急遽開発されたのがMk 9で、Mk 5の胴体に高高度性能が強化された新型エンジンを組み合わせ、ようやくFw190と対等の戦闘が可能となった。さらに高高度性能を強化すべく2段2速過給機を装備した新エンジンを搭載して完成したのがMk 14で、本来ならば機体を新設計としたMk 21が生産されなければならなかったが、実用化に時間がかかるためやむを得ずMk 8の胴体とこの新エンジンを組み合わせて生産された機体であった。しかし高高度性能の向上は著しくV1ミサイルの迎撃に大活躍した。

他には、本格的な艦上戦闘機をもたなかったイギリス海軍の空母搭載戦闘機として、スピットファイアに着艦フックを装着し機体を補強したものがシーファイアとして採用された。初期には主翼はそのままであったが、生産中に搭載により有利な折り畳み式に変更され、空軍型同様に多くの派生型が生産された。空軍、海軍合わせての総生産数は22,759機に達しており、イギリス機として最多生産数を誇っている。

Gloster Gladiator

## グロスター・ グラジエーター

イギリス空軍最後の複葉戦闘機

全長	8.23m
全幅	9.76m
出力	840hp
全備重量	2,137kg
最大速度	405km/h
武装	7.7mm機銃×4

イギリス空軍が最後に制式化した複葉戦闘機がグラジエーターで、優れた機動性により他の単葉戦闘機を抑さえて採用され、1937年から実戦部隊への配備を開始した。しかし本機の実戦化よりわずかに遅れる7カ月後にはハリケーンが登場したので、ほんの短期間主力の座に就いたに過ぎなかった。しかし地中海や中東方面では使用が続けられ、ドイツ戦闘機とも交戦したものの1943年には少数機が後方で用いられていたに過ぎなかった。

Gloster Meteor

## グロスター・ ミーティア

イギリス空軍初の初日ジェット戦闘機

全長	12.59m
全幅	13.10m
推力	770kg×2
全備重量	6,210kg
最大速度	856km/h
武装	20mm機関砲×4

ミーティアはイギリス空軍初の制式化ジェット戦闘機であり、連合軍のジェット機として唯一実戦に参加した機体でもある。試作初号機は1943年5月には初飛行を行ったものの、部隊への配備は1944年7月以降と遅れてしまった。このため実戦に投入されたのは1945年4月からのことで、すでに実戦化されてその威力を見せつけていたライバルのMe262との空戦は果たす事なく終戦を迎えているが、対地攻撃やV1撃墜で戦果は収めている。

Blackburn Skua

## ブラックバーン・ スクア

WWII初のドイツ機撃墜のイギリス機

全長	10.85m
全幅	14.07m
出力	905hp
全備重量	3,732kg
最大速度	361km/h
武装	7.7mm機銃×5 爆弾450kg

イギリス海軍航空隊が初めて採用した複座急降下爆撃機で、この他に初めて空母への着艦を行った引き込み脚機や第二次大戦で初めてドイツ機を撃墜するなどの多くのタイトルホルダーでもある。1938年11月から空母への搭載が始まったが、期待ほどの性能は発揮できずアメリカや日本の急降下爆撃機と比べても目立つ存在ではなかった。このため最初に発注された190機で生産は終わり、1941年の夏にはフルマーなどに改変され姿を消した。

Fairey Fulmar

## フェアリー・ フルマー

いかにもイギリスらしい中途半端な爆撃機

全長	12.24m
全幅	14.12m
出力	1,080hp
全備重量	4,387kg
最大速度	412km/h
武装	7.7mm機銃×9 爆弾226kg

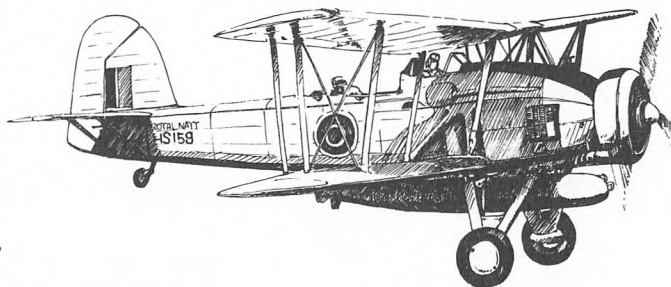
前作のバトル軽爆撃機の発展型として開発された艦上戦闘爆撃機で、戦闘機としても爆撃機としても運用ができるように考えられた機体であるが、実際にはどちらの任務に就けても十分な能力ははななく生産型のフルマーIと、エンジン強化型フルマーII合わせて563機という少数生産に終わった。ただ低性能のイタリア機相手にはなかなか健闘しており、1940年9月から42年8月までに112機の敵機を撃墜したが、この大半はイタリア機と思われる。

Fairey Swordfish

## フェアリー・ソードフィッシュ

低速複葉固定脚、されど老兵は死なず

第二次大戦の勃発時にはすでに旧式化した複葉の艦上雷撃機であったが、ドイツの敗戦直前まで一部の機体が実戦部隊で使用されていた息の長い機体でもあった。その低速さゆえに銃手が照準を誤るとまで乗員に陰口を言われたソードフィッシュであったが、マルタ島での活躍やタラント夜襲、ビスマルク追撃戦などハイライトには事欠かず、低性能ではあるがイギリス人にとって忘れられない機体である。なにしろ本機の



全長	11.07m
全幅	13.87m
出力	750hp
全備重量	4,196kg
最大速度	224km/h
武装	7.7mm機銃×2 730kg魚雷

後に制式化された複葉の艦上雷撃機アルバコアが、ソードフィッシュより先に退役した事実からも本機の高い実用性がわかる。しかしこれは海上航空力が皆無のドイツ・イタリアが相手だったからで、日米の雷撃機と比較できない機体であった。

Fairey Balacuda

## フェアリー・バラクーダ

時代遅れのイギリス海軍最後の雷撃機

全長	12.12m
全幅	14.99m
出力	820hp×2
全備重量	6,033kg
最大速度	385km/h
武装	7.7mm機銃×2 730kg魚雷

アルバコアの後継機として1939年末から生産が始められた艦上雷撃機で、さすがに複葉形式から単葉に改められているが、同時期に開発された日、米の艦上雷撃機と比べると性能は大きく劣っており、イギリスだから採用されたような機体である。生産機数は各型合わせて2,600機を数え、機数ではイギリスの艦上雷撃機として最大の生産数を誇っている。1943年1月から実戦に参加したが、すでにドイツ海軍は弱体化し活躍の場はなかった。

Bristol Blenheim

## ブリストル・ブレナム

出現当時は斬新な高速雷撃機

全長	12.97m
全幅	17.17m
出力	920hp×2
全備重量	6,120kg
最大速度	428km/h
武装	7.7mm機銃×2 爆弾600kg

当初全金属製の高速輸送機として完成した機体で、最大速度は当時の英空軍主力戦闘機を160km/h以上上回る高性能を発揮した。このため空軍は爆撃機として生産することを決め1937年から部隊配備が開始された。初期の型では機首が短く透明部も角張ったものだったが、後期生産型では機首が延長され爆撃手を収容する大きな透明部となっている。各型合わせて4,422機が生産されたが、旧式化が目立ったため1942年頃に大半は退役した。

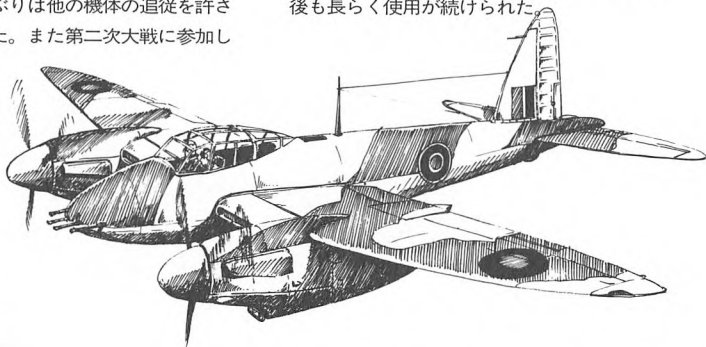
De Havilland Mosquito

# デハビランド・モスキート

真の意味での多目的軍用機の傑作

全長	12.34m
全幅	16.51m
出力	1,790hp×2
全備重量	10,433kg
最大速度	656km/h
武装	20mm機銃砲×4 7.7mm機銃×4 爆弾1,814kg

スピットファイア、ランカスターと並んでイギリスの最高傑作機と名高いモスキートは、爆撃機として開発されながら戦闘機、戦闘爆撃機、写真偵察機など多くの派生型に発展し、その幅広い活躍ぶりは他の機体の追従を許さないほどであった。また第二次大戦に参加した機体では珍しい木製というのも本機の特徴であったが、これはアルミニウム合金という貴重な戦略資源を節約するという意味でも大きなメリットがあった。



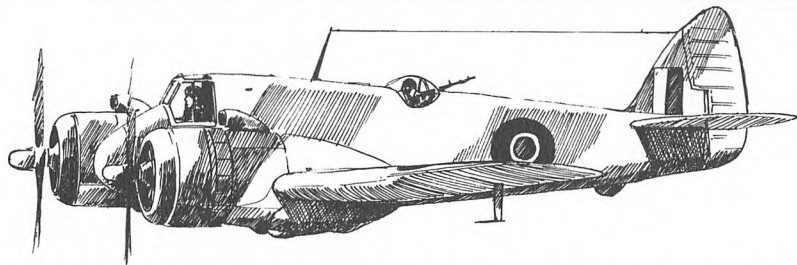
モスキートは各型合わせて7,781機が生産されたが、この中にはカナダとオーストラリアで生産された機体が含まれている。部隊への配備は1941年12月から開始され、大戦終了後も長らく使用が続けられた。

Bristol Beaufort

# ブリストル・ボーフォート

沿岸航空隊で使用された中型爆撃機

全長	13.58m
全幅	17.60m
出力	1,460hp×2
全備重量	9,640kg
最大速度	427km/h
武装	7.7mm機銃×4 爆弾680kg



1935年に要求された旧式化した沿岸航空隊の新型機開発計画により誕生したのがこのボーフォートである。試作初号機は1938年10月に初飛行したがこの前に生産型の発注が行われている。艦船に対する爆撃や雷撃に多用され、日米の水準からすればほどの高性能機ではなかったが、当時沿岸航空隊で使用して

いた機体のなかではトップクラスの性能で、1,121機が生産され、オーストラリアでも700機以上が生産された。

機体の前部とエンジンを変えたのが発展型のボーファイター。イラストはボーファイターである。



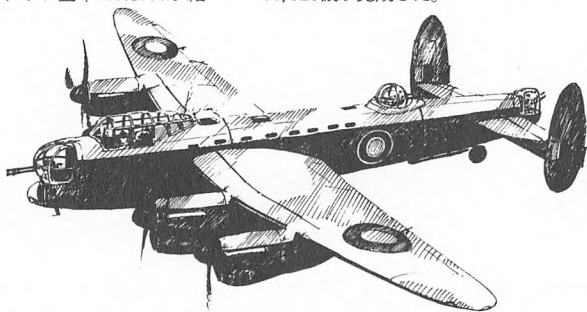
Avro Lancaster

# アブロ・ランカスター

戦略爆撃の思想を確立した爆撃機

全長	21.18m
全幅	31.10m
出力	1,460hp×4
全備重量	30,800kg
最大速度	462km/h
武装	7.7mm機銃×6 爆弾10,000kg

大出力の新型エンジンを採用して性能の向上を図ったマンチェスターが、エンジン不調で実用機とは言い難かったため、急速エンジンを低出力のもの4発に換装し併せて機体も一部改修を加えて短期間で開発されたのがこのランカスターだ。ドイツ空軍のHe177が結合エンジンに固執して最後まで問題を抱えていたのに対し、この設計変更によりランカスターはイギリスを代表する機体となったのは極めて対照的である。



1942年3月から実戦に投入され、以後ドイツの敗戦までアメリカのB-17とともに爆撃任務に多用された。また爆弾倉を改造することでダム破壊爆弾や、5t、10t爆弾などを装備可能とした。カナダでの生産数を合わせて11,020機が完成した。

Vickers Wellington

# ビッカーズ・ウェリントン

独特な構造を採用した双発爆撃機

全長	18.55m
全幅	26.25m
出力	1,500hp×2
全備重量	16,558kg
最大速度	410km/h
武装	7.7mm機銃×8 爆弾1,980kg

金属の細い桁をカゴ状に組んで、この上から羽布を張る大気圏構造と呼ばれる独特な構造を採用した機体で、生産性は悪いが反面軽量で被弾に強いというメリットを生んでいる。開発は1932年から始まり試作機は36年6月に初飛行を行った。部隊配属は1938年10月に開始され当初昼間爆撃に用いられたが、多くの機体が撃墜されたため夜間爆撃に任務を変えている。旧式化が目立った1943年秋に爆撃部隊の編成から外され沿岸航空隊に移籍された。

Handley Page Halifax

# ハンドページ・ファリハックス

多目的機として多用された4発爆撃機

全長	21.36m
全幅	30.12m
出力	1,280hp×4
全備重量	26,300kg
最大速度	426km/h
武装	7.7mm機銃×8 爆弾5,900kg

スターリングに続いて登場した4発爆撃機で、性能的にはランカスターに劣り出撃回数、爆弾投下量ともにランカスターの半分にも満たなかったが、偵察任務やグライダーの曳航母機、空挺隊母機、電子戦機などとして多目的に用いられた。当初は昼間爆撃に投入されたが性能が低いことを理由に1941年末以降は夜間爆撃任務に用いられている。生産の半ばでエンジンを換装して能力の向上が図られ再び昼間爆撃の任に就いた。6,176機を生産。

Douglas Havoc

## ダグラス・ハボック

アメリカから送られて来た援英機

全長	14.33m
全幅	18.69m
出力	1,660hp×2
全備重量	11,340kg
最大速度	489km/h
武装	7.7mm機銃×8 爆弾910kg

ダグラス社が開発した攻撃機DB-7を原型とする機体で、アメリカでA-20と名付けられたものと同規格機だが、アメリカ陸軍が本来の目的通りに攻撃機として使用したのに対し、初期にはイギリスでは多くの機体が夜間戦闘機として用いられ、1942年半ばから攻撃型の使用が本格的に始められた。この攻撃型はポストンと呼ばれており、北アフリカやヨーロッパ侵攻などで近接支援を中心として活躍している。

Daimler Armoured Car

## ダイムラー装甲車

イギリスで使用された装甲車の最高傑作

全長	3.96m
全幅	2.43m
全高	2.23m
重量	7.6t
最大速度	80km/h
武装	2ポンド砲×1 7.92mm機銃×1

大戦直前の1939年4月からBSA社で開発が始められたもので、同社の前作ダイムラー・ディンゴ装甲車の発展型でもあった。1939年末に完成した試作車では4輪駆動/4輪操行方式を採っていたが、量産車ではより機構が簡単な4輪駆動のみが用いられた。また車体後部にも操縦装置が置かれて車長が操縦して素早く後方へ走ることができたのも本車の特徴だ。砲塔はテトラーク軽戦車のものをそのまま搭載している。2,694輦が生産された。

Humber Armoured Car

## ハンバー装甲車

実用性の高い軽装甲車

全長	4.57m
全幅	2.18m
全高	2.38m
重量	7t
最大速度	72km/h
武装	15mm機銃×1 7.92mm機銃×1

ガイ装甲車の車体と砲塔を流用して開発期間の短縮を図ったもので、シャシーにはインド向けに輸出されていたKT4砲牽引車のものを用いて製作された。このため初期生産型のMk.1では15mm機銃を装備していたが、1942年初めから生産に入ったMk.3から砲塔が大型化され、続くMk.4でアメリカ製の37mm砲が搭載された。Mk.1は1941年後半から実戦に投入され、武装強化型のMk.4はノルマンディー上陸で使用が始められた。

AEC Armoured Car

## AEC装甲車

防御力の高い重装甲車

全長	5.18m
全幅	2.74m
全高	2.55m
重量	11.2t
最大速度	65km/h
武装	2ポンド砲×1 7.92mm機銃×1

バスやトラックの生産を行っていたAEC社が1941年に自社開発した新型の装甲車で、同社が生産していたマタドル牽引車のシャシーを流用し、前面の装甲厚は30mmと当時のイギリス装甲車の倍近い値であった。砲塔はバレンタイン歩兵戦車のものを参考にしており、主砲の2ポンド砲もそのまま用いられている。Mk.1に続いて6ポンド砲を装備したMk.2が生産され、最終型のMk.3は主砲は75mm砲に換装し火力も強力になった。

Light Tank Mk.4

## Mk.4軽戦車

超小型車体の軽戦車

全長	3.95m
全幅	2.06m
全高	2.22m
重量	4.86t
最大速度	56km/h
武装	12.7mm機銃×1 7.7mm機銃×1

カーデンロイドの手になる小型装軌車輛をベースとした拡大型Mk.1軽戦車から発展したのがこのMk.4軽戦車で、1936年から生産が始められ、1940年半ばの生産終了まで2,400輛近くが完成した。機銃しか装備しておらず装甲も最大で14.5mmと薄い非力な戦車であったが、当時ヨーロッパでは戦争は起きないだろうという楽観的な考えと、経済的な理由が根底にあり、この結果として大戦勃発後フランスで散々な目に遭ってしまった。

Light Tank M22Locust

## M22 ローカスト 空挺戦車

アメリカから供与された空挺戦車

全長	3.93m
全幅	2.23m
全高	1.75m
重量	7.3t
最大速度	64km/h
武装	37mm砲×1 7.62mm機銃×1

1941年2月に開発が始められた軽戦車だが、輸送機の機内、もしくは機外に搭載可能な空挺戦車として開発されたもので、1942年12月に生産1号車が完成した。当初量産車も計画時からの呼称であるT9E1と呼ばれていたが、1944年9月に制式化された際にM22と改められた。開発はしたもののアメリカでは適当な輸送機がなく、イギリス軍が1945年3月のライン渡河で使用したのが初の実戦参加であった。このため800輛の生産で終わった。

Light Tank M3Stuart

## M3 スチュアート軽 戦車

アメリカから送られた標準型軽戦車

全長	4.53m
全幅	2.24m
全高	2.52m
重量	12.7t
最大速度	58km/h
武装	37mm砲×1 7.62mm機銃×4

M2軽戦車の発展型としてヨーロッパでの戦訓を取り入れて1940年初めから開発されたもので、同年7月に制式化された。イギリスではスチュアート1として用いられている。翌41年8月には砲塔を新型化して動力旋回式としたM3A1が登場した。イギリスではスチュアート3と称された。最終型となったM3A3は車体を新設計のものに替えたものでスチュアート5と呼ばれる。さほど強力ではないが実用性が高く、北アフリカで活躍した。

Cruiser Tank Mk.1 (A9)

## 巡航戦車 Mk.1 (A9)

イギリス初の巡航戦車

全長	5.80m
全幅	2.50m
全高	2.65m
重量	13t
最大速度	40km/h
武装	2ポンド砲×1 7.92mm機銃×3

Mk.3の後継車として1934年11月から開発が始まったもので、当時開発されたばかりの2ポンド砲(40mm)を搭載して完成した。サスペンションは当時の他の戦車とは異なりスローモーション型が採用され、エンジンにはロンドン名物の2階建バスと同じものが用いられている。1936年に巡航戦車Mk.1として採用され、車体の前部のそれぞれ各1基ずつ7.92mm機銃を収容する銃塔を設けるなど斬新な設計であったが、反面実用性は低かった。

Cruiser Tank Mk.2 (A10)

## 巡航戦車 Mk.2 (A10)

巡航戦車Mk.1の装甲強化型

全長	5.59m
全幅	2.53m
全高	2.65m
重量	14.4t
最大速度	26km/h
武装	2ポンド砲×1 7.92mm機銃×2

Mk.1と時を同じくして開発されたもので、速度を犠牲にして重装甲を施し歩兵の支援を主任務としていた。Mk.1に増加装甲の形で装甲板をボルトで留め前部の銃塔を廃したものであったが、1937年7月に試作車が完成してみるとまだ装甲が十分ではなく、本格的な重装甲の歩兵戦車マチルダ1が完成間近であったため、Mk.1を支援する重巡航戦車として暫定的に生産が行われた。このため生産台数は175輛と少数生産に終わった。

Cruiser Tank Mk.5Covenater (A13Mk.3)

## 巡航戦車 Mk.5

巡航戦車Mk.3から発展した装甲強化型

全長	5.90m
全幅	2.61m
全高	2.23m
重量	18.3t
最大速度	50km/h
武装	2ポンド砲×1 7.92mm機銃×1

巡航戦車Mk.3と出来る限り部品を共用化してかつ装甲を強化した発展型として開発されたもので、全高を低めるといった要求が出されていたため砲塔は巡航戦車Mk.6クルセーダーによく似た多角形のもが新たに開発されている。完成してみると冷却能力の不足や低い機動性などが問題となり、結局1,771輛が生産されたものの一部を除いて実戦部隊には配備されず、本国で訓練用に用いられイギリス戦車最大の汚点とまで言われた。

Cruiser Tank Cromwell (A27)

## 巡航戦車 クロムウェル

大戦半ば以降の主力巡航戦車

全長	6.35m
全幅	2.91m
全高	2.49m
重量	27.9t
最大速度	52km/h
武装	6ポンド砲×1 7.92mm機銃×2

戦闘機用の強力なエンジンを搭載して巡航戦車の高速化を図る研究が1941年から行われていた。しかし車体は完成したものの搭載するエンジンが間に合わず、このためキャバリエ、セントーと従来のエンジンを搭載して暫定的に生産を行い、当初の計画どおり戦闘機用エンジンを装備してようやく完成したのがこのクロムウェルだ。ノルマンディー戦以降に実戦に参加したがドイツの戦車と比べ速度以外に低性能で期待を大きく裏切った。

Cruiser Tank Challenger (A30)

## 巡航戦車 チャレンジャー

クロムウェルから発展した17ポンド砲搭載車

全長	8.03m
全幅	2.91m
全高	2.67m
重量	33t
最大速度	52km/h
武装	17ポンド砲×1 7.92mm機銃×1

ドイツ軍との対戦の結果従来の戦車砲では対抗できないことが判明したため、クロムウェルをベースに急速開発中であった17ポンド砲を搭載する戦車の開発が必要になった。しかしそのままでは17ポンド砲の搭載は不可能なため、車体は延長され転輪も1組追加、砲塔もTOG2のものに軽量化して用いて製作された。多くの問題があったが、実戦化を急ぐため200輛を生産したが、ファイアフライの登場で部隊に配備される事なく終わっている。

Infantry Tank Matilda

# 歩兵戦車マチルダ

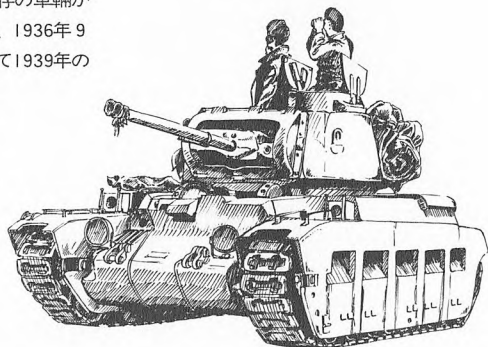
大戦当初のドイツ戦車の強敵

全長	5.61m
全幅	2.59m
全高	2.51m
重量	26.9t
最大速度	26km/h
武装	2ポンド砲×1 7.92mm機銃×1

歩兵と行動をともし、強力な装甲で前線  
を突破する歩兵戦車というカテゴリーを確立  
させた戦車。戦後の経済不況により製作費が  
抑えられたためにマチルダ I は既存の車輛か  
ら多くの部品を流用して開発され、1936年9  
月には試作車が完成し、試験を経て1939年の  
初めから部隊の配備を開始した。  
低出力のエンジンのため速度が  
遅く、武装が機銃のみというの  
は問題であったが、反面、前面  
装甲は60mmと厚くフランス戦  
で本車と戦ったドイツ軍は武装  
の強化を余儀なくされている。

続いて生産されたマチルダII  
は全てが新設計の大型戦車で、  
主砲は2ポンド砲となり、装甲

もさらに強化され本車をもって歩兵戦車の思  
想が完成したといえる。



Sherman Firefly

# シャーマン・ ファイアフライ

実戦で多用された唯一の17ポンド砲搭載車

全長	7.42m
全幅	2.67m
全高	2.74m
重量	32.7t
最大速度	40km/h
武装	17ポンド砲×1 7.62mm機銃×1

イギリスが第二次大戦で実戦化した最高の  
戦車砲である17ポンド砲を搭載する戦車のな  
かで、もっとも広く用いられたのがこのファイ  
アフライである。1944年の夏からアメリカ  
より供与されたM4 シャーマンへの17ポンド  
砲搭載が考えられ、同年末には早くも試作車  
が完成した。車体はそのまま、砲塔も一部改  
修を加えただけで17ポンド砲の搭載が可能と  
なったので、1944年の初めには部隊への配備  
を開始している。装甲が弱いのが難点だ。

Cruiser Tank Comet (A30)

# 巡航戦車 コメット

巡航戦車の決定版

全長	7.66m
全幅	3.05m
全高	2.68m
重量	35.7t
最大速度	47km/h
武装	77mm砲×1 7.92mm機銃×2

応急作のチャレンジャーとは別に、クロム  
ウェルをベースとしてより実用性の高い17ポ  
ンド砲搭載車が1943年2月から開発された。  
これがコメットで、主砲には17ポンド砲を短  
縮、軽量化した76.2mm砲が採用された。やや  
性能は低下したものの使用上はほとんど問題  
がなく、このため車体はクロムウェルの砲塔  
リング径を大きくするだけで新設計の砲塔を  
搭載することができたが、実戦化が遅れ戦闘  
をほとんど経験する事なく終戦を迎えた。



Infantry Tank Mk.3 Valentine

## 歩兵戦車Mk.3 バレンタイン

戦前にイギリスで開発された最後の戦車

全長	5.89m
全幅	2.63m
全高	2.27m
重量	17.3t
最大速度	24km/h
武装	2ポンド砲×1 7.92mm機銃×1

巡航戦車Mk.2の装甲強化型として1938年の初頭から開発されたもので、Mk.2の部品を大量に流用でき、生産設備もそのまま用いることができるというメリットがあった。しかし大型砲塔は装備できず、装甲こそ最大60mmと当時のドイツ戦車を上回っていたが戦闘即応性という点では水を開けられていた。8,275輛が生産され、1941年に北アフリカ戦線を初陣とし1944年半ばに一線を退いた。最終型のMk.9は75mm砲を装備している。

Infantry Tank Mk.4 Churchill (A22)

## 歩兵戦車 チャーチル

歩兵戦車の最終形態

全長	7.35m
全幅	3.25m
全高	2.48m
重量	38.5t
最大速度	27km/h
武装	2ポンド砲×1 7.92mm機銃×1

1940年6月から開発に着手した大柄の歩兵戦車で、同年12月に試作車が完成しダンケルクで多くの戦車を失っただけにすぐさま量産が指示されることになった。I型からII型まで多くの型が生産され、生産数は5,640輛を数える。これはイギリス戦車としてバレンタインにつぐ大量生産車であった。初期の型は非力な2ポンド砲を搭載していたが、のちに6ポンド砲や75mm砲が搭載された。しかし装甲以外ではドイツ戦車の敵ではなかった。

3in Gun Motor Carriage Wolverine

## 3インチ自走砲 ウルバリン

M10自走砲のイギリス供与車

全長	5.96m
全幅	3.04m
全高	2.89m
重量	28.375t
最大速度	48km/h
武装	75mm砲×1

M7ブリストで中戦車の自走砲化に自信をもったアメリカ陸軍が、M4シャーマンをベースとして開発した駆逐戦車がM10で、イギリスにはM4A2ベースのM10と、M4A3ベースのM10A1が1943年半ばから供与が始まり、あわせて1,648輛が送られた。ウルバリンはこのM10駆逐戦車に与えられたイギリス名称である。75mmの主砲はM4シャーマンと同じだが、避弾径始に優れた車体で防御力はM4を上回っていた。

17Pdr Self-Propelled Gun Achilles

## 17ポンド自走砲 アキリーズ

17ポンド砲を搭載したM10駆逐戦車

全長	7.27m
全幅	3.04m
全高	2.89m
重量	28.375t
最大速度	48km/h
武装	17ポンド砲×1

アメリカより1,648輛が供与されたM10は、早速自走砲部隊に配属されてイタリア戦から実戦に投入された。イギリスで使用していた戦車よりはるかに高性能ではあったが、搭載する主砲がやや力不足のためイギリス対戦車砲の切り札である17ポンド砲をM10に搭載することが決まった。これがアキリーズで、砲塔自体が大きいため17ポンド砲の搭載はなんら問題なく、供与車のほとんどがこの仕様で改造された大きな戦果を記録している。

Humber Anti-Aircraft Armoured Car

## ハンバー 対空装甲車

4連装対空機関銃を搭載したハンバー装甲車

全長	4.57m
全幅	2.18m
全高	2.50m
重量	6.05t
最大速度	75km/h
武装	7.92mm機銃×4

ハンバー装甲車の派生型の一つとして1942年の末から開発されたもので、対空砲連隊や装甲偵察連隊が装備する対空型装甲車の要求に応えたものだ。車体はハンバーMk.1が用いられ、砲塔が外された跡の八角形の台座を新設してストサート&ピット社の手になる砲塔を搭載している。砲塔には7.92mmベサ機銃が4挺並列に収容されていた。生産台数などは不明だが、ほとんどの車輛は機甲連隊に配備された司令部付き対空中隊に配備された。

Crusader Anti-Aircraft Armoured Car

## クルセーダー 対空自走砲

クルセーダーを母体とした対空自走砲

全長	5.90m
全幅	2.60m
武装	40mm機関砲×1

巡航戦車のなかでも最も大量に生産されたクルセーダーをベースとして製作された対空戦車で、搭載する武装によって3つの型に分類される。ポフォース40mm機関砲を大きな防盾とともに装備したMk.1、エリコン製20mm連装機関砲を収容した小型砲塔を搭載したMk.2、Mk.2から無線装備を外したのがある。いずれも生産されたクルセーダーから改造されたもので、訓練用に改造された3連装エリコン機銃装備車もあった。

25Pdr Self-Propelled Gun Bishop

## 25ポンド自走砲 ビショップ

バレンタインから発展した25ポンド自走砲

全長	5.53m
全幅	2.62m
全高	2.76m
重量	17.5t
最大速度	24km/h
武装	25ポンド砲×1 7.62mm機銃×1

北アフリカ戦線でドイツ軍が有効に自走砲を運用しているのを見たイギリス軍が、急速バレンタイン巡航戦車をベースに開発、実戦化した自走砲で、1941年11月から生産を開始し100輦が完成した。当初は300輦発注されていたがアメリカよりプリーストが供与されたため残りはキャンセルされている。一見砲塔に見えるが固定式の戦闘室を車体上面に溶接し、25ポンド砲を搭載したもので実用性は高かったが射角が4度しかないのが欠点だった。

M7 Howitzer Motor Carriage Priest

## M7プリースト 自走砲

アメリカより供与された支援自走砲

全長	6.02m
全幅	2.88m
全高	2.95m
重量	22.970t
最大速度	39km/h
武装	105mm榴弾砲×1 12.7mm機銃×1

アメリカ陸軍が砲兵部隊の自走砲化を図って開発されたM7/105mm自走砲は、イギリスにも供与され1942年9月、北アフリカのエルアラメインをめぐる戦闘に投入されたが、これはM7初の実戦参加でもあった。独特の形状の機銃マウントが教会の説教台に似ているためイギリスではプリーストというニックネームがつけられた。M3ベースのM7、M4A3ベースのM7B1が供与され、ノルマンディー戦以後は兵員輸送車として使用された。

25Pdr Self-Propelled Gun

## 25ポンド自走砲 セクストン

イギリス発カナダ製自走砲

全長	6.12m
全幅	2.72m
全高	2.44m
重量	25.9t
最大速度	40km/h
武装	25ポンド砲×1 7.62mm機銃×2

イギリスの開発要求を受けて同盟国のカナダの手で開発された25ポンド砲搭載の自走砲で、補給の面で有利な25ポンド砲を搭載することが目的であった。当初はアメリカに開発を依頼したものの、アメリカの反対によりカナダで開発することになったもので、1942年の末に試作車が完成した。車体はM7同様にM3を用いたが、オープントップの戦闘室の形状は若干変化がみられる。ノルマンディー戦以後M7に代わって砲兵隊の主力となった。

2Pdr Anti-Tank Gun

## 2ポンド 対戦車砲

イギリスで最も小型の対戦車砲

口径	40mm
砲身長	2,082cm
重量	798kg
初速	795km/秒
最大射程	7,280m

1936年から開発が始められた小型の対戦車砲で、前線の歩兵が簡単に操作できることが要求されており、このため必然的に小型化せざるを得なかった。部隊への配備は1938年から開始され、フランス戦で初めて砲火を交えたがまったくドイツ戦車に対して効果的でないことが判明し、さらにフランスに送られた2ポンド対戦車砲の大半にあたる500門以上を放棄せざるを得なくなされた。北アフリカでも使用されたが、1942年に夏に退役した。

6Pdr Anti-Tank Gun

## 6ポンド 対戦車砲

イギリスの標準対戦車砲

口径	57mm
砲身長	2,564cm
重量	1,145kg
初速	808m/秒
最大射程	5,000m

非力だった2ポンド対戦車砲の後継として開発されたもので、ダンケルク撤退の際に多くの2ポンド対戦車砲をフランスに遺棄せざるを得なかったため、1940年6月にまず400門が発注されたが、当時まだ2ポンド対戦車砲の生産に追われており、6ポンド対戦車砲が生産に入ったのは1941年11月からであった。

しかし翌42年5月には月産1,500門以上となり、夏までに2ポンド対戦車砲と完全に更新して主力対戦車砲となった。

17Pdr Anti-Tank Gun

## 17ポンド 対戦車砲

イギリス対戦車砲の最高傑作

口径	76.2mm
砲身長	4,581mm
重量	2,099kg
初速	863m/秒
最大射程	9,100m

17ポンド対戦車砲の開発は1940年11月に、開発されたばかりの6ポンド対戦車砲の口径を検討した際に産声を上げた。基礎研究を経て1941年7月に試作砲4門が発注され、1944年4月から実戦部隊に対する引き渡しを開始した。これに先立ち応急型として25ポンド砲の脚と防盾をそのまま用いたものが製作され、1942年末から北アフリカで実戦に投入されている。この砲の登場によりようやく一撃でドイツ戦車を破壊することが可能になった。

40mmBofors Anti-Aircraft Gun

## 40mmボフォース 対空機関砲

イギリス軍の主力対空機関砲

口径	40mm
砲身長	2,990mm
重量	1,983kg
初速	810m/秒
最大射程	9,830m

スウェーデンの火器メーカーであるボフォース社が開発した対空機関砲で、イギリスは1937年4月に試験的に100門と弾薬50万発を購入し使用してみた結果、非常に優秀なことが判明したので、ライセンス権を取得しイギリスに加えカナダでも生産を行った。速い発射速度と大きな弾片効果は中口径対空機関砲として最適で、多くの派生型が生産され、信頼性、使い勝手ともに連合軍の対空機関砲の傑作である。

5in20cwt Anti-Aircraft Gun

## 3インチ20cwt 高射砲

第一次大戦の遺物高射砲

口径	76.2mm
砲身長	3,556mm
重量	2,724kg
初速	600m/秒
最大射程	11,284m

第一次大戦の前にイギリス海軍の艦船搭載用高射砲として開発されたもので、1914年3月から配備が始まっている。第一次大戦終了後は標準高射砲として長く使用が続けられ、より強力な高射砲として開発された3.7インチ高射砲の生産体制が思うように整わなかったため、第二次大戦が勃発してしばらくしても第一線部隊で用いられた。しかし旧式化は明らかであり、1940年末までに第一線部隊から退いたが、砲身は他の目的に使用された。

25Pdr Field Gun

## 25ポンド 野砲

大戦全期を通じて活躍した中口径野砲

口径	88mm
砲身長	2,711cm
重量	1,802kg
初速	510m/秒
最大射程	12,194m

第一次大戦後、歩兵支援のための野砲にはどの口径が最適かという検討が度々行われ、様々な案が提案されたが、その回答として1938年に制式化されたのがこの25ポンド野砲である。前作の18ポンド砲の発展型として開発されたもので、外見こそ古めかしいが信頼性は高く、また手頃なサイズも手伝って第二次大戦終了後の1946年2月まで使用が続けられた。自走砲に搭載されたものもあり、全戦線で活躍している。

5.5in Medium Gun

## 5.5インチ 野砲

新世代中口径野砲

口径	140mm
砲身長	4,358mm
重量	6,195kg
初速	503m/秒
最大射程	16,471m

1930年代の初めから、旧式化した6インチ野砲と榴弾砲の後継に関する検討が行われたが、予算不足もあって開発がスタートしたのは1939年1月からであった。当初口径は5インチが考えられたが、結局より射程が長く破壊力の大きい5.5インチが選ばれた。しかし当時ドイツの台頭に対処して様々な新型兵器を開発しなければならなかったために、部隊配備は遅れ、1942年5月となってしまった。以後大戦終了まで全戦線で使用された。

Battleship "King George V" class

## 戦艦キング・ジョージV世級

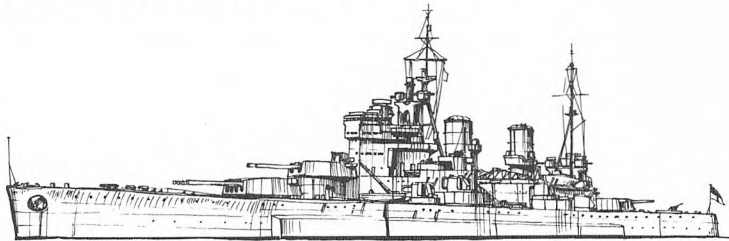
ビスマルク級に対抗して建造された新戦艦

全長	227.1m
全幅	31.4m
基準排水量	36,727t
最大速度	28kn
武装	36cm砲×10 13.3cm砲×16

1936年から37年で5隻の建造が計画された最新鋭戦艦。ロンドン条約の制限内で作られたため36cm主砲、排水量35,000tの戦艦となり、制限にとらわれなかった日米独の新戦艦に比べると明らかに見劣りするものであった。

2番艦プリンス・オブ・ウェールズはビスマルク追撃戦後、巡洋戦艦レパルスとともに極東に派遣され、英東洋艦隊旗艦となる。太

平洋戦争勃発とほぼ同時に日本海軍航空隊の攻撃によりマレー沖で撃沈され、航空時代の幕開けを印象づけてしまった。この報を受けた英首相チャーチルは「その時一人でいたことを感謝している。戦争中、これ以上のショックは無かった」と記している。



Battlecruiser "Repulse" class

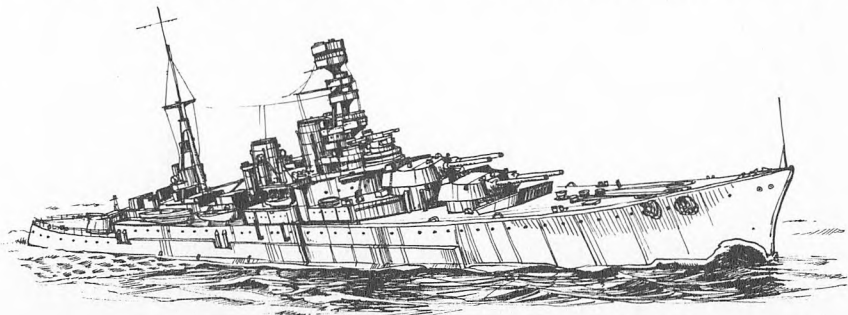
## 巡洋戦艦レパルス

第一次大戦から現役の老兵

全長	242m
全幅	27.5m
基準排水量	27,650t
最大速度	30kn
武装	38cm砲×6 10.2cm砲×17 7.6cm砲×2 53.3cm魚雷発射管×2

レパルスは、1番艦レナウンとともに第一次大戦中の1916年に竣工した巡洋戦艦である。攻撃力、速力は水準を越えていたが、巡洋戦艦だけあって、防御力は弱い。同型艦のレナウンは1936年から3年かけて大改装されて艦影を一新したものになっていたが、レパ

ルスはほとんど改装されずに第二次大戦に突入している。当初は大西洋、地中海で任務に就いていたが、極東情勢悪化のためプリンス・オブ・ウェールズとともにシンガポールに派遣された。開戦後のマレー沖海戦で爆弾1発、魚雷5本を受けて沈没している。





# イギリス軍の歩兵部隊

粘りが命のロイヤルアーミー

ヨーロッパ各国に蔓延した第一次大戦以後の経済不況から、新兵器の開発に予算を割くことができなかつたのは戦勝国のイギリスも同じで、さらに新しい時代を予測することができなかつたことも手伝って、歩兵の装備や編成も前大戦からほとんど進歩が見られなかつた。

歩兵部隊の主装備は相変わらずポルトアクションのSMEL銃で、自動小銃はついに生産

されなかつた。ほかにも他国に比べて特に優れたという兵器も見られない。

ただ1941年7月生産開始のSTEN短機関銃は有名である。採用からわずか1カ月程度で量産体制に入ったこの銃は、ピーク時には月に20万挺が生産された。軽量で、構造は簡単、コストも安く、英軍だけでなく、ドイツの占領地域で地下抵抗をするパルチザン等に供給された。

どうしても

## 勝ちたくて...

次のシナリオを睨んで行動せよ!

キャンペーンモードでは10以上のシナリオをクリアしていく。そしてシナリオごとに勝利条件が異なる。どのようにそのシナリオを終わらせるかによって展開が変わってくる。さて、キミは現在プレイしているシナリオで要求される勝利条件をキチッと頭にいれてプレイしているだろうか? 敗北さえしなければ次のシナリオへいけるものもあれば、決定的な勝利によって戦争を終結させるためには、無理をしても大勝利を収めなければならないシナリオがある。

ここで考えておくことは、無条件で次へいけるシナリオでの戦い方である。この場合は余裕があるので今後のシナリオで有利に闘えるような条件を今のうち整えること

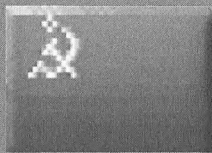
大日本帝国	
天候	晴 累積度 通常
現在	41年12月13日
終了	41年12月15日
オアフ島南方にて敵艦隊発見!	
敵艦隊は空母を含むものである!	

攻略が簡単な真珠湾も練習と考えて制限ターンまでプレイするのもデ。

を考えよう。資金に余裕があるなら、高価な航空機や艦艇ユニットを生産したり、手持ちのユニットを進化・改良させておくことも有効なデだ。

いま闘っているマップの1つ1つの戦闘のコマンドやその結果が、シナリオ分岐という戦略展開まで影響を及ぼすのだ。

# ソビエト連邦



正式にソビエト連邦軍となったのは戦後であり、それまでの正規軍は赤軍と呼ぶ。1918年、ボルシェビキ革命防衛のために設立されたのが発祥であり、実体はロシア帝国軍が再編成され、ときに将校すら旧帝国軍人が登用されていた。訓練と知識が不足している将校、文盲率が高く状況判断に乏しい兵卒、ずさんな補給体制、制御されていない情報・連絡・指揮系統、これが戦前に諸国から恐れられていた赤軍の特徴であり、量こそ多いが怖れるに足らずと一般的に思われていた。大戦間には、戦車の機動打撃力による縦深突破戦術を提唱したトハチェフスキー元帥のような優秀な指導者も現れたが、1936年に吹き荒れた粛清により、大部分が軍中樞を追われ、大戦開始時、赤軍はただ図体のみ大きい“烏合の衆”化していたのである。

独ソ戦に先立つソ連＝フィンランド戦争でその脆弱さは露呈された。独ソ戦開始後、ドイツ軍がモスクワ前面で停止するまで、惨敗を続け、捕虜150万、失った戦車は5,000輜に及んでいる。この敗北が決定的にならなかったのは、ちょうど大がかりな装備改編の時期で、失った車輜はほとんど旧式であったこと、極東に大きな予備軍を擁していたこと、あまりに戦場が広く主力部隊の殲滅を狙ったドイツ軍がその位置をはかりかねたこと等である。また戦争はオンチのスターリンも、戦時経済手腕は抜群で、後背地のウラル以東に生産工場を移転し、兵器生産に支障を来さなかったこと、アメリカからの物資の援助から、深刻なダメージを幾度受けても、その都度再起を果たしたこともある。

1942年は双方ともに攻勢に出た側が失敗し、スターリングラードでの包囲戦で終えた。1943年夏季のクルスク戦でドイツ軍を撃退してから、戦いを終始リードし、多大な損害を払いながらもベルリンへ到達、東ヨーロッパ諸国を解放し、戦後、衛星国とした。

海軍は、ドイツ海軍よりも若干優勢な数をそろえていたが、指揮系統等、問題にならず、緒戦でドイツ空軍の攻撃で10分の1にまで縮小した。以後、終戦まで陸上軍の一部として扱われ、包囲を受けたレニングラードでは水兵は陸に上がり歩兵として戦っている。唯一活発な活動をみせた潜水艦隊も大きな戦果を得ることはなかった。

空軍は独立した軍組織ではなく、陸軍と海軍の管轄下の航空隊であった。開戦当初、2万機近い数を有していたが、第一線に配備された機体は、緒戦において地上破壊された。が、それゆえ、パイロットの損失は少なく巻き返しが可能だった。以後、4倍以上の優勢を保った空軍は、ドイツと同じく地上支援任務が主要だったが、最後は戦略空軍を創設、ベルリンを空襲成功し底力を見せつけた。

第二次大戦中ソ連は莫大な人的損害を出した。その数は兵員600万人を含む2,000万人と一般では言われている。

Yakovlev Yak-1/7/9 Fighter

# ヤコブレフ Yak-1、7、9

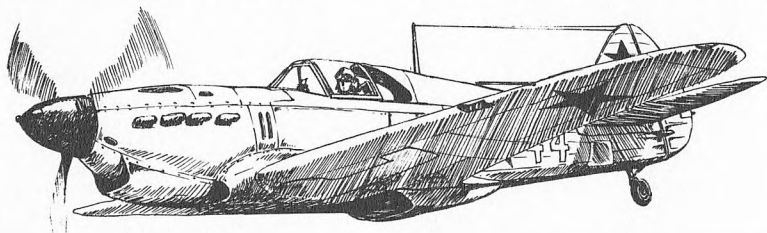
外人部隊も使用した主力戦闘機

全長	8.55m
全幅	10.03m
出力	1,360hp
全備重量	3,115kg
最大速度	600km/h
武装	20mm機関砲×1 12.7mm機銃×1

LaGG-3と同じ1938年の計画によって開発された戦闘機で、1940年夏に初飛行して Yak-1 として正式化された。1941年6月に生産が開始され、翌年から戦線に投入されている。Yak-1を初めとするYakシリーズは、操縦性に優れ、高速だった。そのため主力機として最多の約30,000機以上が生産されている。最初のYak-1のエンジンを強化した

型がYak-7Bで、この他には複座型 (Yak-1U, Yak-7U) もあった。

続いて、Yak-7の機体を再設計して航続距離を延ばした型が作られ、Yak-9と呼ばれた。1942年8月から前線に投入されたYak-9は、戦後の1950年代まで生産されている。Yak-9は、フランス人義勇部隊ノルマンディ・ニューメンが使用した機体としても有名だ。



Polikarpov I-15 Fighter

# ポリカルポフ I-15

世界最速の複葉機

全長	6.35m
全幅	10.2m
出力	750hp
全備重量	1,735kg
最大速度	375km/h
武装	7.62mm機銃×4

ポリカルポフが1933年に試作したTsKB3が採用されてI-15となり、1933年から生産が開始されている。木製と金属の混合構造の過渡期的な機体だった。スペインに550機以上が送られている。ノモンハン事変ではI-16とともに九七式戦闘機と戦っている。脚を引き込み式とした改良型のI-153は世界最速の複葉機だった。独ソ戦初期も使用されたが、以後は旧式化して第一線を退いている。改良型のI-153を含め約6,000機が生産された。

Polikarpov I-16 Fighter

# ポリカルポフ I-16

世界最初の引き込み脚採用の戦闘機

全長	6.07m
全幅	9m
出力	775hp
全備重量	2,054kg
最大速度	464km/h
武装	7.62mm機銃×4

I-16の試作機TsKB12が飛行した1933年は依然として複葉機、固定脚が主流で、単葉で引き込み脚を採用したこの機体は、極めて近代的な形態の航空機だった。直ちに量産が開始され、第二次大戦開戦までソ連空軍の主力として使用された。スペインにもI-15と共に送られ、ノモンハンでも九七戦と戦火を交えている。独ソ戦開始時には旧式化していたが、地上攻撃等で1943年頃まで使用された。様々なサブタイプがあり約20,000機生産された。

Lavochkin LaGG-3 Fighter

## ラボーチキン LaGG-3

全木製戦闘機

全長	8.86m
全幅	9.8m
出力	1,210hp
全備重量	3,190kg
最大速度	560km/h
武装	20mm機関砲×1 7.62mm機銃×3 爆弾200kg

1938年の計画にしたがってヤコブレフから離れたラボーチキンが設計試作した機体で、試作機I-22は1939年に飛行している。機体はほとんどが木製で、構造が簡単になっていた。試験の後量産が指示され、1940年に導入された命法法にのってLaGG-1と呼ばれた。生産に入る前に細部が改良されてLaGG-3となり、地上支援や低空での迎撃戦闘に投入されている。以後1942年夏のLa-5登場まで主力として活躍した。

MiG-3/7Fighter

## ミコヤン・グレビッチ MiG-3/7

スターリン賞を獲った高速戦闘機

全長	8.15m
全幅	10.28m
出力	1,350hp
全備重量	3,356kg
最大速度	655km/h
武装	12.7mm機銃×1 7.62mm機銃×2

ミコヤン設計局製作での最初の戦闘機MiG-1は、特に速度性能が優れ、2,100機が生産されたが操縦性に難があり、改良型のMiG-3に取って代わられた。MiG-3は、5,000m前後で最もよい性能を発揮したが、低高度では操縦性が悪くなり、ドイツ戦闘機に太刀打ちできなかった。1941年末から戦線に投入されたが、しだいにYak-1に戦闘機としての任務を譲った。MiG-7はエンジンを空冷のM-82-Aに換装したもので、少数が作られた。

Tupolev SB-2 Bomber

## ツポレフ SB-2

ソ連最初の近代的高速爆撃機

全長	12.27m
全幅	20.33m
出力	830hp×2
全備重量	5,725kg
最大速度	411km/h
武装	7.62mm機銃×4 爆弾600kg

ツポレフSB-2は、完成当時は高速の爆撃機だった。1933年に試作が開始され、翌年末に試作機が完成、以後ソ連空軍の主力中型爆撃機として使用された。ソ連の他、スペインや中国でも使用されている。1941年に生産が終了するまで約6,900機が生産されている。独ソ戦当時は旧式化しすぐに第一線から退いている。バリエーションには、急降下爆撃が可能なように改修したSB-RK型やエンジン強化型のSB-2bisなどがある。

Ilyushin Il-10 Bomber

## イリュージン Il-10

シュトルモビクの開発型

全長	11.3m
全幅	13.54m
出力	2,000hp
全備重量	6,550kg
最大速度	500km/h
武装	20mm機関砲×3 7.62mm機銃×2 爆弾1,000kg

Il-2の実戦部隊での経験を基に、1944年、Il-2のエンジンを強化し、主翼、尾翼の構造を全面的に改めて空力的に洗練させた改修機が完成した。この改修機は、試験の結果も良好だったためIl-10として採用されて生産に入った。設計者イリュージンはこの機体によってスターリン賞を獲得している。1944年末から終戦まで使用された。戦後もIl-2と共に共産圏で使用され、朝鮮戦争にも登場している。生産は1950年まで続けられた。



Ilyushin Il-2 Bomber

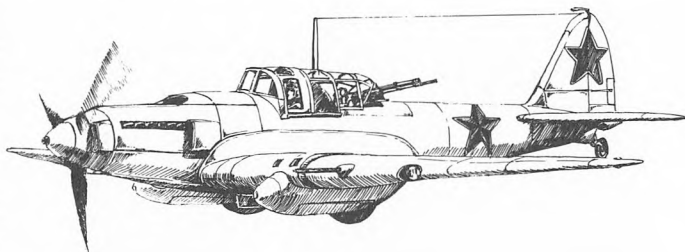
# イリュージンII-2

## 空飛ぶ戦車

1938年、イリュージン設計局は地上攻撃任務に就く単発爆撃機の試作を開始した。最初に作られたTsKB55は安定性や重量増加などの問題が合ったため改良されてTsKB57となり、これが採用されてII-2となった。登場は1941年夏からで、ラジエーター以外ほとんどの部分に装甲が施され、小口径の機銃ではダメージを与えることはできなかった。最初の型は単座型だったが、1942年には複座に改良され、エンジン

全長	11.6m
全幅	14.55m
出力	1,770hp
全備重量	6,373kg
最大速度	404km/h
武装	23mm機銃×2 7.62mm機銃×3 爆弾600kg

と武装が強化されてII-2M3となり最も多く生産された。ドイツ軍からは「黒い死」とあだ名されている。終戦まで各型合計で36,000機以上が生産され、戦後も中国を初めとした共産圏で使用され、朝鮮戦争でも地上攻撃に投入されている。



Tupolev TB-3 Bomber

# ツポレフ TB-3

## 降下部隊で使用された巨人機

全長	25.54m
全幅	40.88m
出力	715hp×4
全備重量	17,400kg
最大速度	288km/h
武装	7.62mm機銃×6 爆弾2,200kg

1920年代末に開発が始まった巨人機。しかし実用化には時間がかかり、大型機の設計に定評があったツポレフが設計をまとめ、1935年によく実用化されている。爆弾搭載量が多く、この後も細かな改修を受けて運用され、第二次大戦勃発時まで使われていた。第二次大戦中には旧式化が著しかったので空挺部隊などの輸送任務がメインとなっていた。バリエーションとして戦闘機を5機載せた親子機や戦車を搭載した型もあった。

Petlyakov Pe-8 Bomber

# ペトリアコフ Pe-8

## ベルリンを爆撃した唯一のソ連戦略爆撃機

全長	22.49m
全幅	39.94m
出力	1,350hp×4
全備重量	33,325kg
最大速度	438km/h
武装	20mm機銃×2 7.62mm機銃×4 爆弾4,000kg

1934年に高度8,000mで最大速度を達成できる長距離爆撃機として、ツポレフ設計局開発が始まった。ペトリアコフが設計を担当し、1936年に初飛行した試作機は、胴体内部に過給機専用のエンジンを積んでいた。後に専用エンジンは廃止され、1939年から量産された。この際ペトリアコフPe-8と命名され、1941年にはベルリンを爆撃したが、エンジン問題が解決せず、設計者ペトリアコフの事故死などが重なって1944年に生産は中止された。



BA-6 Armoured Car

## BA-6 装甲車

ソ連軍主力重装甲車

全長	4.65m
全幅	2.1m
全高	2.2m
重量	5.1t
最大速度	55km/h
武装	45mm砲×1 12.7mm機銃×2

ソ連の装甲車は伝統的に軽重の2種類が存在し、軽装甲車は機関銃を装備するのみであったが、重装甲車は37mm~45mm砲を搭載していた。重装甲車に分類されるBA-6は、GAZ-AAAのシャーシを利用し、T-26M1933の砲塔を搭載して作られたBA-3の改良型である。数種のバリエーションがあり、鉄道用のスチール転輪を装着できた。この後改良されてBA-9、BA-10となった。基本的に装甲車の開発、製造はイゾルスキー工場が担当。

T-26M33 / M37 Light Infantry Tank

## T-26 軽戦車

イギリス生まれの軽戦車

全長	4.88m
全幅	3.41m
全高	2.41m
重量	9.4t
最大速度	28km/h
武装	45mm砲×1 7.62mm機銃×1

ビッカース6tE型戦車をライセンスしたのがT-26で、最初の型は機銃1丁を搭載した小型砲塔を2個持った多砲塔戦車だった。続いて右側の砲塔に37mm砲を搭載したTU型、火炎放射型OT-26が生産されている。1932年になると新型の45mm砲搭載の砲塔が採用され、これをT-26に載せた型が生産された。これがM33型で、続いて改良型のM37型が生産されている。T-26は1941年までに約12,000輛が生産されている。

Kharkov Locomotive Works BT-5 Tank

## BT-5 戦車

アメリカ生まれソ連育ちの草駄入野郎

全長	5.5m
全幅	2.29m
全高	2.25m
重量	11.5t
最大速度	52km/h(キャタピラ) 72km/h(装輪)
武装	45mm砲×1 7.62mm機銃×1

快速戦車という意味のBTを形式名とするシリーズは、1931年から32年にまとめられた戦車計画による、追撃・駆逐戦車として開発された。BT-5は、アメリカのクリスティ戦車を基に生産されたBT-2戦車に、T-26M33同様の新型45mm砲塔を搭載した型。クリスティ戦車同様キャタピラを外して装輪走行が可能であった。1933年から34年に1,884輛生産された。後期型は車体後部が改良されている。スペイン内戦やノモンハン事変に投入された。

Kharkov Locomotive Works BT-7 Tank

## BT-7 戦車

接合、搭載砲、エンジン、改良のバレード

全長	5.66m
全幅	2.29m
全高	2.42m
重量	13.8t
最大速度	50km/h(キャタピラ) 86km/h(装輪)
武装	45mm砲×1 7.62mm機銃×1

BT-5戦車の車体を、それまでのリベット接合から溶接接合にしたもの。これに加え、エンジンも新型に換装、車体は大幅に変更された。後に砲塔も改良され(M38型)、改良型も含め4,727輛が生産された。また、近接支援用に76.2mm砲を搭載した砲塔をもったBT-7Aも作られた。A型は154輛生産され、ノモンハン戦に投入されている。続いてエンジンをディーゼルに換装して航続距離を向上したBT-7Mが39年から41年まで706輛生産された。

Kirov/Chelyabinsk Tractor Factory KV-I Heavy Tank

## KV-I 重戦車

独ソ戦初期、ドイツ軍を恐慌に陥れた重戦車

全長	6.75m
全幅	3.32m
全高	2.71m
重量	45t
最大速度	35km/h
武装	76.2mm砲×1 7.62mm機銃×4

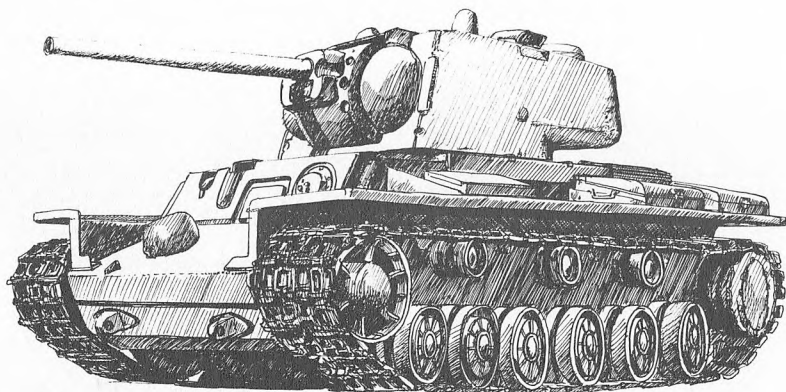
KV-Iは、T-35多砲塔重戦車の後継として開発された多砲塔SMK戦車をベースに、単一の主砲と1個の砲塔を持った重装甲の重戦車として開発された。

T-34と同じ30,5口径76.2mm砲を持ち、最大装甲厚75mm、サスペンションはトーションバー方式である。T-34とは異なって上部転輪を持っていた。この新重戦車は、時の国防相グリメント・ヴォロシロフにちなんでKV-Iと名付けられた。

KV-Iは、最大装甲100mmのB型、A型に増加装甲を取り付けたE型と生産され、1942年には最大装甲130mmのC型が生産された。

続いて、度重なる改良で重量増加が激しくなったため、最大装甲を82mmに減らしたS型が生産された。この車体に85mm主砲の新砲塔を載せたKV-85が作られたが少数に止まり、JS戦車に後継された。KVシリーズは1943年末までに約4,300輛生産された。

独ソ戦初期において、この戦車を撃破できる戦車砲、対戦車砲をドイツ軍は有してなく、諸処でパニックに陥らせたが各個撃破されていた。開戦時に500輛余りが配備されていた。集中的効果的な運用が始めからなされたいたら、もっと早い段階でドイツの進撃は阻止されていたかも知れない。



Oordzonkidzi Factory and Others T-60 Light Tank

## T-60 軽戦車

水陸両用戦車転用のその場しのぎ軽戦車

全長	4.1m
全幅	2.3m
全高	1.74m
重量	5.8t
最大速度	44km/h
武装	12.7mm機銃×1 7.62mm機銃×1

1939年に採用された水陸両用戦車T-40と同時に作られた浮遊装置なしの試作型が、独ソ戦の勃発による戦車の損害を埋めるために採用されて大量生産された。これがT-60M40で、コストが安かったため、武装、装甲が

貧弱で生産性が悪かったT-40に替わって生産はすべてT-60に切り替えられた。転輪、エンジン、装甲を強化した型がM42で、装甲は最大35mmまで強化された。T-60戦車は全部で6,022輛生産された。

Komintern Factory T-34 Medium Tank

# T-34/76、85中戦車

祖国を救った第二次大戦最良戦車

全長	6.88m
全幅	3m
全高	2.45m
重量	28.5t
最大速度	55km/h
武装	76.2mm砲×1 7.62mm機銃×2

1937年から始まった新戦車開発の中でA-20とA-32の2種類の試作車が完成した。A-20はこれまでのBT-7Mの改良型といった内容だったのに対し、A-32の方は設計を担当したコーシキンの独自の仕様によるもので、これまでの騎兵戦車（BT戦車）、歩兵戦車（T-26）、中戦車（T-28）のすべての性格を持つ戦車だった。評価試験後、A-32が採用されてT-32となったが、ソ連・フィンランド戦争の戦訓を受けて、さらにこれを改良して装甲を強化したのがT-34である。

避弾性を高めるため車体、砲塔ともに傾斜装甲で覆われ、ディーゼルエンジンの搭載で航続力も高かった。1940年9月から生産が開始された1940年型(A型)は、重量26.5t、最大装甲45mm、最大速度55km/hだった。続いて、A型の30.5口径の76.2mm砲を長砲身の41.2口径の76.2mm砲に換装したものが生産され、1941年型(B型)と呼ばれた。T-34は独立開戦までにA、B型合計1,225輛生産された。

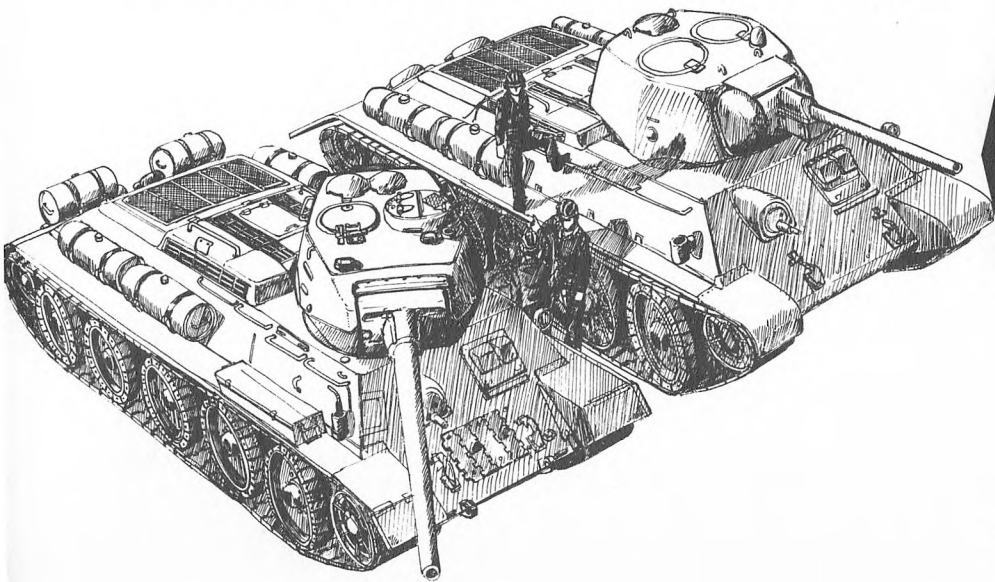
独ソが始まるとドイツの3号、4号戦車をはるかにしのぐ性能のT-34はドイツ軍に激

しいショックを与え、後にティーガー、パンター戦車を生み出すことになる。

やがて1941年型の構造を簡易化し生産性を向上した1942年型が生産され、12,553輛が生産されている。続いて狭かった砲塔を大型化し居住性を向上した型が1943年から登場し、1943年型(C型)と呼ばれ、六面体の鑄造砲塔で識別は容易である。T-34は個々の性能は優れていたが、砲塔を2人で操作するものだったため発射速度が遅く、また無線なども装備していなかったので連携が悪く各個に撃破されることが多かった。

1943年末から登場したのが、T-34に新型の54.6口径85mm砲搭載の3人用砲塔を搭載した型で、T-34/85と呼ばれた。これは当時登場し始めたティーガー、パンター戦車に対抗しうる車輛であった。T-34/85は戦後まで主力として使用され、戦後も長く各国の主力として使用されている。生産数は29,430輛。

この戦車がなかったら、世界史が変わったとさえ言われる。歴史はそんな単純なものでもあるまいが、総合ベスト1兵器ではあろう。



Kirovskiy Factory in Tankograd JS-II Heavy Tank

## JS-II 重戦車

独裁者の名を持つ重戦車

1943年、レニングラードの戦いで捕獲されたドイツ軍のティーガーI戦車の調査結果から、対抗できる新型重戦車が開発されることになった。まず85mm砲搭載の砲塔を持ち、試作車KV-13の車体を基に改良された鑄造車体のJS-II (JS-85) が作られたが、パンター戦車の登場でさらに強力な火力が求められ、46口径122mm砲を搭載した型が生産され、JS-IIとなった。最大装甲は160mmを誇る。1944年2月から実戦



に投入され、ドイツの動物戦車キラー（アーマルクラー）として活躍した。続いてJS-IIの車体前面の形を変更し、より被弾経始の向上したJS-IImが登場、終戦まで約3,500輛生産された。各戦車軍団の独立重戦車連隊に配備されていた。

全長	9.90m
全幅	3.09m
全高	2.73m
重量	46t
最大速度	37km/h
武装	122mm砲×1 12.7mm機銃×1 7.62mm機銃×2

Kirovskiy Factory in Tankograd JS-III Heavy Tank

## JS-III 重戦車

丸い低い硬い砲型重戦車

全長	9.73m
全幅	3.07m
全高	2.44m
重量	45.8t
最大速度	37km/h
武装	122mm砲×1 12.7mm機銃×1 7.62mm機銃×1

JS-IImの生産中、JS-IImをさらに改良した戦車が試作されている。部品の多くをJS-IIと共通とし、装甲板を溶接してできた車体に新型の鑄造砲塔を持っており、極めて避弾経始に優れていた。1944年11月に完成した試作車は、直ちに生産が決定して、JS-IIIとして採用された。終戦まで約350輛生産され、第二次大戦末期に前線に投入された。戦後のパレードでは連合軍首脳の度肝を抜き、コンカラードなどの重戦車を試作させることになる。

Kirovskiy Factory in Tankograd KV-85 Heavy Tank

## KV-85 重戦車

JS-I 登場までのつなぎ砲

全長	8.6m
全幅	3.25m
全高	2.9m
重量	46t
最大速度	40km/h
武装	85mm砲×1 7.62mm機銃×3

KV-Sの近代化試作車KV-13の試験結果を基に作られた新重戦車JS-Iは85mm砲を装備、機動性はKV-Sのみでただちに採用が決定した。しかし砲塔、車体ともに新設計で生産準備に時間がかかり、それまでのつなぎとしてJS-I用の85mm砲塔を、KV-Sの車体に搭載した暫定版ともいえる戦車を開発、投入した。もともとJS-I登場までのつなぎだったため、1943年9月から10月までに130輛生産されただけであった。

Kirovskiy Factory in Tankograd JSU-122 Heavy Howitzer

## JSU-122 重自走榴弾砲

ソ連自走砲のチャンピオン

全長	9.85m
全幅	3.07m
全高	2.48m
重量	45.5t
最大速度	37km/h
武装	122mm砲×1

1943年末、チャリヤビンスク工場は、JSU-152に、122mm砲を搭載した試作車を完成させた。砲身の交換で簡単に製作できることから直ちに生産が指示され、JSU-122となった。JSU戦車は、ドイツの重戦車か防御拠点の粉砕を任務としていたのに対し、JSU-122の方が対戦車戦闘力があったので対戦車任務につけられていた。1944年には、ドイツの新型ケーニヒスティーガーの情報を受けて、さらに長砲身型が試作されている。

Kirovskiy Factory in Tankograd JSU-152 Heavy Howitzer

## JSU-152 重自走榴弾砲

JS戦車ベースのアニマル・キラー

全長	9.18m
全幅	3.07m
全高	2.48m
重量	46t
最大速度	37km/h
武装	152mm砲×1

JS戦車の生産開始に伴い、KV戦車ベースのSU-152に代わり、新型重自走砲の開発が指示され、SU-152に似た戦闘室を持ったJSU-152が1943年末に完成した。SU-152に比べ車高が高くなったが逆に装甲は強化されていた。派生型JSU-122とともに重機械化砲兵旅団に配備された。JSU-152は、大火力を生かして防御拠点に対する突撃任務を受けることが多かった。1945年までにJSU-152、122合わせて4,075輦生産されている。

SU-122 Medium Self-propelled Howitzer

## SU-122 自走榴弾砲

T-34ベースの自走榴弾砲

全長	6.95m
全幅	3m
全高	2.32m
重量	30.9t
最大速度	55km/h
武装	122mm砲×1

SU-122は、T-34の車体に122mm榴弾砲を搭載した自走砲で、1942年冬に採用され、その年のうちに実戦に投入されている。ドイツ軍の突撃砲のように、歩兵の直協もしくはは防御拠点の火力増強に使用された。1943年には対戦車戦闘も可能な長砲身122mm砲を搭載したSU-122Pが試作されたが、T-34のシャーシはこれ以上砲の大型化に対応できず、生産されなかった。SU-122は1942年後半から1944年までに1,148輦生産された。

SU-152 Heavy Self-propelled Howitzer

## SU-152 自走榴弾砲

KVベースの対ティーガーI自走砲

全長	8.95m
全幅	3.25m
全高	2.45m
重量	45.5t
最大速度	43km/h
武装	152mm砲×1

SU-152は、強力な対戦車車輛を求めたソ連陸軍の要請により、KV-Iの車体の上に152mm榴弾砲を搭載したもので、KV-Sのシャーシを使用して作られた試作車はわずか25日で完成するという記録を作っている。ティーガーI戦車に対抗して製作され、1943年7月のクルスク戦から実戦参加した。全部で704輦生産されたが、JS戦車の生産開始に伴ってベース車輛をJS戦車としたJSU-152に取って代わられて行った。



SU-100 Tank Destroyer

## SU-100 駆逐戦車

ドイツ戦車キラーの一角獣

全長	9.45m
全幅	3m
全高	2.25m
重量	31.6t
最大速度	48km/h
武装	100mm砲×1

SU-100は、SU-85の発展型で、T-34の車体にD-10/100mm対戦車砲搭載した駆逐戦車である。1944年にT-34/85が生産されるようになると、SU-85にさらに強力な火力が要求された。そこで1944年型D-10S100mm砲を搭載した型が1944年9月から生産された。これがSU-100である。1944年11月より、65輛のSU-100が各親衛機械化砲兵旅団の、戦車駆逐大隊にSU-85とともに配備された。1,675輛生産。

Moscow Automaking Works ZIS-AA Anti-Aircraft Truck

## ZIS-AA

トラックに機銃を載せた簡易対空車輛

全長	6.06m
全幅	2.235m
全高	不明
重量	不明
最大速度	60km/h
武装	7.62mm機銃×4

ZIS-AAは、赤軍の対空防衛用に7.62mmマキシム機銃を4丁装備した4MシステムをZIS-5.3tトラックに搭載したものの。この他にGAZ-AA1.5tトラックにも4Mシステムを搭載した対空車輛があった。1931年から生産は始まり、1942年まで代表的な自走対空車輛であった。国産の対空車輛は終戦まで奮わず、1942年以降は、レンドリースによるアメリカ製M15A1自走高射機関砲やMI7自走高射機関砲にその任務を譲った。

ZSU-37 Anti-Aircraft Tank

## ZSU-37 対空戦車

ごく少数が戦に投入された本格的対空戦車

全長	不明
全幅	不明
全高	不明
重量	不明
最大速度	不明
武装	37mm機関砲×1

ドイツ空軍の攻撃による戦車の消耗を避けるため、1943年に37mm機関砲をSU-76のシャーシに搭載したZSU-37が試作された。最初の試作型はSU-76をベースとしていたが、トランスミッションの問題や砲塔旋回スピードの問題があって1944年に改良型SU-76Mのシャーシを使用して本格的に再設計された。結局ZSU-37は砲塔の問題から1945年に少数生産されただけだった。25mm砲搭載の派生型にZSU-25がある。

Moscow Automaking Works IAG-10AA Anti-Aircraft Truck

## IAG-10AA

簡易高射砲搭載自走砲

全長	6.06m
全幅	2.235m
全高	不明
重量	不明
最大速度	60km/h
武装	76.2mm高射砲×1

戦前のソ連軍の主力対空車輛はZIS-AAであったが、1940年にはIAGトラックの荷台に、76.2mmMI931高射砲を搭載した車輛が作られた。射撃中は車体につけられた4本のブームを展開して車体を固定した。本来対空車輛として作られたのだが、場合により地上戦の火力支援に投入されている。1940年に少数が生産されている。この他、ZIS-5トラックの荷台に25mmMI940機関砲を搭載したZIS-42という車輛も少数だけが作られている。

BM-13N Katyusha Multiple Rocket Launcher

## BM-13Nカチューシャ・ロケットランチャー

恐れられたスターリンのオルガン

データ不明

カチューシャは、1939年にZIS-5トラックの上に24連装のM-132ロケット砲を搭載した試作車が作られ、続いて様々なタイプの試作車が作られた後、最終的に16連装のものが1940年にBM-13-16として採用された。しかし独ソ戦開始時には40輦配備されただけだった。ドイツ軍はロケット砲の発射音から、スターリンのオルガンと呼んで恐れた。地域制圧用に最適だったため、終戦までに約10,000輦のカチューシャが作られている。

45mm M1932 Anti-Tank Gun

## 45mm M1932 対戦車砲

ドイツの37mm Pakを手本にした対戦車砲

口径	45mm
砲身長	2,5265m
重量	510kg
初速	760m/秒
射程	不明

ドイツのラインメタル社製3,7mm対戦車砲の拡大版で、全体的な構成は37mm砲と同様である。砲架は馬牽用のものと自動車牽引用の2種類存在しており、ホイールはリム式となっていた。ドイツ軍に捕獲されたものは4,5mm Pak 184(r)と呼ばれている。後期型のM1937は日本軍に捕獲されて後に一式47mm対戦車砲となった。1942年には、この砲の砲身を長砲身化して初速を向上した(初速820m/秒) M1942が作られている。戦後も長く使用された。

57mm M1941 Anti-Tank Gun

## 57mm M1941 対戦車砲

Pak フロントを形成した主力対戦車砲

口径	57mm
砲身長	4,162m
重量	1125kg
初速	1020m/秒
射程	不明

独ソ戦勃発時に部隊配備が始まった対戦車砲で、76.2mm M1941と同じ砲架を使用していた。後に改良されてM1943となったが、この際砲架も変更されて別のタイプの76.2mm砲のものになっている。終戦まで使用された。1973年になっても一部部隊で使用されていたようだ。ロシア軍の標準的火砲で、独ソ戦初期に前線で多数捕獲された。ドイツ軍では捕獲した57mm砲を5,7mm Pak 208(r)と命名して使用していた。

76.2mm M1942/SiS3 Anti-Tank Gun

## 76.2mm M1942/SiS3 対戦車砲

野砲から転身した対戦車砲

(M1936)	
口径	76.2mm
砲身長	4,201m
重量	1,730kg
初速	740m/秒
射程	10,400m

独ソ戦緒戦の経験をもとにソ連軍が作った野砲。それまでの主力だったM1939の砲身を、新設計の砲架に載せたもの。ソ連軍の76.2mm砲は、同時期の列強各国の野砲に比べ軽くて射程が長い(弾頭重量6,kgの榴弾なら13,200m)ことが特徴で、初速も速かったので対戦車任務にも使用できた。M1942/SiS3は1942年から終戦まで生産され、野砲部隊の主力となった。ドイツ軍も捕獲したこの76.2mm砲を、FK288(r)と命名して使用している。

76.2mm M1931 Anti-Aircraft Gun

## 76.2mm M1931対空砲

ソ連軍の代表的対空砲

口径	76.2mm
砲身長	4,191mm
重量	3,650kg
初速	813m/秒
最大射高	9,300m

ソビエト最初の標準的対空砲。デザインの多くをビッカース75mm高角砲からコピーしている。後に牽引方法を二輪式から四輪式に改良してM1938となっている。1941年には相当数のM1931とM1938が配備されていたが、独ソ戦が開始されると、他のソ連軍火砲と同様ドイツ軍に大量に捕獲された。ドイツ軍ではこの砲に7.62cmFlak M31(r)と命名して使用し、後にこの砲の内径を拡大して88mmとした高角砲も作っている。

85mm M1939 Anti-Aircraft Gun

## 85mm M1939対空砲

76mm対空砲の拡大改良型

口径	85mm
砲身長	4,693mm
重量	3,057kg
初速	800m/秒
最大射高	10,500m

基本的に76.2mm M1938高角砲の拡大改良型で1939年から部隊配備されている。KS-12としても知られている砲で、対戦車任務にも使用された。この時期のソ連軍火砲の中の、成功したものの一つとして知られている。ソ連国内のさまざまな工場で生産され、大戦を通じて、ソ連軍対空部隊の主力火砲として使用された。ドイツ軍でも、この砲を捕獲して使用し、後に、76.2mm対空砲と同様に、この砲も内径を削られて88mm砲になっている。

122mm M1938 Field Gun

## 122mm M1938野砲

152mm砲と共通部分の多い対野砲

口径	122mm
砲身長	2.8m
重量	2,250kg
初速	515m/秒
射程	12,100m

第二次大戦中のソ連軍の122mm砲は榴弾砲、カノン砲で5種類ほどが使用されていた。M1931カノン砲はソ連で最初に作られたオリジナルの122mm砲で、砲架は152mm M1934野砲のものが使用されている。この改良型A-19は152mm M1937野砲の砲架に載せられていた。

M1938は、最も成功した野砲のひとつで、1938年より大量に使用された。ドイツ軍に捕獲された122mm砲の多くは、大西洋防壁の防御用にフランスに送られている。

152mm M1938 Field Gun

## 152mm M1938野砲

対戦車能力も持つ重野砲

口径	152
砲身長	3.7m
重量	4,100
初速	492m/秒
射程	12,400m

1938年後半から部隊配備された重野砲。配備後すぐに効果的な野砲であることが証明されて、大量に生産、使用された。対戦車能力も付加されて開発されており、SU/JSUシリーズにも搭載されている。大戦中に改良されてM1943となった。一般に、ソ連の野砲は、ドイツ軍の野砲より優秀で、同級の砲兵戦ではアウトレンジから攻撃することができた。ドイツ軍も捕獲したこの砲を15.2cm FH443(r)と命名して使用した。

何か何でも

# 勝ちたくて…

## 敵司令部を蹂躙せよ！ その1

勝っていればの話だが、どんなシナリオでも、最終局面は敵司令部付近の攻防であり、敵司令部の破壊である（もちろん、その逆も）。

終盤になると、司令部の周囲にはグルリと敵ユニットが守っていることだろう。これを殲滅させたら、そのままにしないで、空いたヘックスに自軍のユニットを滑り込ませる。そのままにしておくとならぬ新たなユニットを生産してせっかく確保した地点が埋まってしまふからだ。また地上ユニットを進入させると、次の敵軍ターンで集中攻撃を食らうので、できれば航空ユニットがのぞましい。そしてもっとも大事なことは、4ユニットほどで、敵司令部を囲むまでは



あわてることはない。司令部は移動させないのだ。

決してこれを攻撃してはならないということ。1ユニットで攻撃しても与えるダメージはたかが知れている。これだと次ターンで回復してしまうからだ。

モスクワ正面にたどりついたときはすでに息絶え絶えで、ソ連軍の猛反撃を食らったドイツ軍の二の舞だけは避けるように！

## ソ連軍の歩兵部隊

人民の解放軍の実体

ソ連軍は徴兵制による歩兵部隊を主力としており、連邦国家内の構成民族の多種多様さによりさまざまな人種がこった煮となっていた。指揮官はロシア語を解するが、一般兵士はしゃべれないことも多かった。また、政治委員と呼ばれる監視兵が配置されており、指揮系統からも独立した存在だったため、しばしば指揮系統に混乱を招くことになった。

ソ連軍では一般に歩兵のことを狙撃兵とよび、戦功のある部隊には特別に親衛歩兵の名誉称号をつけることがあった。この点、諸国の親衛隊や近衛のような選抜した兵士を集めた部隊とは異なる。

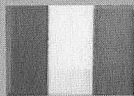
機械化歩兵も存在したが、歩兵の大半は戦車などの後部に搭乗して移動することが多く、トラックなどの移動手段を持った部隊は少なかった。この歩兵を戦車随伴歩兵と呼ぶが、その消耗は激しく、配属後の平均寿命は2週

間ほど、一回の大攻勢があればほとんどが戦死。ソ連の人的損害が他国とケタ違いであるのは、占領したナチスドイツの残虐行為のためだけではない。ちなみに、このころ結婚適齢期であった男性の多くが戦争で死亡したためにこの世代には未婚女性が多い。

特筆すべきはPPSh41短機関銃である。1941年より支給された大きな71発入りドラム式弾倉を有するこの銃は“バラライカ”と呼ばれ、ソ連得意の海戦術にもってこいの銃であった。

1941年の冬期モスクワ戦やレニングラード包囲戦では、多くの一般市民が動員され、都市の防衛任務についていた。

# フランス・その他



フランスは、軍備全般はドイツ軍を凌駕していたが、戦争に対して消極的であり、宣戦布告後も、報復を恐れてか、もしくは戦備を整えるのを待ってか、始終積極的な軍事作戦をとらずに、国防のほとんどを莫大な資金を投じて構築したマジノ要塞に賭け、敗れた。

陸軍の戦車は、性能データではドイツのそれを凌いでいたが、歩兵支援にのみ運用され、無線すら記していない状態では、各個撃破の対象となるだけであった。

第一次大戦では航空先進国であったフランス空軍も、大戦間ドイツの3,500機に対し五角の3,600機であったが、うち第一線機と呼べるものは900機程度であり、友邦英空軍の敢闘ぶりに比較して、国境線を越える出撃はわずかであり、地上部隊の阻止攻撃に出撃しては、Bf109に捕足され撃破されていた。

仏政府降伏後は、ド・ゴールの呼びかけに応じ、自由フランス軍となり連合国の一軍として各地を転戦している。

MoranSaulnier MS406 Fighter

## モランソルニエ MS406

第二次大戦開戦時のフランス空軍主力戦闘機

全長	8.15m
全幅	10.6m
出力	860hp
全備重量	2,435kg
最大速度	485km/h
武装	20mm機銃×1 7.5mm機銃×2

1934年の要求仕様に基づいて作られた戦闘機MS405の発展型で、MS405のエンジンを強化した上各部をリファイン、1938年から生産が開始されている。風雲急を告げるヨーロッパ情勢の中一挙に1,000機の発注があり、またフィンランドを初めとした中小国へも輸出されている。しかし、第二次大戦時にはすでに旧式化しドイツ軍機には歯が立たなかった。1940年、フランスの降伏で生産は終了したがそれまでに1,098機生産された。

Dewoitine D520 Fighter

## ドボワチン D.520

独エースのメルダースを撃墜した戦闘機

全長	8.76m
全幅	10.18m
出力	910hp
全備重量	2,780kg
最大速度	529km/h
武装	20mm機銃×1 7.5mm機銃×4

1937年に試作が指示されたフランスの戦闘機で、最初の試作機はなかなか要求性能を達成できず、エンジンを強力なものに換装してようやく、1939年に採用された。第二次大戦の勃発もあって大量に発注されたが生産は進まず、1940年になって部隊配備が始まっている。機動性が高く、また良好な操縦特性でフランス戦闘機としては最も高い評価を受けた。休戦後も主力として使用され、解放後は再びドイツと戦火を交えている。



Potez 631 Fighter

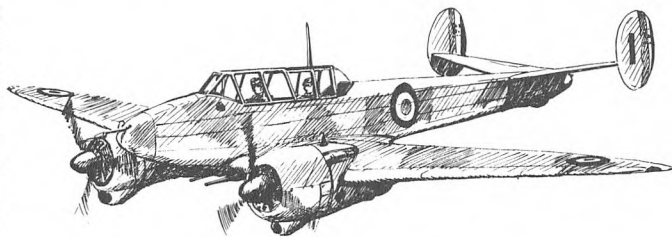
# ポテ631

さまざまな用途に使用された仏双発戦闘機

全長	11.07m
全幅	16m
出力	660hp×2
全備重量	3,916kg
最大速度	460km/h
武装	20mm機銃×2 7.5mm機銃×1

1934年の試作要求による2座あるいは3座の双発多目的戦闘機として開発された機体で、1936年に試作1号機が完成している。最初に作られたのはイスパノエンジン搭載の630だったが、すぐにノームローンエンジン搭載の631が作られている。631は、215機生産され、夜間戦闘機飛行隊に配備された。爆撃機としても有効と判断した空軍は軽爆撃機として633の名称をつけて採用したが、こちらは71機の生産にとど

まっている。また、海軍も急降下爆撃機として試験を行っている。ポテ630は多くの派生型があり、偵察型のポテ637、機首を大幅に改修した戦術偵察／支援型のポテ63.11などが作られている。ポテ63.11は723機と630シリーズ中最多生産数を誇る。



LioretOlivier LeO451 Bomber

# リオレ・エ・オリビエ LeO451

フランス随一の高速爆撃機

全長	17.17m
全幅	22.52m
出力	1,030hp×2
全備重量	11,400kg
最大速度	495km/h
武装	20mm機銃×1 7.5mm機銃×2 爆弾1,000kg

1936年に空軍が要求したB4計画を基に試作された爆撃機で、試作当初最速の爆撃機であった。1937年に試作機が完成、エンジンのオーバーヒート問題に悩まれたが別のエンジンに換装、試作型は1938年にフランスの爆撃機として初めて500km/hを越えた。1939年から生産型が引き渡されており、ドイツ軍のフランス侵攻までに222機が生産された。降伏した後も生産は続けられ、1943年までにさらに109機が生産されている。

Fokker D21 Fighter

# フォッカー D21

Bf109の敵でなかったオランダ機

全長	8.2m
全幅	11m
出力	760hp
全備重量	2,050kg
最大速度	460km/h
武装	7.92mm機銃×4

1936年に開発されたオランダの戦闘機で、固定脚、単葉の機体だった。フィンランド、スペイン、デンマーク等がライセンス生産しており、中でもフィンランドでの活躍が有名。フィンランドは90機のフォッカーD21を生産し、P&Wのツイン・ワズプエンジン(1,050hp)を搭載していた。ドイツ軍の侵攻までに39機が生産されていた。当初は645hpのプリストル・マーキュリーエンジンを装備していたが後に760hpにパワーアップされている。

Renault R35 Light Tank

## ルノーR35 軽戦車

フランス軍歩兵部隊主力軽戦車

全長	4.02m
全幅	1.85m
全高	2.1m
重量	9.8t
最大速度	20.5km/h
武装	37mm砲×1 7.5mm機銃×1

ルノーR35は、1933年8月に開始された歩兵支援用新型軽戦車開発計画に沿って開発された。1935年にオチキス社のH35との比較審査の後、こちらが採用されて歩兵支援用軽戦車となった。1940年の対ドイツ戦開始までに1,611輛が完成している。砲塔はオチキスH35と同じAPX-R型と呼ばれる物を搭載しており、生産性の向上に貢献している。分割された鑄造車体をボルト止めて生産されるため、曲面構成の特徴ある外見を持っていた。

Hotchkiss H35/H39 Light Tank

## オチキスH35/H39 軽戦車

騎兵改編の軽機械化部隊主力軽戦車

全長	4.22m
全幅	1.85m
全高	2.14m
重量	12t
最大速度	27.8km/h
武装	37mm砲×1 7.5mm機銃×1

ルノーR35同様1933年の新型軽戦車開発計画で試作された戦車で、当初はエンジンのパワー不足で不合格となったが、改良されて騎兵戦車として採用された。R35同様鑄造方式の車体と砲塔を持つ。1939年9月までに625輛生産された。1938年にはエンジンを強化したH38が作られ、1,080輛生産され、翌年にはそのH38の主砲を長砲身の37mm砲に換装、H39として対ドイツ戦まで770輛生産された。H35/H39は専ら騎兵部隊に配備されていた。

Somua S35 Medium Tank

## ソミュアS35 中戦車

使いこなせなかった優秀戦車

全長	5.38m
全幅	2.12m
全高	2.624m
重量	19.5t
最大速度	45km/h
武装	47mm砲×1 7.5mm機銃×1

1934年に騎兵戦車として開発された。翌年に完成した試作車は良好な成績を収め、直ちに採用されている。S35は、このころのフランス戦車の特徴として分割された鑄造部品をボルトでつないでできていた。このため量産性は高かったが、被弾するとボルトの結合部から破損して分解してしまうという意外な欠点が露出した。質的にも当時のドイツ戦車と対等に戦える戦車だったが、1940年5月の時点で416輛しか配備されていなかった。

Char B1/B1 bis Heavy Tank

## シャルB1/BIS ビス重戦車

超重戦車駆逐の産物、多砲塔の怪物戦車

全長	6.52m
全幅	2.5m
全高	2.79m
重量	32t
最大速度	28km/h
武装	75mm砲×1 47mm砲×1 7.5mm機銃×2

シャルB1は、第一次大戦中の突破戦車に着想を得た15t戦車が基になった、75mm砲装備の重戦車で、1929年に試作車が完成した。開発は秘匿され、トラクター30という暗号名で呼ばれていた。モックアップの段階で大型化、最終的に32tという重戦車になっている。1934年に正式採用され、7輛が作られた。続いてB1のエンジン出力を向上し、武装を強化、装備を近代化したB1ビスが登場し、1937年から生産されている。

PanhardAMD178 Armored Car

## パネルAMD178 装甲車

ドイツ軍でも使用された仏装甲車

全長	4.7m
全幅	2.01m
全高	2.3m
重量	8.2t
最大速度	72km/h
武装	25mm砲×1 7.5mm機銃×1

1926年に試作されたAMD165/175装甲車の経験を基に製作されたTOE-M-32装甲車をさらに発展させたのがAMD178で、1934年から試験を受け、結果が良好だったため採用されて騎兵部隊や偵察部隊に配備された。一部の車輛は主砲の25mm砲に替わり7.5mm機銃を装備した物もあった。

1940年のドイツ軍侵入時には360輛が配備されていた。ドイツによる占領後はかなりの数がドイツ軍に接收されて使用されている。

25mm Anti-Tank Gun SA-LM1934

## 25mm34SA 対戦車砲

フランス軍の代表的な小型対戦車砲

口径	25mm
砲身長	1.8m
重量	496kg
初速	918m/秒
射程	1,800m

1939年から1940年にかけての標準的なフランス軍の軽対戦車砲。少数はフランスに派遣されたイギリス軍にも供給されている。しかし、砲弾重量が軽く、射程も短かった。この後の戦車の進化に対応できるパフォーマンスを示さなかったため、この砲をより軽量化したM1937型が登場しても、能力的には大差ないものになった。対ドイツ戦終了後も、能力不足からドイツ軍でもあまり使用されなかった。

75mm Field Gun

## 75mm 野砲

世界各所で使用された代表的野砲

口径	75mm
砲身長	2,720mm
重量	1,140kg
初速	675m/秒
射程	11,100m

1897年にシュナイダー社が開発した野砲。最初に砲口制退器を採用した砲で、極めて多くの数が生産され、フランスばかりでなく日本やポーランドなど、各国で使用された。

この他に初速575/秒、射程11,100mの75mmカノン砲が作られたが、これは1939年から1940年の間にわずかな数が作られたに過ぎない。他のフランス軍火砲同様、降伏後はドイツ軍でも使用され、海岸防衛や地方の守備隊で使用されている。

105mm Field Gun

## 105mm 野砲

中量火砲の主力野砲

口径	105
砲身長	2,09m
重量	1,722
初速	465m/秒
射程	10,700m

フランス軍における105mm砲は、1934年に生産が開始されたシュナイダー社製の榴弾砲と1935年生産のブルージュ工場の105mm榴弾砲(1939年の段階で410門配備)に加え、1936年から生産されたシュナイダー社製のカノン砲の3種が主力だった。

カノン砲は1939年の段階で159門が部隊に配備されていた。対ドイツ戦後、大量に捕獲されたフランス軍野砲は、その多くが沿岸防衛に使用されることになる。

Tochka

## トーチカ

コンクリートで囲った防衛拠点

ロシア語で「点」を意味するコンクリート製丸型天井を持つ銃座のことで、防衛陣地の中での火力拠点を構成する。このようなトーチカや火力拠点を複数組み合わせることで歩兵による陣地をかためたものが、一般に要塞と呼ばれるものであった。

トーチカは防御力が強く、爆撃や砲撃ではなかなか破壊できなかった。そのため頑強に抵抗するトーチカは、歩兵による肉薄攻撃や火炎放射による攻撃以外は、ほとんど撃破されることはなかった。

第二次大戦では装甲集団による機動突破戦術が編み出されたので、トーチカをはじめとする防衛陣地は強いてこれを攻撃する必要が薄くなり、日露戦争や第一次大戦のほど脅威的な存在ではなくなった。

The Coast A Battery

## 沿岸砲台

コケおどしに終わった大喧嘩要塞

主に敵艦船との交戦を考えて沿岸に造られた大型のトーチカといえるもの。大口径のカノン砲を主砲とし、強力に防御された施設に設置されていた。しかし、対艦艇用であったため主砲は海を向いており、地上からの攻撃には弱かった。

大西洋ではドイツ軍が連合軍の上陸に備えてフランスの沿岸に設置した大西洋の壁と呼ばれたものが有名だが、その使用火砲はフランスやロシアなどの捕獲火砲が多く、実際の主任務である対艦攻撃力はほとんど期待できなかった。実際は上陸用舟艇への攻撃効果はあったが、そうした敵前上陸を行うケースでは、敵は圧倒的な航空優勢下と、艦船からの支援砲撃が見込めるので、沈黙してしまうのが常であった。

ARaderBase

## レーダー基地

英国を救ったもう一方の立役者

物体に無線波を反射させて距離を測定するレーダーを装備した施設のこと。レーダー技術に関しては先進国であったイギリス軍は、レーダーによる早期警戒網を作り、これと中央管制を組み合わせた防空システムを完成していた。バトル・オブ・ブリテンでは、このシステムにより限られた迎撃戦闘機隊を効率よく運用することに成功、ドイツ軍の空襲からイギリス本土を守りきった。

イギリスからの技術供与を受けたアメリカ軍のレーダーは真珠湾に殺到する日本軍機を捉えている。対潜警戒、夜間戦闘機の目標索敵など応用例は多数ある。また、末期には射撃管制と組み合わせることにより、絶大な命中精度を誇った。

SchutzengelFlakTower

## 高射砲塔

陸の対空要塞

高射砲などの防空火砲を組み合わせた施設。主として工場や主要都市など、重要拠点の防空用に配置されていた。ドイツのベルリンに設置されたものが有名である。基本的には大型の高射砲数門に、近接防御用の小型高射機関砲を数十基備え、爆撃に対しても防御されたものになっていて、当然ながら地上からの攻撃に対してもある程度防衛拠点的な力があった。

ベルリンには、レーダー塔と対になった高射砲塔が4基建設され、12.7cm高角砲8門、20mm機関砲48門と、防空駆逐艦以上の対空射撃力を誇った。

どんな時も

# 勝ちたくて…

## 敵司令部を蹂躙せよ！ その2

敵司令部に対する攻撃力は歩兵ユニットが抜群に優れている。これは建物内での戦闘となるからという設定なのだ。当然、敵司令部は歩兵ユニットでグルリと囲んでおもしろに攻撃をかけたいところだ。

ただ、大勝利を狙うシナリオや、すでに制限ターンが残り少ない状況では、そう悠長なことを言っている場合ではない。

さて速攻で落とした場合は、足の長い航空ユニットの攻撃機を中心に猛攻をかける。どんな頑強な司令部でも、1ターンで5～6回攻撃すれば破壊できる。当然、帰還は最初から考えない。ただ、司令部付近は対空兵力が充実していることがよくあるので、成功は難しい。



野砲はかなり強力な火力を有する。強切れには気をつけよう。

余裕があるなら、野砲（榴弾砲）がオススメだ。訓練値が高い野砲ならかなりダメージをあたえることができるし、これらは損害を被らない。ただし、野砲ユニットの周囲には、戦車や航空ユニットで守ってやること、また野砲もできるかぎり多く用意することが肝心だ。

Maginot Line Fortress

## マジノ要塞

西欧20世紀版、万里の長城

1930年から35年までの間に、ドイツ・フランス国境のルクセンブルクからスイス国境にかけて建設されたフランス防衛の大要塞。

3個の独立した要塞帯で構成されており、それぞれが相互に援護しあう構造になっていた。これらの要塞の建設には、約70億フランを要した。

1940年のフランスの戦いでは、ルクセンブルクのアルデンヌの森を突破したドイツ軍の電撃戦により、後方を遮断されまったく活躍する事なく終わっている。それどころか、自軍の精兵をご丁寧にもコンクリートに閉じこめておく結果となった。ハードウェアに頼り過ぎると思考が硬直する好例である。

Eben Emael Fortress

## エバンエマール要塞

空挺部隊に制圧された要塞

ベルギーのアルペール運河防衛ラインの戦略的要所に位置した、同国の近代的要塞である。

1940年5月のドイツ軍西部戦線侵攻で際して、1,200名の守備兵で守りを固めた。もし、攻撃を受けたとしても、1週間も守るだろうと、連合軍側は目論んでいた。が、グライダーに分乗したドイツの空挺部隊たった78人の攻撃を受け、その特殊爆薬のため、無力化してしまい、空爆、地上部隊の攻撃によりあえなく降伏。1日しか持たなかった。



Old Type Battle-Ship

## 旧式戦艦

時代遅れの無用の長物

海上決戦兵力の主力であった戦艦も、第二次大戦中、各国で使用された戦艦の多くは、第一次大戦時の戦艦を近代化して使用し続けたもので、すでに旧式化しており、対艦攻撃力はともかく、速度や航空機に対する防御の点で遅れていた。

航空決戦が海戦を左右する時代に入ると高速の空母部隊に低速の戦艦群は随伴できず、したがって第一線での華々しい活躍はなかった。一部高速の巡洋戦艦が、高速を利し、空母機動部隊の護衛任務に従えた程度である。

特に太平洋の戦いでは、日本の戦艦はほとんど動かず、アメリカの戦艦も上陸支援時の掩護射撃や、高地上基地への艦砲射撃に使用されただけであった。もっともそうなると口径が大きい戦艦の主砲は威力を発揮したが、

制空権があつての話である。

ヨーロッパでは空母の発達が遅れていたため、以前主力艦の地位を占めていたが、通商破壊や存在脅威戦術に使用されたのみで、大々的な活躍はこちらもほとんどなかった。戦後に生き残った戦艦も、すぐに解体されるか、標的などの任務を与えられて早々に消えていった。

戦艦はすでに無用の長物だったのである。

Heavy Cruiser

## 重巡洋艦

航空時代のポスト戦艦役を担った艦船

重巡洋艦は、第一次と第二次大戦の間に結ばれたロンドン海軍軍縮条約の規定によって生まれた軍艦で、戦力的には戦艦のすぐ下にくる有力艦であり、第二次大戦前までに各国で整備されていた。

主な任務としては、海戦において偵察、索敵、警戒、艦隊指揮、そして主力とし砲戦、魚雷戦を交える。第二次大戦では水上機を搭載し速力に優れることから、空母機動部隊の中心的な護衛艦であった。また艦隊の旗艦としての通信等の設備が整っている艦も多くあった。日米空母機動部隊の戦力が消耗したソロモン海域での戦いでは、艦隊の旗艦、文字通り主力として、激戦を演じている。

軍縮条約では、排水量10,000t以下の制限があったため、設計ではどこかが犠牲になら

ざるを得ず、各国の巡洋艦はその用兵思想によりいくつかの特徴があった。

イギリスでは、植民地防衛の目的が濃く、武装などの装備よりも、航続距離の増大に注意が払われていたし、日本とイタリアの重巡洋艦は艦隊決戦用のために高速で重武装だった。ドイツの重巡洋艦は船団攻撃を主任務するところから、特に大型で、準戦艦に近いもので、航続力・速力に勝れていた。

大戦中では重巡洋艦の多くは低速の戦艦に代わり、主力部隊の護衛や艦隊の旗艦任務などをこなし、主力として活躍した。ドイツでは通商破壊にも投入されている。

Light Cruiser

## 軽巡洋艦

### 七面六臂の活躍を見せた主力艦船

重巡洋艦と同様ロンドン条約で発生した艦種で、主砲に15.5cm砲を搭載した艦艇は軽巡洋艦とされた。排水量は5,000~10,000t弱程度であった。

主に軽巡洋艦は、それまでの巡洋艦と同様の、駆逐艦などの水雷部隊の先頭に立って突撃し、相手側駆逐艦などの排除を目的とした艦艇だったが、この任務を軽巡洋艦にはっきり持たせていたのは、水雷戦隊を重要視していた日本海軍くらいのものであった。

巡洋艦にはこの他練習巡洋艦、潜水艦隊旗艦用の軽巡洋艦などがあったが、いずれも少数の使用に止まっている。また、アメリカ海軍のように、船体を重巡洋艦と共通とし、主砲を取り替えるだけで艦種が変えられるような、ボーダーレスの艦艇が登場している。

また時代の要請から、第二次大戦中には、アメリカのクリーブランド級など、魚雷すべてを取り払い、主砲すべてを対空砲とした防空巡洋艦が生まれている。

軽巡洋艦は、偵察、哨戒、索敵、水雷戦隊や潜水艦隊指揮、戦艦や空母など主力艦の護衛、船団護衛など、重巡以上に幅広い任務が与えられ、便利な多用途艦として大戦中、大活躍した。

Destroyer

## 駆逐艦

### 1隻の戦艦より、2隻の駆逐艦

19世紀末に開発された艦艇。本来は魚雷艇の駆逐を目的として開発された艦種だったが、大型化し、武装も強化された結果魚雷も搭載でき、艦隊について来ることが可能になって、次第に水雷艇の任務も引き受けるようになって行った。さらに任務は、大型艦や輸送船団を護衛しての対潜水艦、対航空機、対水上艦艇戦闘と数限りなくあり、輸送船の代わりに使用されている。

第二次大戦では、適当なサイズに適当な武装をもち、また生産性も高かったため各国で大量に作られ、主力として艦隊護衛や魚雷攻撃の他艦隊防空やレーダービケット、船団護衛や対潜攻撃など、さまざまな任務に使用された。太平洋を中心に数限りなく海上戦闘が行われたが、駆逐艦不在の海戦はほとんど無

かったと言われている。まさに必要不可欠な艦船だったのである。

末期にはそれぞれの任務専用の駆逐艦も作られている。その他、ドイツの大型駆逐艦のように、軽巡洋艦とほとんど区別のつかないような艦もあった。駆逐艦はその後、戦後から現在に至るまで海軍の主力艦艇として生産されている。

駆逐艦には艦隊戦用の通常駆逐艦と、性能が落ちるが大量生産がきいた船団護衛のための護衛駆逐艦とに大別できる。

Submarine

# 潜水艦

## 神出鬼没の海の狼。防衛力は0

第一次大戦で初めて大量に使用された潜水艦という新兵器は、ドイツ海軍の通商破壊活動艦としての活躍によって認知され、戦後は各国で配備された。

しかし、まだ技術的に未熟な部分も多く、潜水艦というより可潜艦といった性能しか持っていなかった。つまり、平常は他の艦と同様に海上を運航し、警戒体制に入って初めて水面下に潜るのである。

それでも、大量に投入されたドイツの潜水艦は、第一次大戦と同様の通商破壊作戦で、イギリスを経済的に干上る寸前まで苦しめたし、日本の経済を破壊したのもアメリカ潜水艦の活躍だった。また、偵察潜水艦として極端に発達した日本の大型潜水艦は航空機を搭載していた。また艦隊決戦のために強力な

攻撃力を有していた。

実戦では、大西洋上で連合軍の輸送船団(コンボイ)とドイツ海軍のリボートの壮絶な死闘が繰り広げられた。

太平洋では、アメリカ潜水艦が日本の輸送船団を完膚無きほどに叩きのめした。前線へ補給物資も兵員も遅れず、確保した南方や大陸の資源も国内に輸送できない状態であった。B-29による戦略爆撃以前に、シーレーン防衛に失敗した日本の産業界は枯渇し、継戦能力は喪失していたと言える。

戦後は原子力の実用化によって長時間の潜水活動が可能で、文字通り潜水艦となり、現在も各国の攻撃の主力として配備使用されている。

Light Aircraft Carrier

# 軽空母

## 戦時急造のスーパーサブ

排水量が戦艦並みの大型正規空母の建造には時間と資材がかかるため、これを補助するために巡洋艦などの比較的大型の高速艦艇の上部に飛行甲板を設置したものを、軽空母と称する。

搭載機数は20機〜50機程度と少なかったが、大型空母を補助して活躍した。

日本では緊急時には潜水母艦などの軍艦から軽空母を作れるよう、軍艦を調達しており、実際にこのような経緯で完成した日本の軽空母は、戦争中盤の空母不足を補っていた。

またこの他に商船を改造した軽空母を使用したが、航空機を射出するカタパルトが実用化できなかったため、航空機輸送艦的な運用しかできなかった。

一方、カタパルトを装備したアメリカの商

船改造の手法を用いた護衛空母は、船団護衛での航空機による対潜警戒の有効性を実証した。また、最前線で敵機動部隊と戦うのならなく、上陸支援や対地攻撃任務などには、別に低速で防御力が低くとも、プラットフォームとしての使命は充分に果たしうるのである。アメリカのカサブランカ級は、一年間でなんと50隻も大量建造されている。このタイプは、1944年からの太平洋の島嶼攻略に大活躍を見せた。

が、あくまでも戦後は搭載機の大型化に対応できず、多くはスクラップにされた。